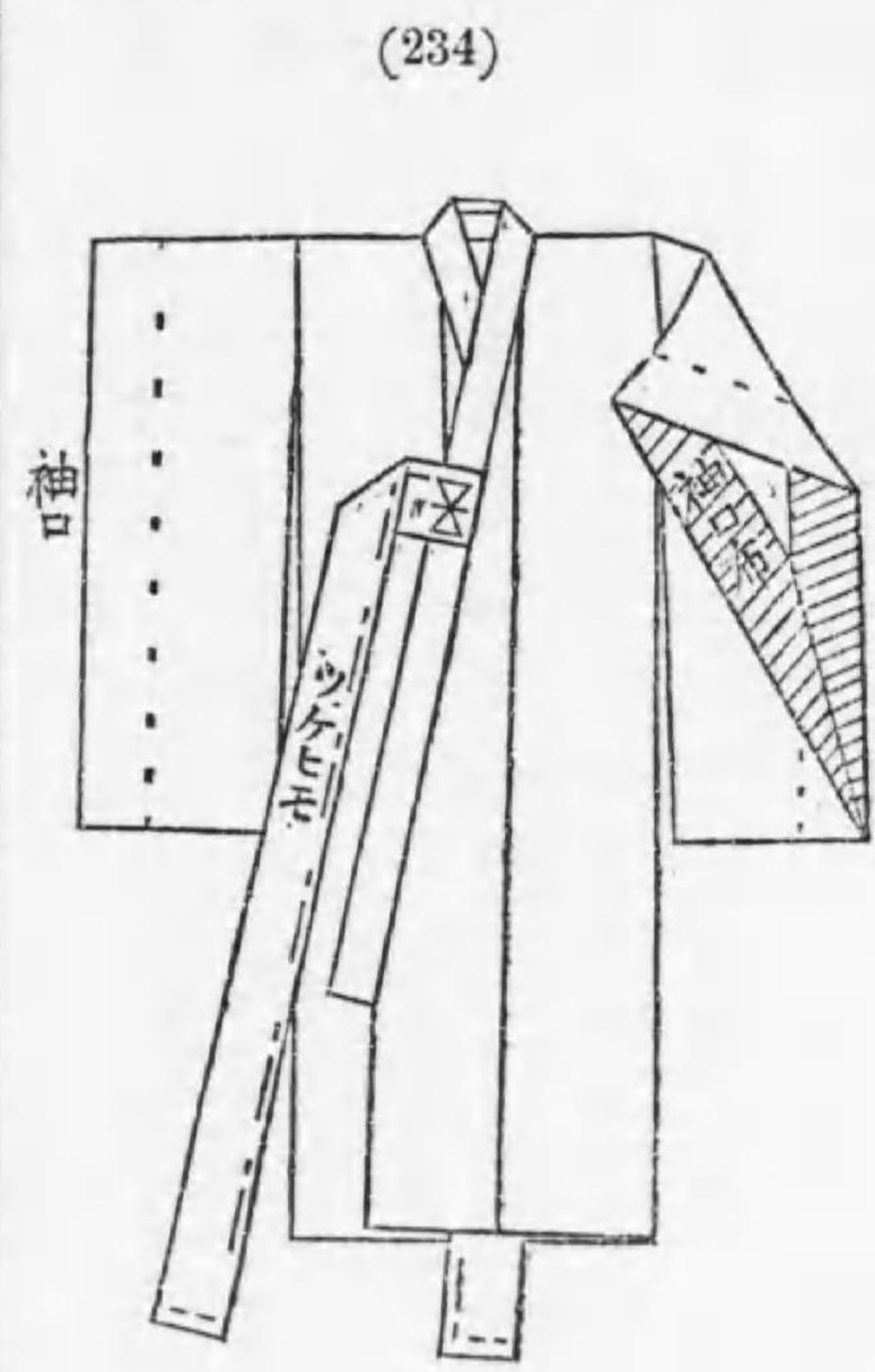


袖丈、一尺七寸 身丈、二尺八寸 衿肩明き、一寸八分 衿下七寸。

一つ身單衣

一つ身とは、襦を一布で取るから名づけたもので、通常初生兒より、二三歳位までの小兒の、著用に適するものである。各部の名稱。



用布。

(イ) 潤袖。九尺より一丈三尺。

元祿袖、筒袖。九尺より一丈。

(ロ) 肩當て用布。常幅一尺。裏衿、一寸五分幅、丈は表に同じ。

(ハ) 附け紐用布。四つ身に同じ。

(ニ) 袖口布。常幅四つ割りで丈は袖と同寸。

普通仕立上げ寸法。

袖丈、一尺二寸五分 袖附け、四寸 袖幅、五寸 身丈二尺内外

身八つ口、二寸五分 衿肩明き、一寸 衿下り、二寸五分 肩幅、後

幅、前幅、いづばい 衿下五寸 衿幅二寸五分 相袂幅衿幅より

一二分引く 衿幅八分より九分 衿、いづばい 紐附け六寸五分。

裁ち方、積り方。

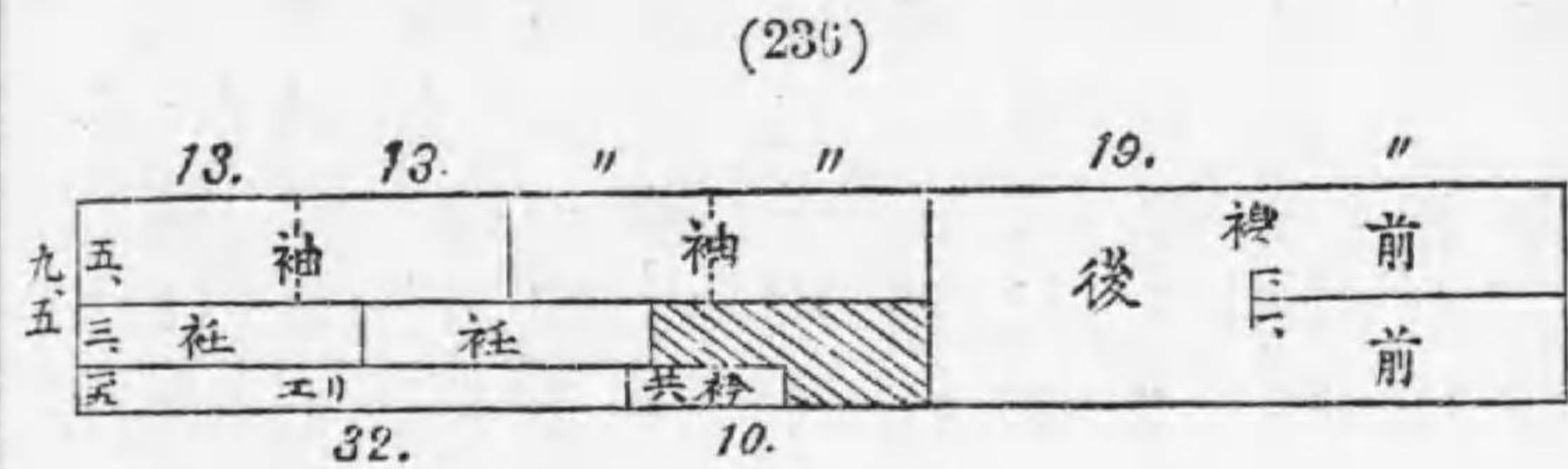
常幅九尺五寸の布を以て、一つ身單衣の、裁ち方積り方。(三三三六圖)

裁ち切り寸法。

袖丈、一尺三寸 衿肩明き一寸 衿下五寸。

標の附け方。(三三七、三三八圖)

縫ひ方。

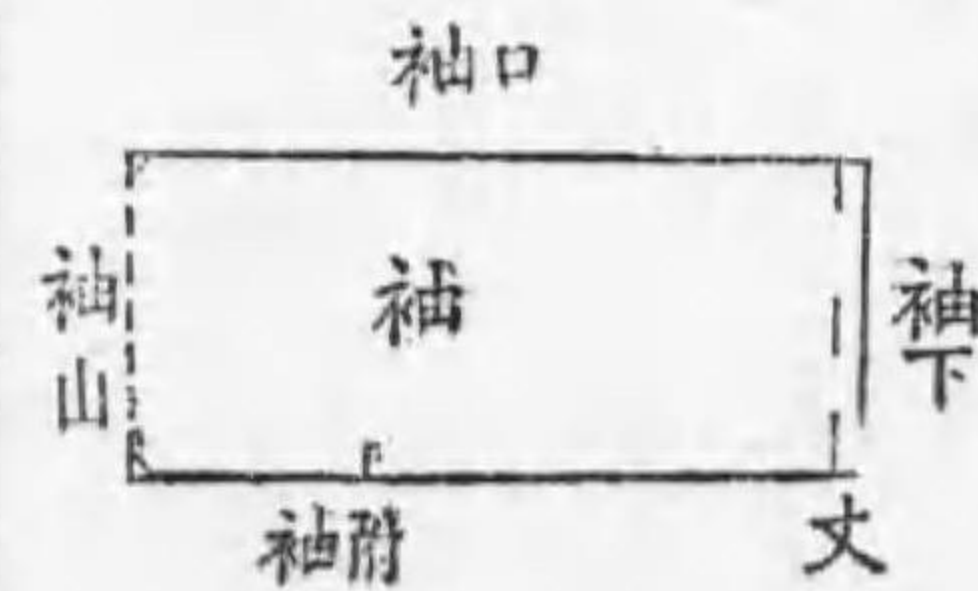


積り方方式 (總尺-袖丈×4)÷2=身丈
 身丈-衿下り=衿丈
 (身丈-衿下+衿肩明き+縫代)×2=衿丈

積り方算式 (95-13×4)÷2=19
 19-2=17
 (19-5+1+1)=32

(237)

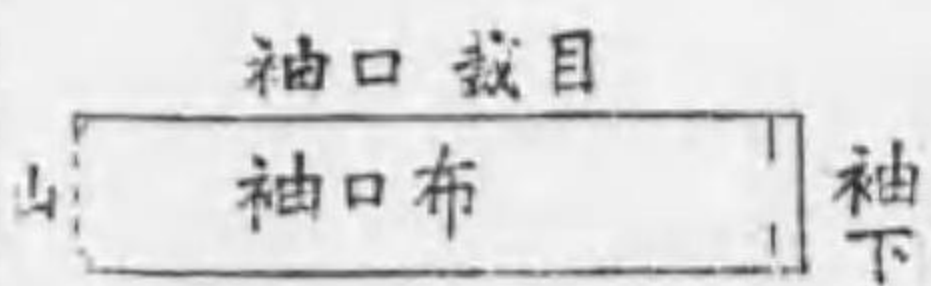
(袖) 中表に二枚合せて、丈を二つに折る



1. 丈を裁ち揃へる
2. 山
3. 丈(上り袖丈+.1)
4. 袖附

(238)

(袖口布) 中表に二枚合せて、丈を二つに折る



1. 丈を裁ち揃へる
2. 山
3. 丈(表袖丈標-.05)

(衿) 背に縫目のなきと、寸法の差があるのみにて、本裁ち女單衣に同じ

(衿、衿) 寸法に差あるのみにて、本裁ち單衣に同じ
衿は裏衿を接ぎ合せてから、丈の標を附ける

(一) 袖、潤袖

(イ) 袖口に、袖口布を合せて、袖の方を見て縫ひ、折りは袖の方に返す。

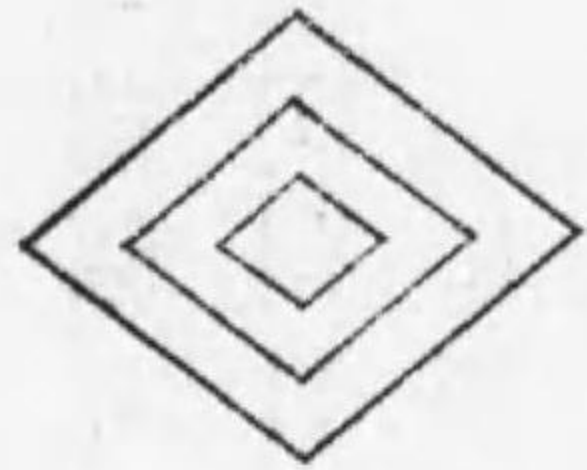
(ロ) 袖下を、袖附けの方は、袖幅の縫ひ込みの二倍だけ、口先きの方は、袖口布の出来上りの幅だけ残して、表を外にして、浅い縫ひ代で縫ひ、折りを附けて裏を出す。

袖下の丈標を合せて待ち針をさし、振り八つのはしより、袖口布のはしまで縫ひ、折りを附けて表返す、袖口の合せ目にては、よく糸どめをなし、袖口布は表と色の變つた場合は袖口布と同じ色系で縫ふ。

(ハ) 袖口を正しく毛ぬき合せとし、袖口布の幅を折りて、三四分の針目で紵け附ける。

(ニ) 袖幅標をなす。

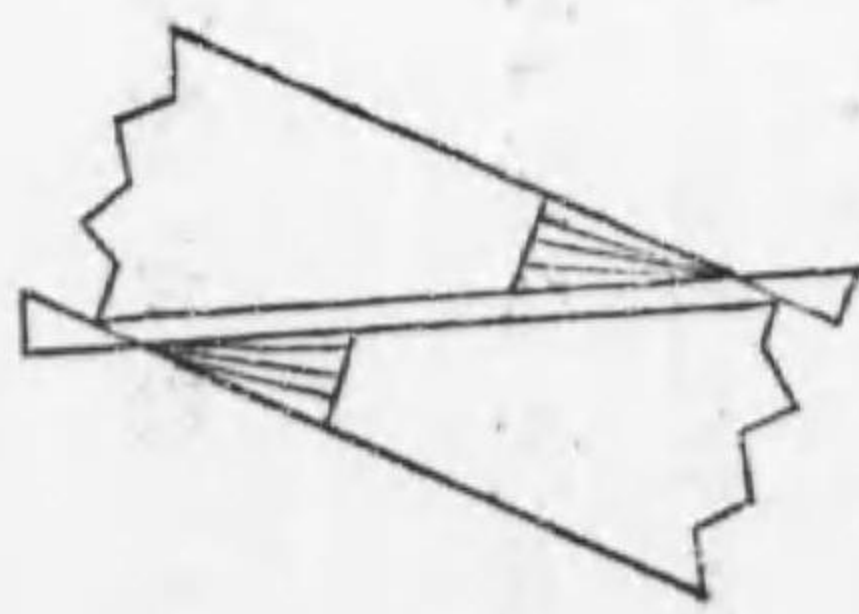
(251)



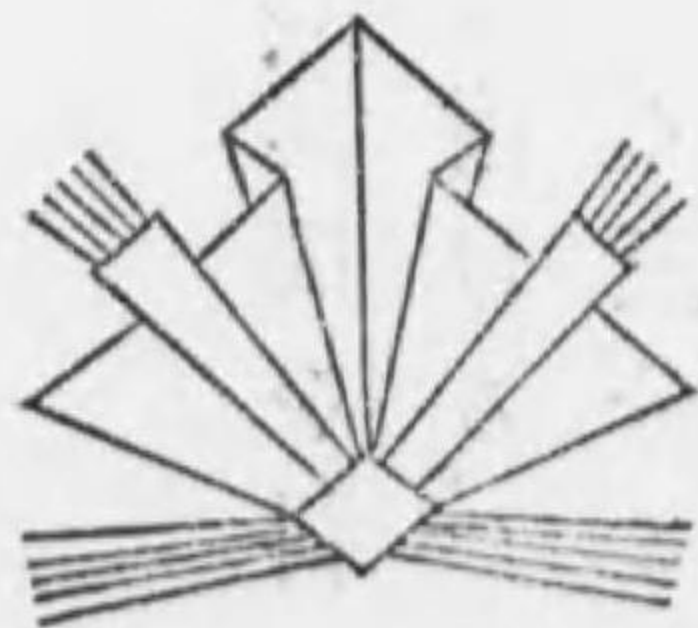
(252)



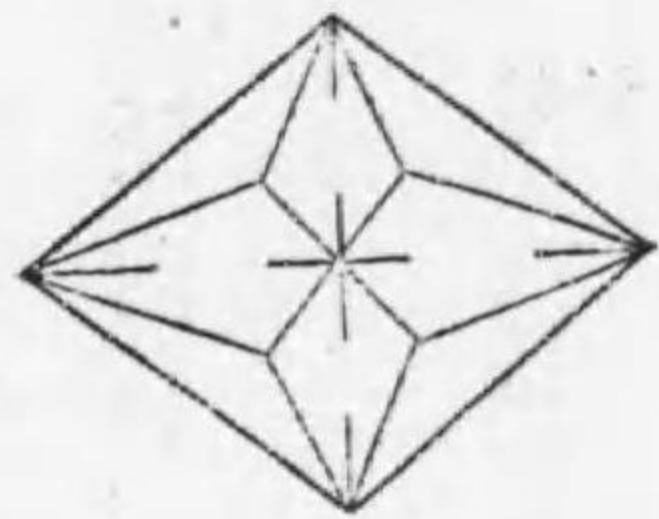
(253)



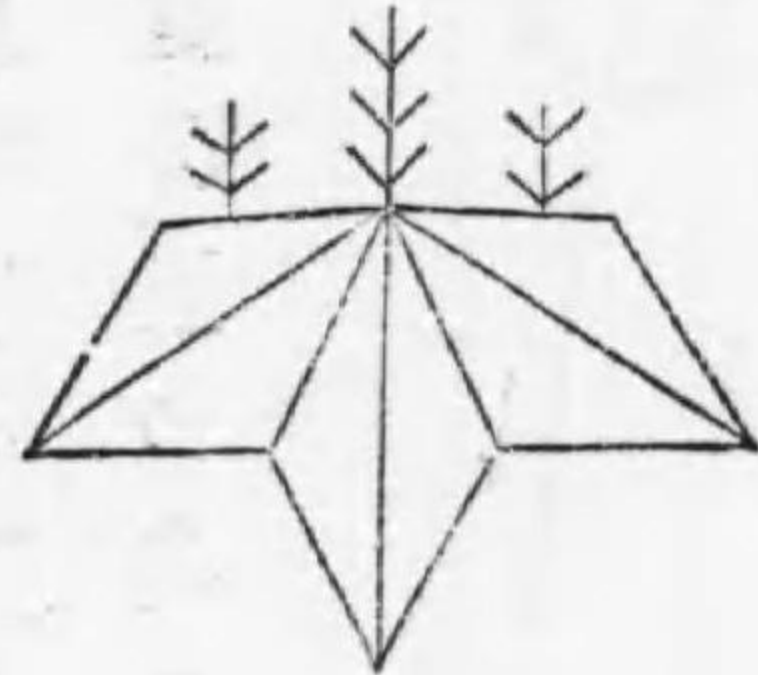
(254)



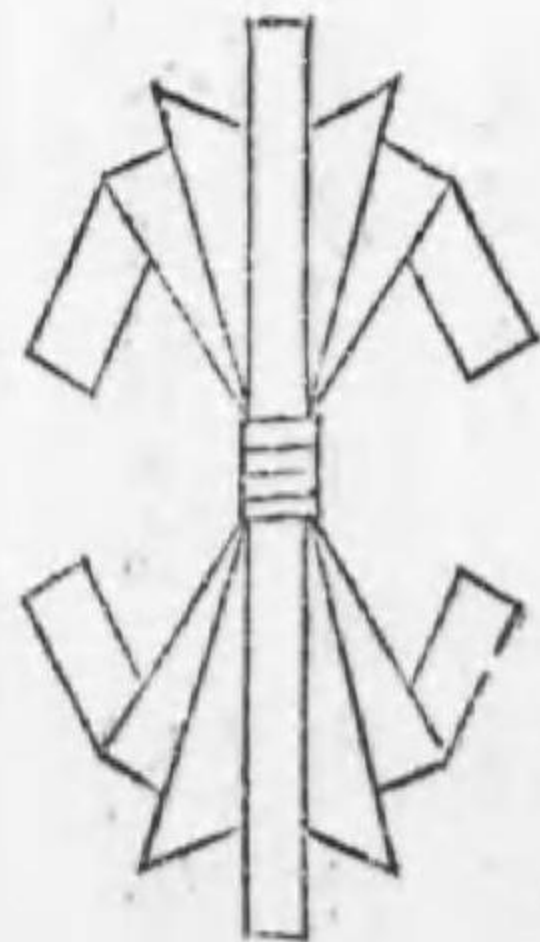
(247)



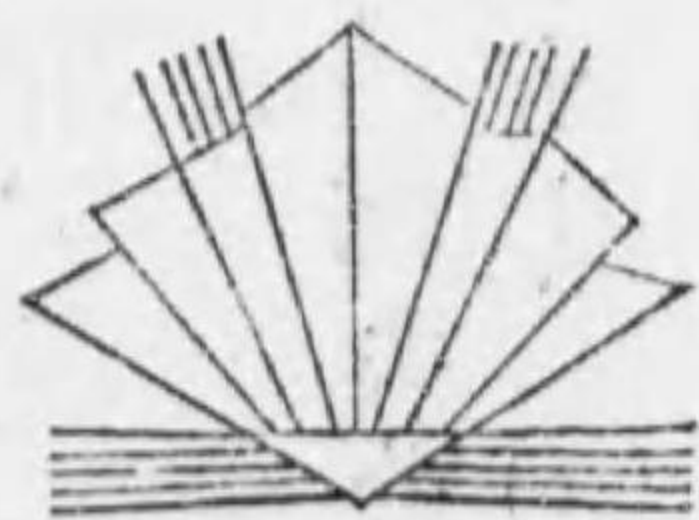
(248)



(249)

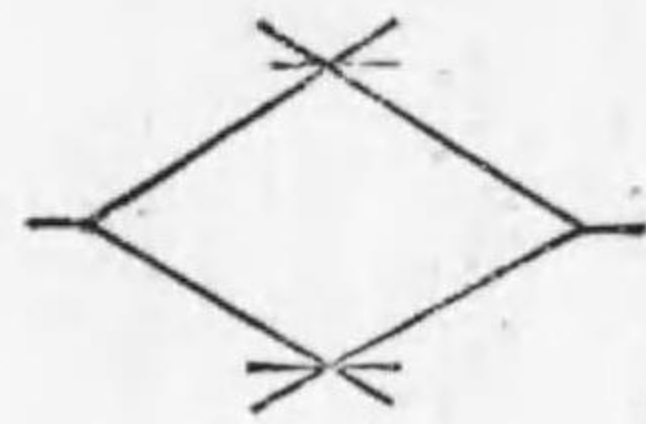


(52)

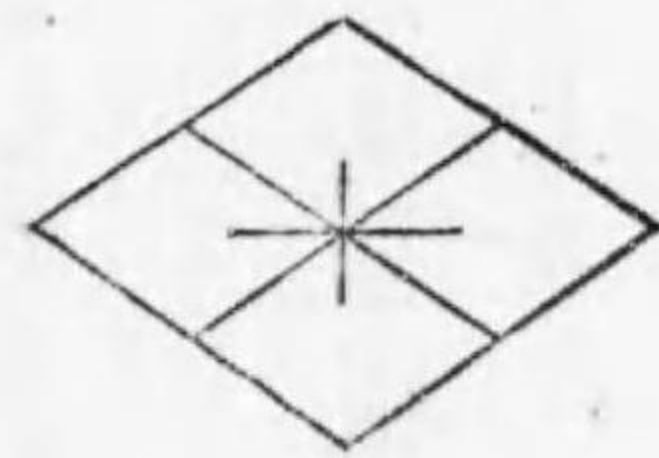


附け紐飾り及び背守りの圖

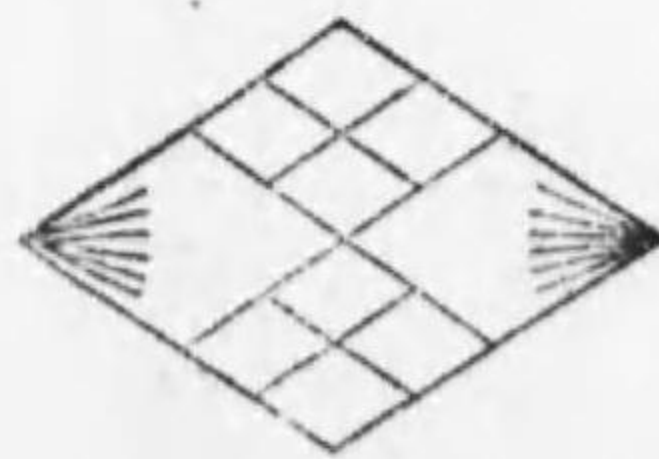
(243)



(244)



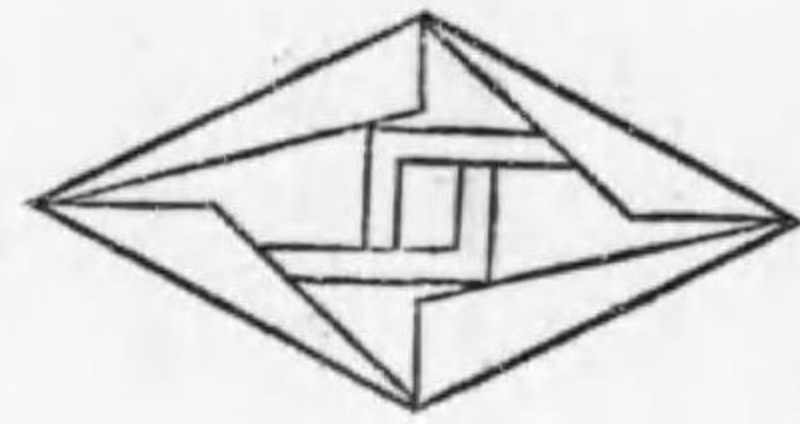
(245)



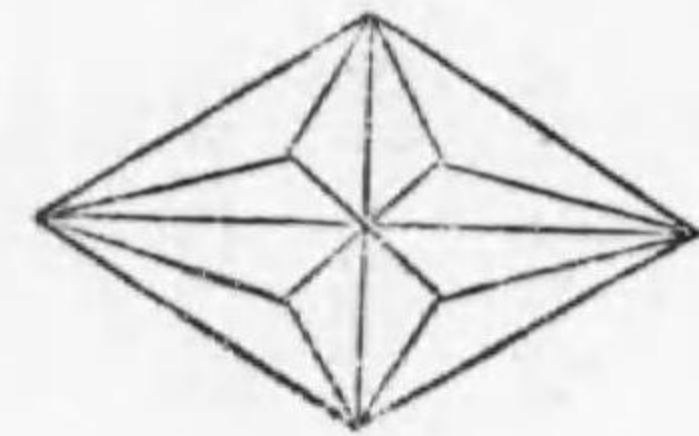
(246)



(239)



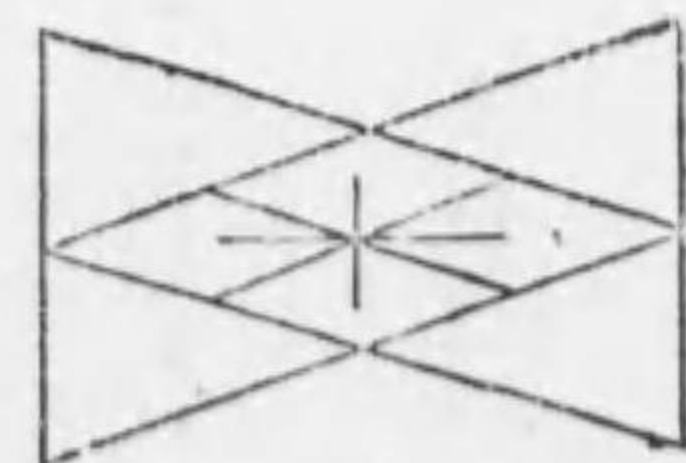
(240)



(241)



(342)



- (二) 裱。
- (イ) 衿下紵け。
- (ロ) 肩當て。
- (ハ) 脇縫ひ等をなす。
- (ニ) 前幅の標附け。

(1) 裾口で縫ひ代を三分、衿下りて縫ひ代五分とし、其間を斜に標を附け衿下りより上は、衿肩開きまで、斜に附ける。

(2) 裾口で、前と同じく縫ひ代三分、抱き幅でも同じく三分とし、其より衿肩明きまで、斜に附ける。

- (3) 裾口で、前と同じく三分とし、衿肩明きまで、斜に附ける。
- (ホ) 衿附け。袋縫ひ、三つ身に同じ。

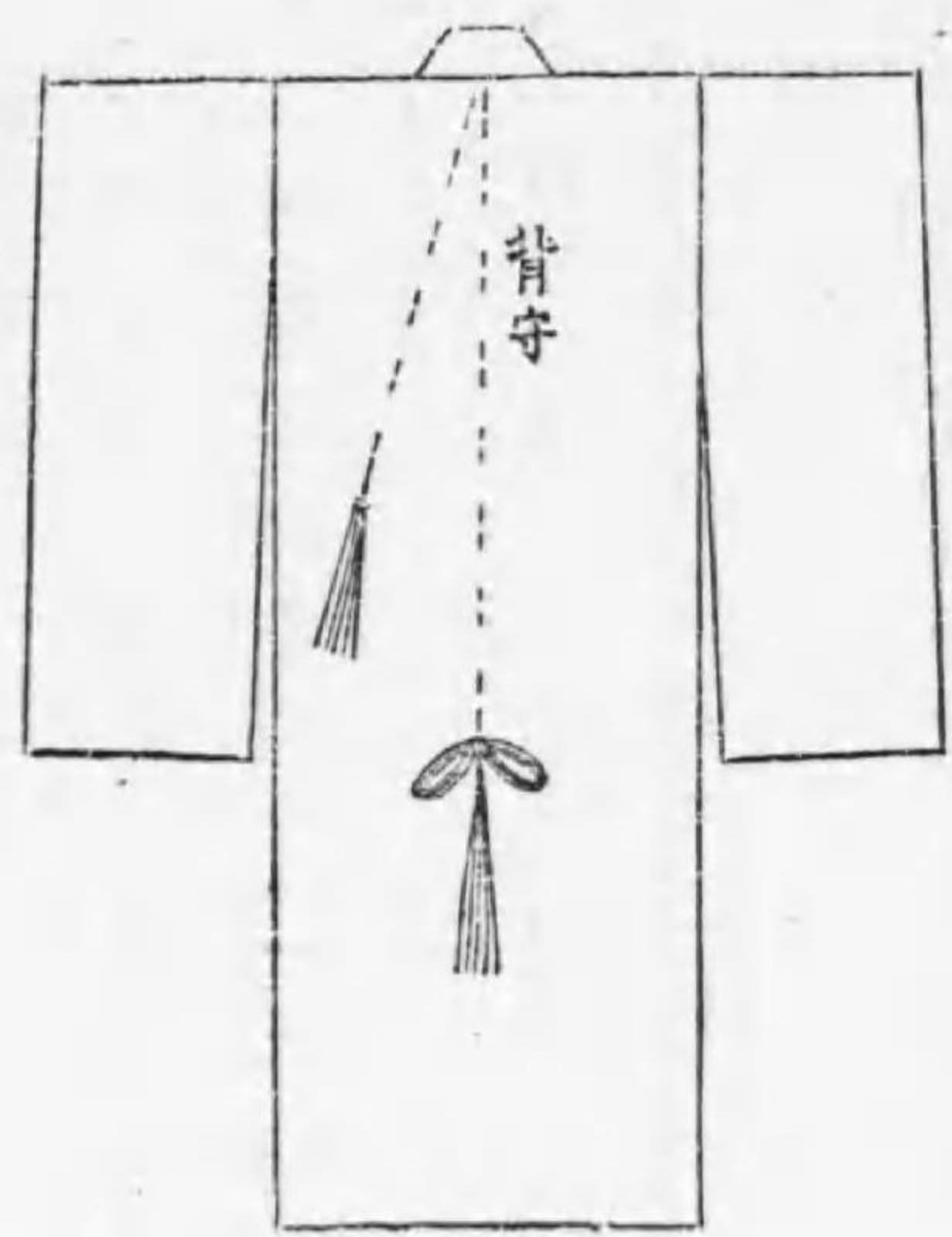
あげまき結び (255)



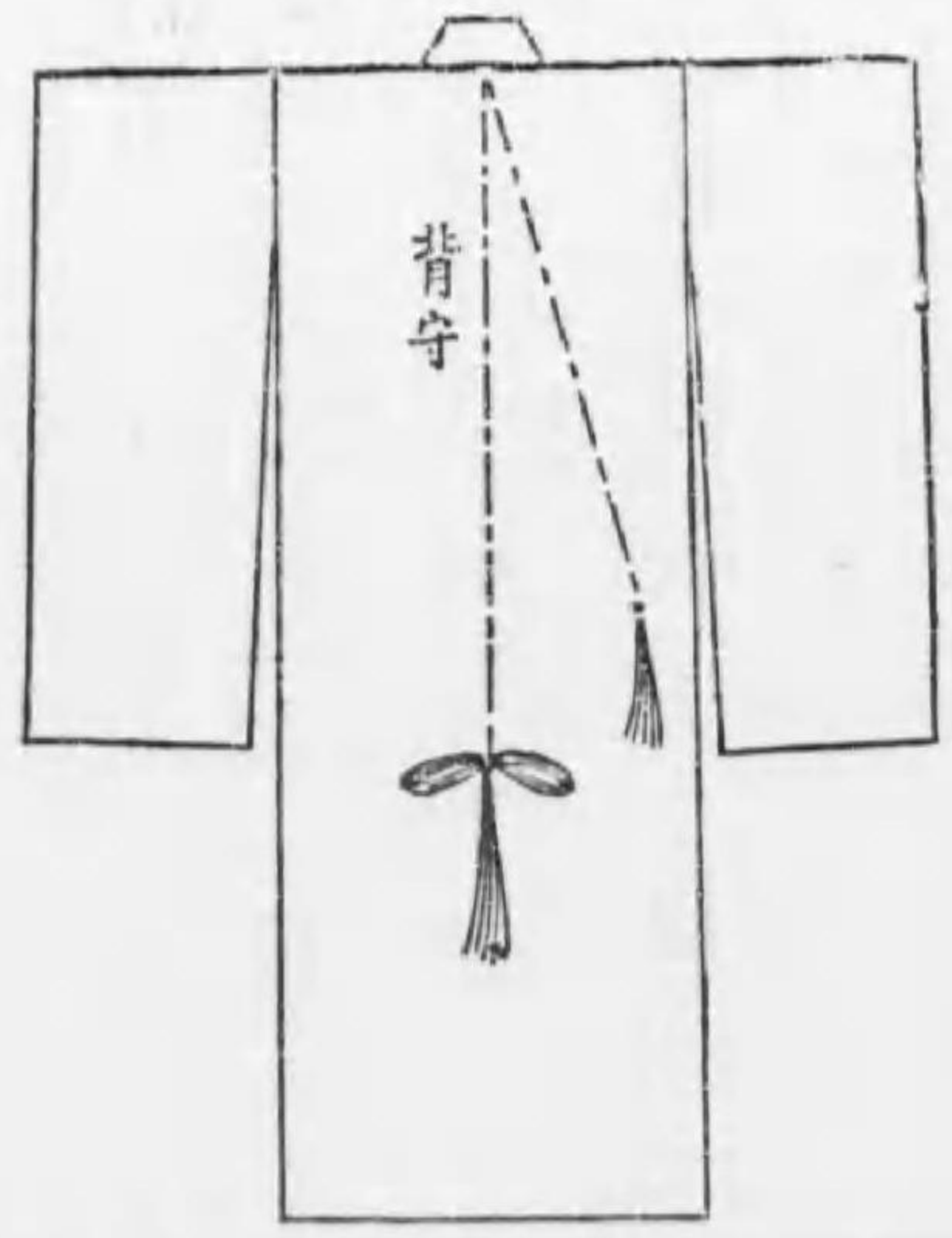
- (ヘ) 裾紵け。
- (ト) 衿附け。
- (チ) 共衿掛。
- (リ) 袖附け、振り紵け。
- (ヌ) 肩揚げ、腰揚げ等、四つ身に同じ。

一つ身単衣。背守り、

(256) 男 兒



(257) 女 兒



各種の裁ち方、及び積り方。
 常幅の布を以て、一つ身筒袖の裁ち方、積り方。(二五八圖)
 裁ち切り寸法。
 袖丈、六寸 身丈、二尺三寸 衿肩明き、一寸 衿下五寸。

常幅の布を以て、一つ身五五の裁ち方、積り方。(二五九圖)
裁ち切り寸法。

袖丈一尺五寸、身丈二尺五寸、 衿肩明き一寸、 衿下五寸。
常幅の布を以て鈎衿一つ身の裁ち方、積り方。(二六〇圖)
裁ち切り寸法。

袖丈一尺五寸、身丈二尺五寸、 衿肩明き一寸 衿下五寸。
一尺二寸幅の布を以て、一つ身の裁ち方、積り方。(二六一圖)
裁ち切り寸法。

袖丈一尺六寸、身丈二尺三寸。
一尺一寸幅の布を以て、一つ身の裁ち方、積り方。(二六二圖)
裁ち切り寸法。

袖丈一尺三寸、身丈二尺四寸。
一尺三寸幅の布を以て、一つ身の裁ち方、積り方。(二六三圖)

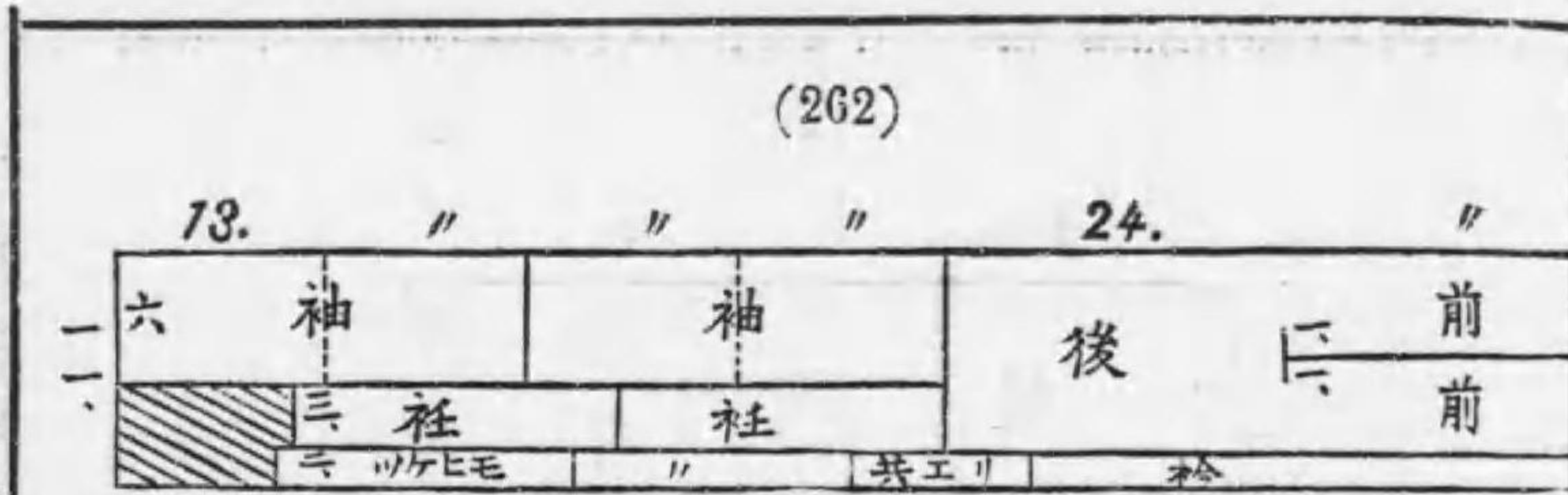
裁ち切り寸法。

袖丈一尺五寸、身丈二尺五寸
九寸五分幅の布を以て、一つ身の裁ち方、積り方。(二六四圖)
裁ち切り寸法。

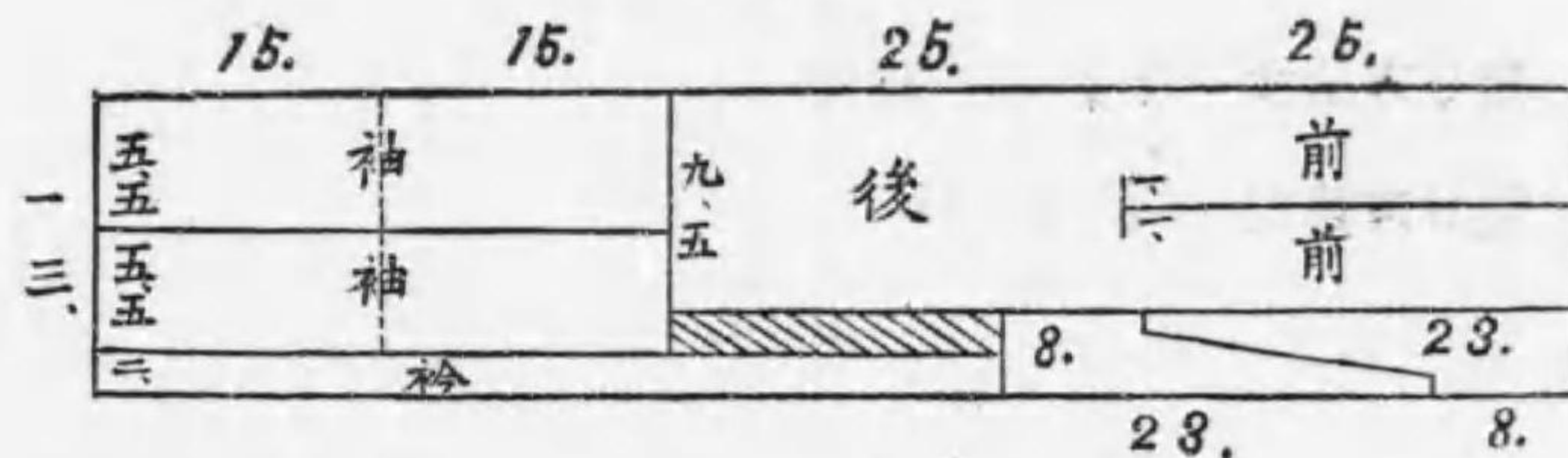
袖丈一尺、身丈二尺、 衿肩明き一寸、 衿下四寸五分。
一尺五寸幅の布を以て、一つ身の裁ち方、積り方。(二六五圖)
裁ち切り寸法。

袖丈六寸、身丈二尺三寸。
二尺幅の布を以て、一つ身筒袖の裁ち方、積り方。(二六六圖)
裁ち切り寸法。

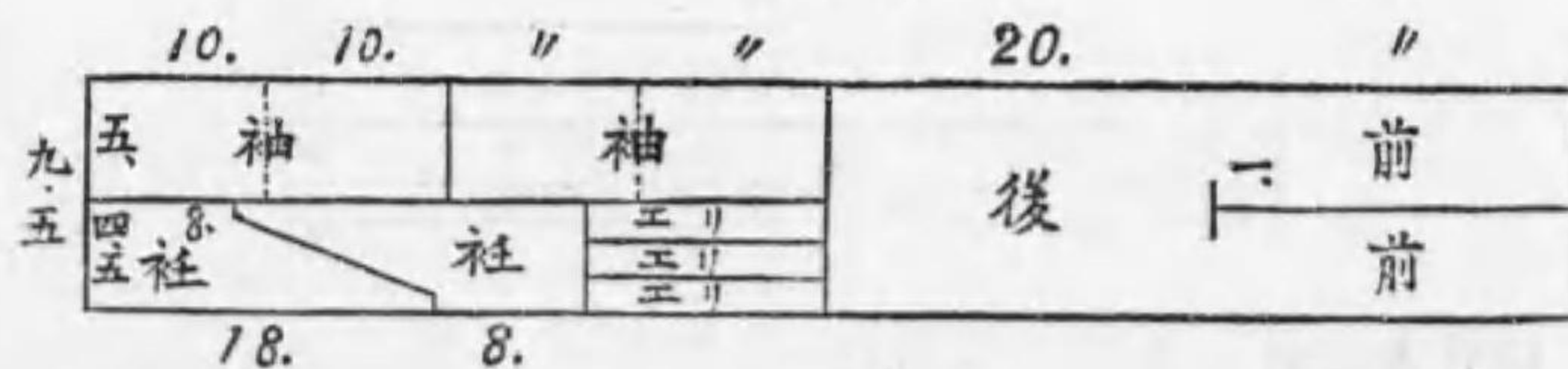
袖丈六寸、身丈二尺二寸。
二尺幅の布を以て、一つ身の裁ち方、積り方。(二六七圖)
裁ち切り寸法。



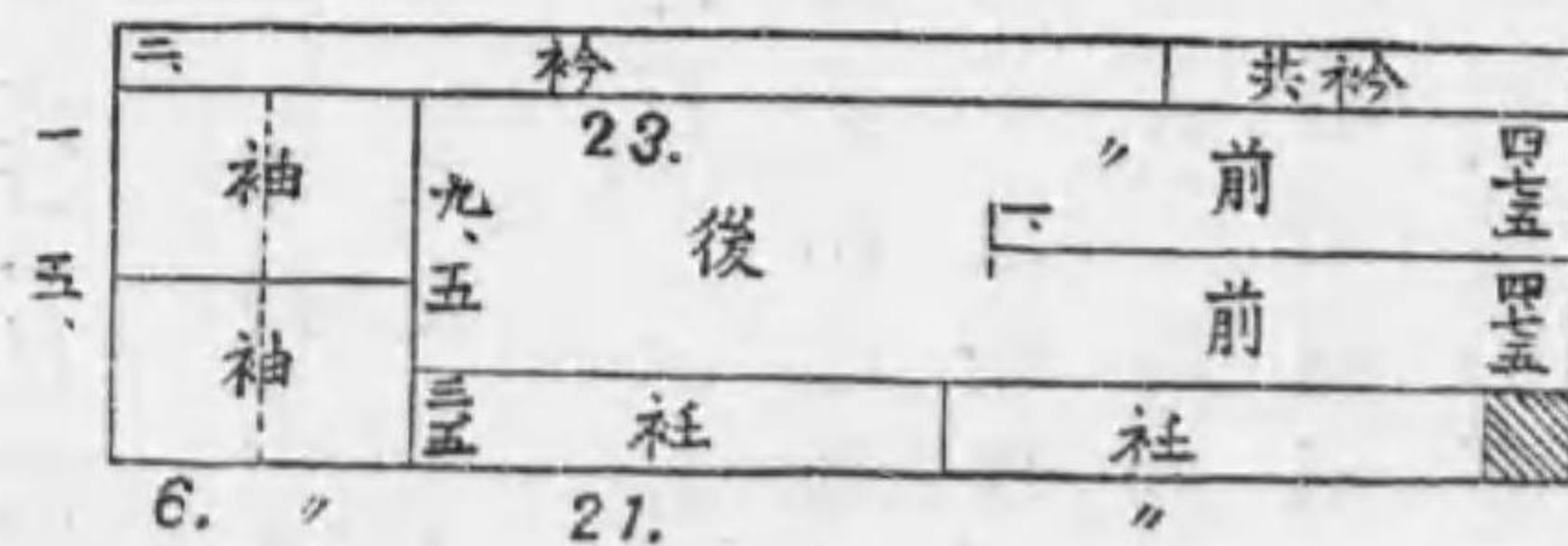
積り方公式 袖丈×4+身丈×2=總尺
 積り方算式 13.×4+24.×2=100.
 (263)



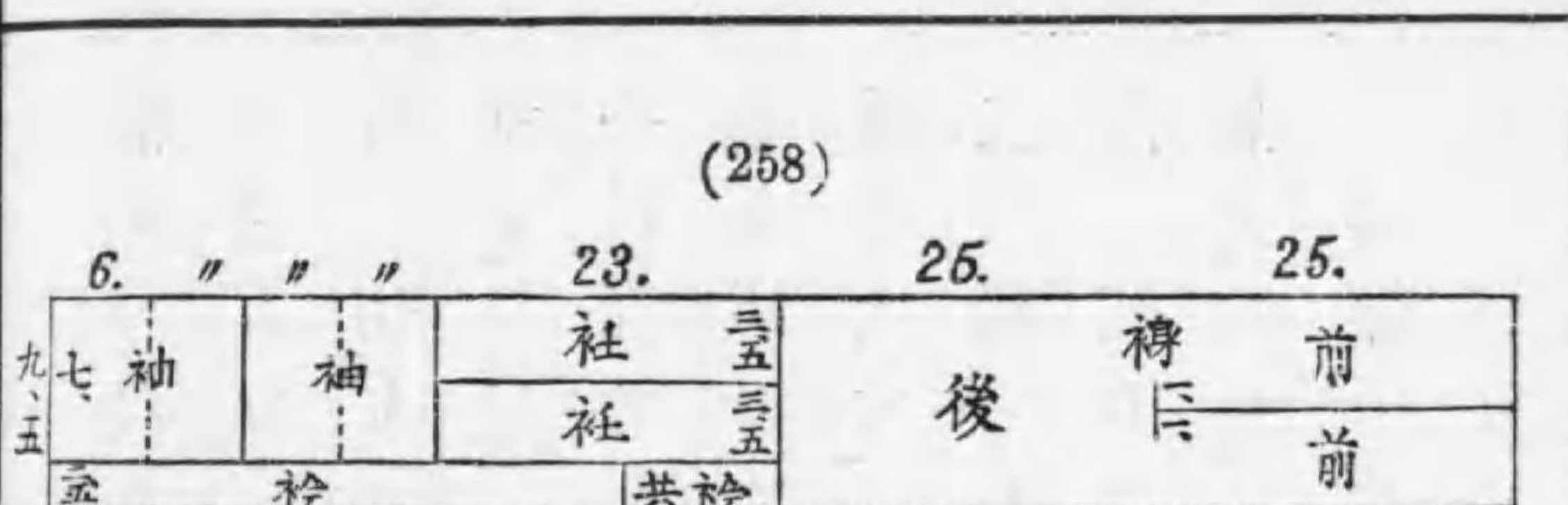
積り方公式 袖丈×2+身丈×2=總尺
 積り方算式 15×2+25×2=80
 (264)



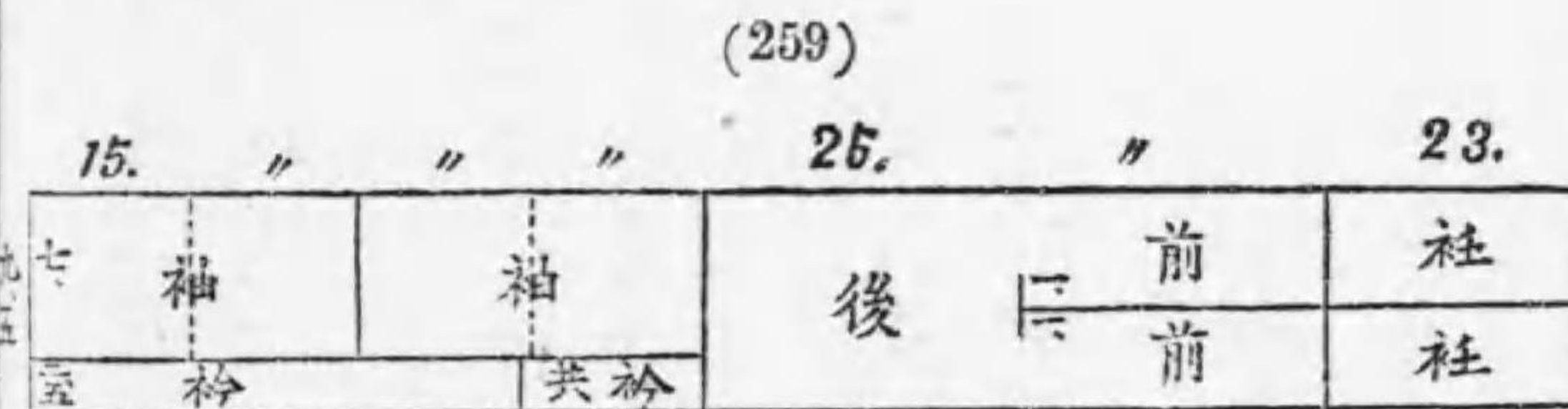
積り方公式 袖丈×4+身丈×2=總尺
 積り方算式 10.×4+20.×2=80
 (265)



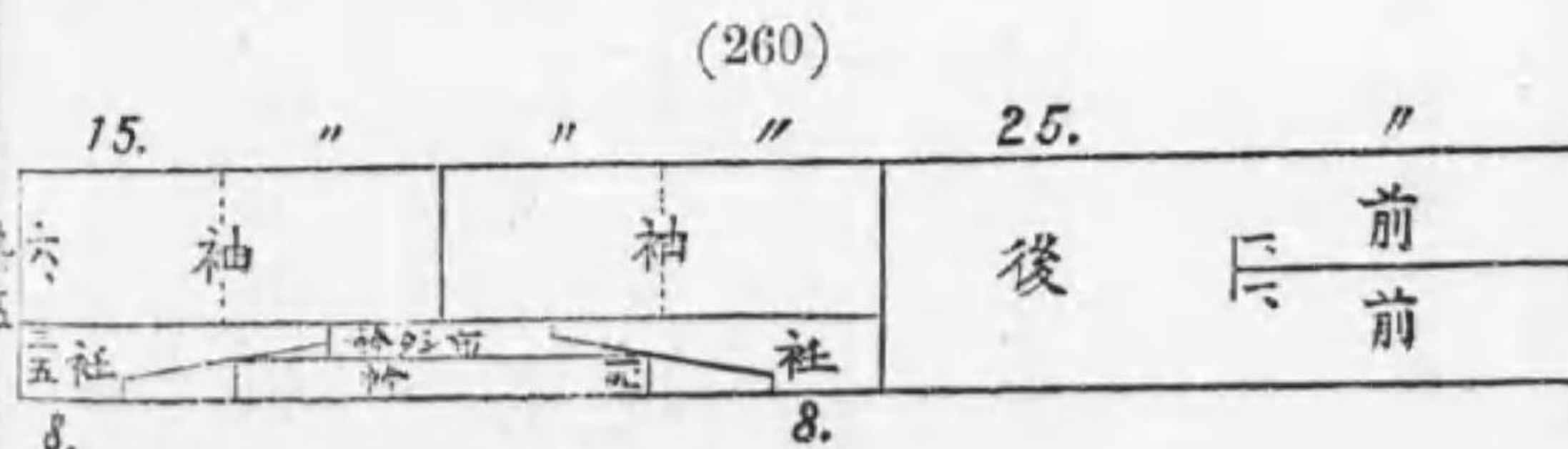
積り方公式 袖丈×2+身丈×2=總尺
 積り方算式 6×2+23×2=58



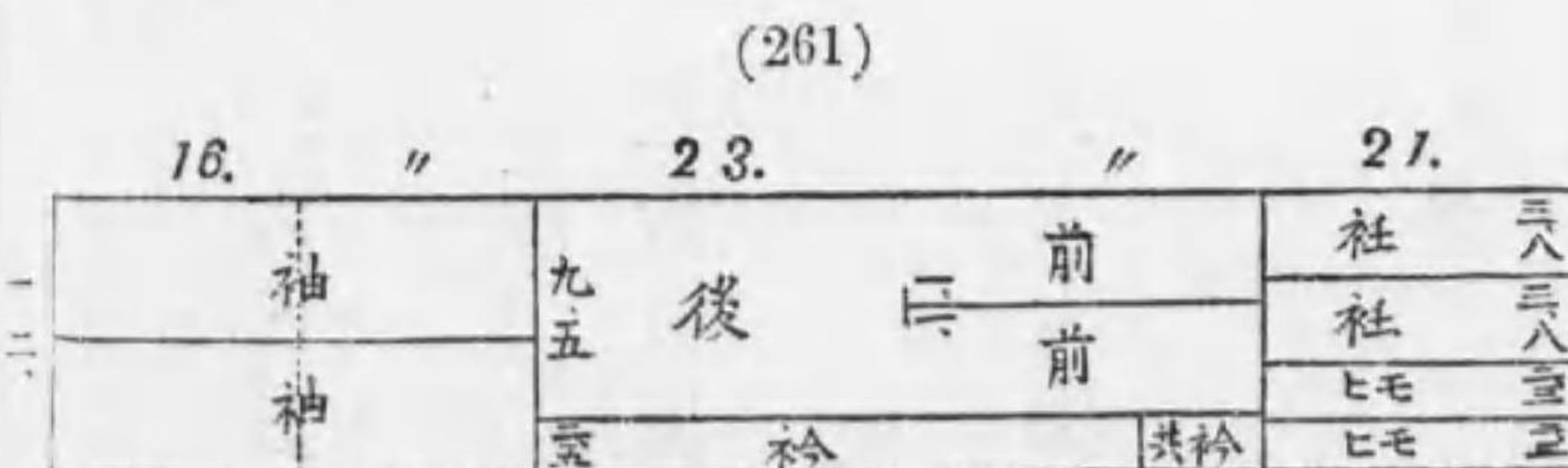
積り方公式 袖丈×4+身丈×3-衿下=總尺
 積り方算式 6×4+25×3-2=92



積り方公式 袖丈×4+身丈×3-衿下=總尺
 積り方算式 15×4+25×3-2=133

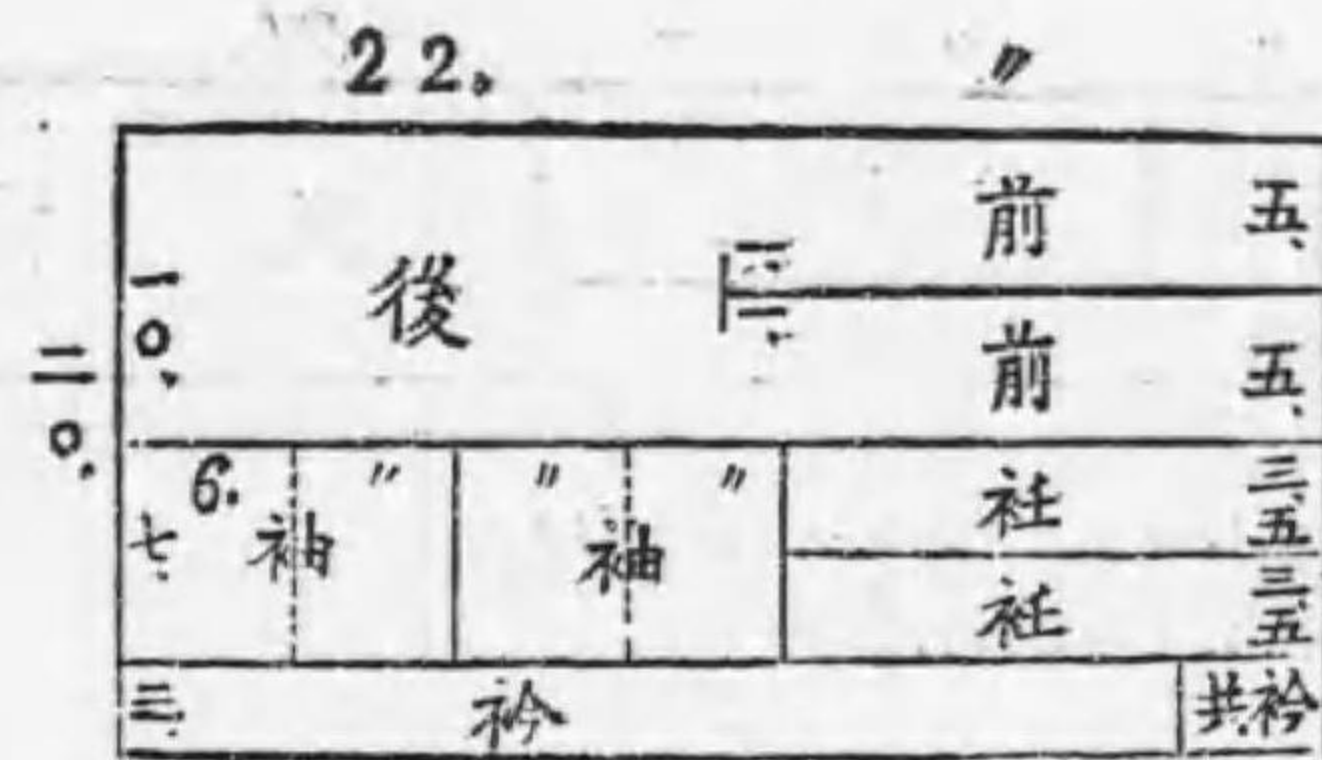


積り方公式 袖丈×4+身丈×2=總尺
 積り方算式 15.×4+25.×2=110



積り方公式 袖丈×2+身丈×3-衿下り=總尺
 積り方算式 16×2+23×3-2=99

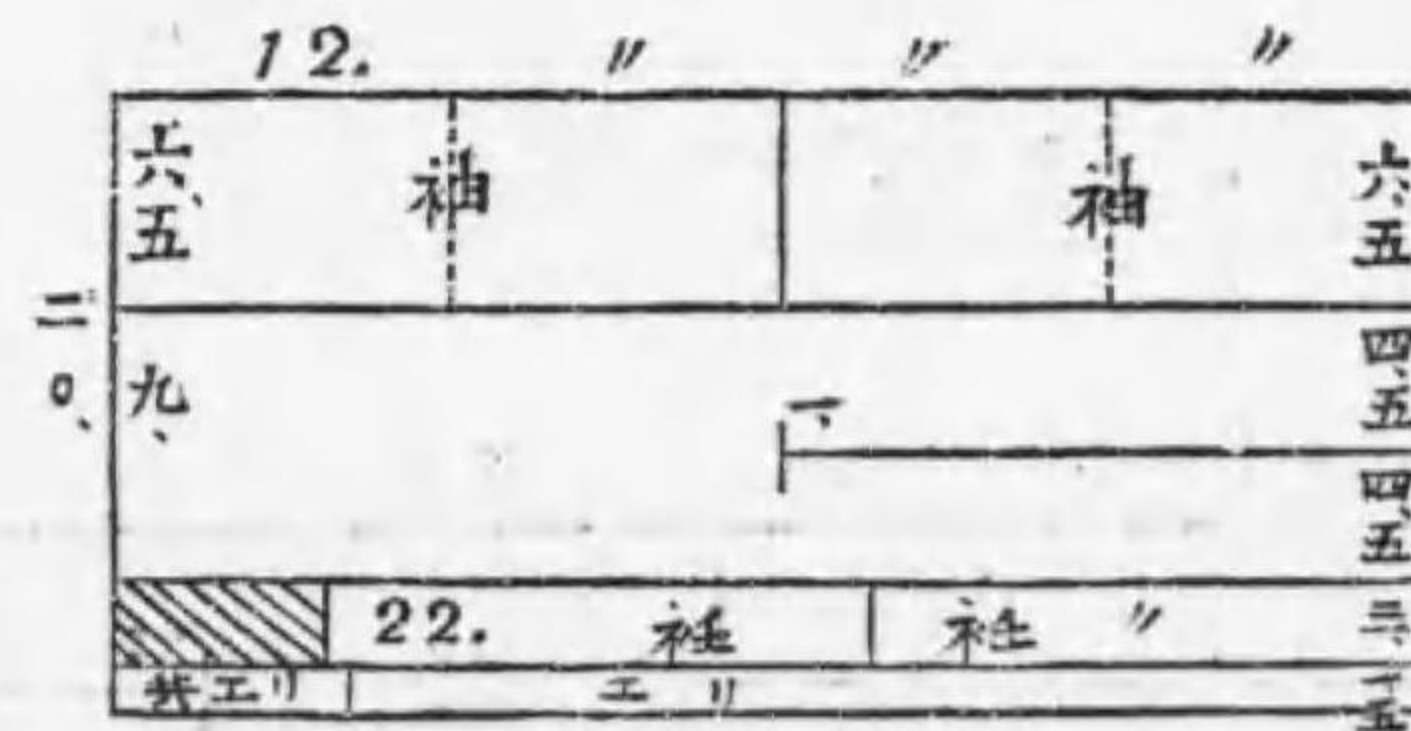
(266)



積り方公式 身丈×2=總尺

積り方算式 22.×2=44

(267)



積り方公式 身丈×2=總尺

同算式 12×4=48.

袖丈一尺二寸、
身丈二尺四寸。

本裁ち本重
ね女單衣

地質。上着。麻、
紗、絹、縮緬、縮緬、
明石、透綾等。
下着。麻、紗、絹、絹
縮緬、縮緬羽二重、
線絹、緞、明石、透綾
等。
色相。一般に白、

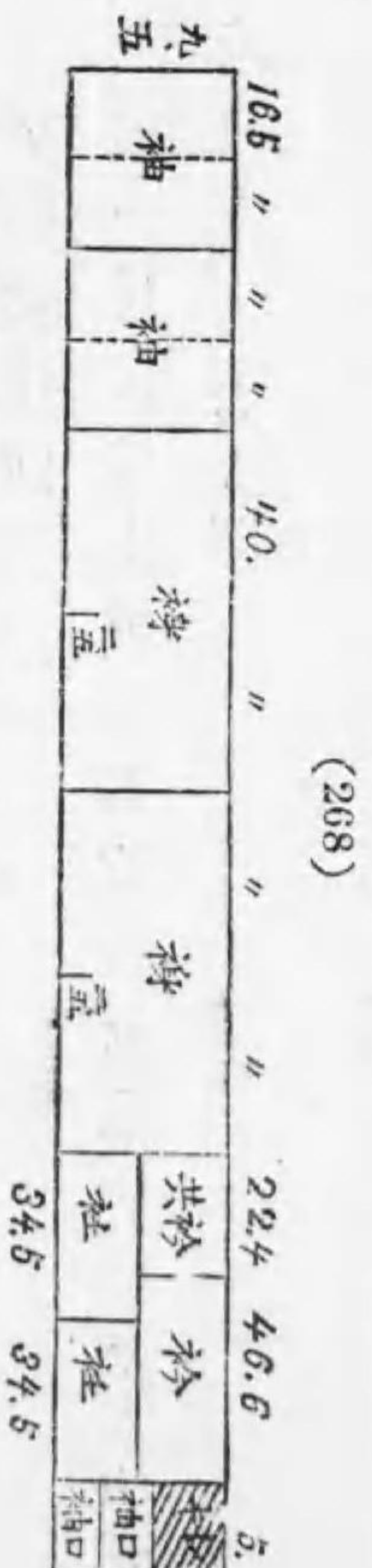
又は淡色を用ひ、年齢に依つて、無地、或は模様物を用ひる。
備考。昔の式正には、袖口、及び裏衿に、上着は鶉色、下着は赤色を
用ひたが、現今では、主に袖口には共布を用ひ、裏衿には、白又は、淡
色の別布を用ひる。
用布。

(イ)常幅にて上着、下着とも、三丈一尺内外を、普通とする即ち上
着一反、下着一反。

(ロ)裏衿は、上着下着とも、半幅にて、表衿丈と同じ。
仕立て上げ寸法。

本裁ち女單衣に同じ。

常幅三丈一尺にて、本裁ち本重ね女單衣の裁ち方、積り方。二六八圖
標の附け方。二六九圖
一袖。



積り方公式

(總尺一袖丈×4+衿下り×2-15)÷6=身丈
 身丈一衿下り=衿丈

(身丈一衿下+衿肩明+縫代)×2=衿丈

同算式

(310-16.5×4+5.5×2-1.5)÷6=40身丈

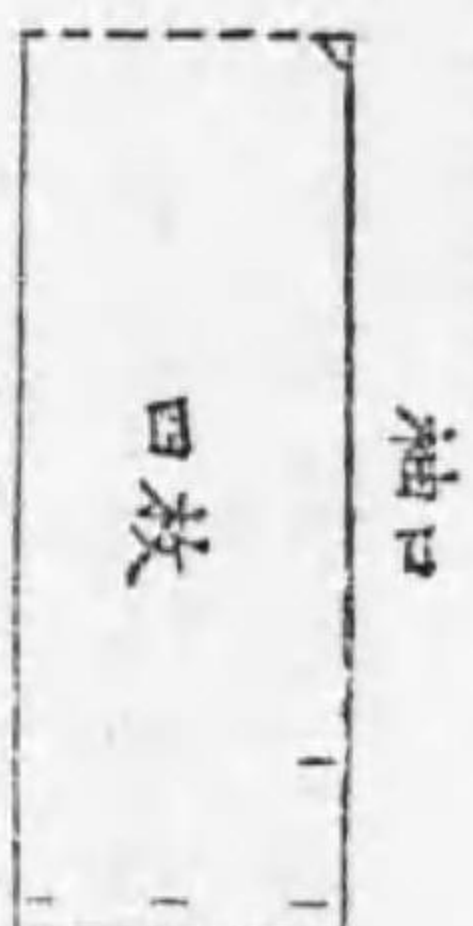
40-5.5=34.5衿丈

(40-20+2.3+1)×2=46.6衿丈

34.5×2-46.6=22.4共衿丈

(269)

袖口の標附け方



(イ) 上着下着とも、本裁ち女單衣に
 同じ、但し下着の袖丈は上着よ

り五厘短くする。

二袖。

(ロ) 袖口布は、上着下着とも同様。

(イ) 上着、下着とも、本裁ち女單衣に同じ、下着は、身丈を上着より、
 五厘短く裁ち切る。

(ロ) 衿。上下四枚を重ねて、本裁ち女單衣と同様に、標を附ける。

(ハ) 衿。本裁ち女單衣に同じ。

縫ひ方。

(一) 袖。

(イ) 上着の袖口明きご、袖口布ごを揃へて、口明きを縫ひ合せる。

(ロ) 袖口明きの止まりを、四つ留めにして、袖口布の丈のある所
 まで、返し縫ひにする。四つ留めの仕方は、後袖ご袖口布とを、
 浅く斜に折り、前袖と、袖口布とでは、さんで、左袖は、袖口を右
 にして表袖を手前にし、袖口明きの留めより、少し袖下の方

へ、よりたる所で、きせの山から針を出だし、さきに斜に折りたる後袖(表袖と袖口布)二枚の山を抄ひ、次に袖口布の裏のきせ山に出だし、それより小さく袖下の方から、後袖二枚(表袖と袖口布)の山を抄ひ、前袖に出だして、始めの糸とかく結び、其糸にてさきを縫ふ。

(ハ) 袖口を整へて、表から襷掛けを掛ける。

(ニ) 袖口布の奥を、裁ち目のまゝ、耳紘けにする。(針目四五分)。

(ホ) 下着の袖口布の丈の両端を、伏せ縫ひにする。

(ヘ) 下着の袖口を合せること、上着と同様。

(ト) 袖口明きの止まりを、表と同様四つ留めにして、袖口布の丈のある所まで返し縫ひにし、此の所で縫ひ代だけ、緯に切り込みを入れて、縫を代ひ表に出す。

(チ) 袖口布の奥を、縫ひ代だけ折り、針目三四分位にして、紘け附

ける。

(リ) 上着の袖の裏と、下着の袖の表とを合せて、袖口布の終りの所で、袖口下の縫ひ目を揃へて四枚ともに糸留めをして、袂の角まで四つ縫ひにする。

(ヌ) 袖巾の標を附け(上りより一分廣く附ける)振り縫ひ、下着の袖幅を五厘つめる。

(ル) 袖下を縫ひ袖形を拵へ、表に引き返す(袖下、振りの方の縫ひ方は、襦袢の袖に同じ)。

(ヲ) 縫ひ目を正しくして、振りに襷掛けを掛け、次に袖口下、袖下は一束に襷掛けを掛ける。

(二) 裄。

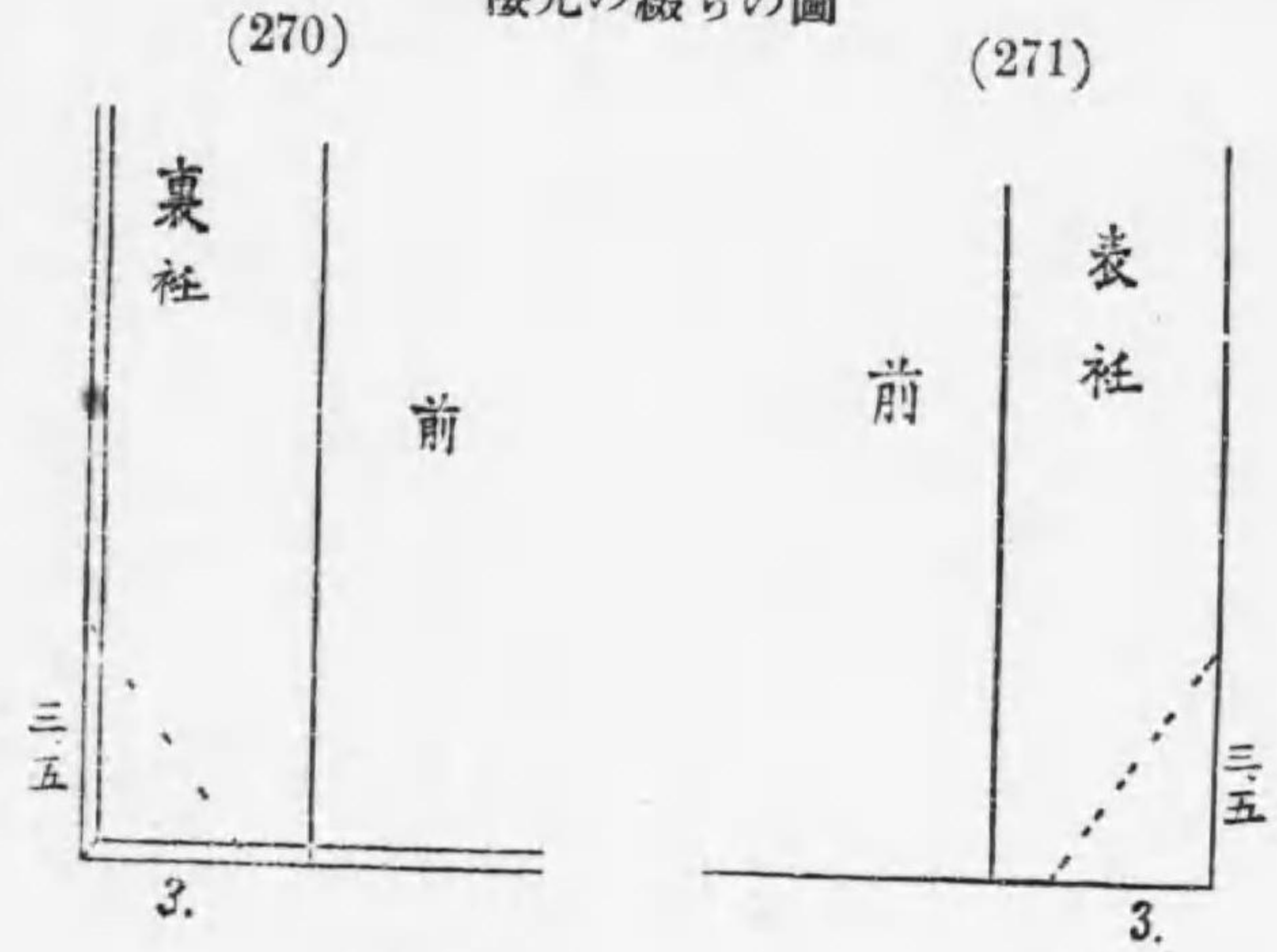
(イ) 上着の背を縫ふ。

(ロ) 後幅、肩幅の標を附けて、脇を縫ふ。

- (ハ) 前幅の標を附けて、背及び脇に折りを附け、脇にくせを取る。
- (ニ) 裾口を縮ける。
- (ホ) 下着の裾を、前後別々に縮ける。
- (ヘ) 表の方に、縫ひ目の出る様にして、背を縫ふ。
- (ト) 後幅と、肩幅との標を附けて、脇を縫ふ。
- (チ) 背及び脇に折りを附けて、上着と、下着との、背縫ひを綴ち合はせる(裕長襦袢に同じ)。
- (リ) 上着、下着の脇を、綴ち合せる。
- (ヌ) 下着の背、脇の縫ひ込みを、裾口の所で、裏と表との間に、斜めに折り込みて、合せる。
- (ル) 身八つ口を縫ふ(裕長襦袢に同じ)。
- (ヲ) 袖を附ける裕長襦袢に同じ。
- (ワ) 上着と、下着の、前を揃へて、假りに綴ちる。

- (カ) 衿。上着と、下着の、衿の襟先を、絹布単衣の如くにして拵へ、衿裾全部及び衿下の襟先より上、五寸の間を縮けて、それより上の衿下は、假綴ちのまゝにして置く。
- 上着と、下着の衿で、前襟を挟み、四つ縫ひにして衿を附け、次に裾口で前襟及び衿の縫ひ込みを斜に折つて縮け合せる。
- (ヨ) 衿下の縮け残した部分を、上着と、下着と一緒に、衿下止まりより、一寸五分上まで縮ける(但し上着の衿下は全部縮け置き、下着を縮ける時、其針を上着の縮け山にかけて、縮けるのも一法である)。
- (タ) 衿の衿附けを、躰けて綴ちて置く。
- (レ) 衿附け。下着の表衿に衿芯を入れ、左右の衿先を縫ひ、衿に附ける方を、躰けて綴ちる。
- 下着の裏と、下着の裏衿とを合せ、上着の裏表の衿にて、衿と

襦先の綴ちの圖



下着の衿とをはさみ都合六枚で衿を附ける。
 上着の衿先を普通の如く縫ひ、縫ひ込みを綴ち附けて表に返す。
 上着、下着とも、衿を平にして、衿幅の標を附ける。

上着に三つ衿芯を入れて、上着、下着とも、普通の単衣の如く紵ける。

(ツ) 衿の襦先に綴ちをする、其仕方は圖の如く襦先より衿下の方へ三寸五分、衿裾の方へ三寸として其間を斜に軽く折りを附け、白の絹糸を二本にして表に小さく二針つつ五針、裏

に一針つつ五針出して、大針は裏表の間を通し、兩端は紵け代の中でごめる。

尙襦先の綴ちは白糸を用ひず、共色の糸で綴ちる事もある又裏に裏の共糸、表には表の共糸を使用して、裏表の間で、糸をねちからげる方法もなる。

(ツ) 上着、下着とも衿糸を附ける。

(ネ) 仕上げ 絹布単衣に同じ。

半重ね単衣

地質、色相、すべて本重ねに同じ。
 用布。

上着は、本重ねに同じ、即一反、下着一丈五尺位。
 常幅の布を以て、下着の裁ち方、積り方。

(272)

20.	"	"	"	37.5	"
九五 裾布	"	"	"	衤	衤
				衤	
				48.	

積り方公式 裾丈×4+衤丈+袖口布丈=用布

同算式 20×4+48+15=148 用布

標の附け方。

(一) 袖。

(イ) 絹布女單衣に同じ。

(ロ) 袖口布は本重ねに同じ。

(二) 袴。

(イ) 上着は、女單衣に同じ。

(ロ) 下着四枚を揃へて、裾口を裁ち揃へ、丈の

標を附ける(裾衤け五分、上の衤け代、三分

より五分まで)。

(ハ) 衤。

下着の裾を、裁ち揃へて、丈の標をする。

上着の上に、下着の衤を、裾口を、揃へて重

ねる。

縫ひ方。

(一) 袖。

(イ) 袖口布の、兩端を伏せ縫ひにする。

(ロ) 袖口を合せること、本重ねに同じ。

(ハ) 袖口止まりにて、四つ留めをなし、袖口布のある間は半返し

にして(一針ぬきにて袖口下及び袖下を縫ひ、袖形を作り、折

りを附け、袖下の縫ひこみを、衤け附けること、絹布單衣に同

じ。

(ニ) 袖口布の奥を折つて、衤けつける。

(ホ) 表に返して、衤けを掛ける。

(二) 袴。

(イ) 上着の背縫ひ、脇縫ひ、前幅の標附け、裾衤けは、本重ねに同じ。

(ロ) 下着の裾布。

本重ねの下着と同様に、裾紘けをする(四枚とも)。裾布の背、脇を縫ふ(縫ひ目の表に出ること、本重ねの下着と同様)。

背、脇の裾にて縫ひ込みを、斜めに折り込みて、紘け合せる。

裾布の上の方の、丈の標を折り背、及び脇を綴ち合せる。

裾布の上部を、針目三四分位にして、上着に紘け附ける(上着の、脇の縫ひこみの端を、折つて置く)。

裾布より上の、上着の背、脇は、絹布と同様に紘け附ける。

(ハ) 衽。

額縁を拵へ、衽下、及び裾口を紘けること、本重ねに同じ。

前幅標の所を下着裾のある間、上着と下着とを綴ち合せ、下着の衽の丈標を裏に折り、上着と下着との衽で、前身を挟み、

下着の豎袷のある所まで、四つ縫ひに、それより上は、上着だけに、衽を附ける。

上着、下着の、豎袷の紘け方は、本重ねに同じ。

下着の、衽より上の、上着の、衽附けの縫ひ込みを、絹布単衣の如く折りて、紘け附ける。

(ニ) 衿附け。

上着の衿を表衿とし、下着の衿を裏衿として、絹布単衣と同様に附ける。

(ホ) 袷附け及び振りは、絹布単衣に同じ。

(ヘ) 袷先の綴ちは、本重ねと同じ。

(ト) 衿糸は、絹布単衣と同様。

(チ) 仕上げは、絹布単衣に同じ。

(273)

16.5	"	"	"	20.	"	"	"	26.	26.	15.
袖	袖	裾布	"	"	"	衿	衿	衿	共衿	共衿

積り方公式 袖丈×4+裾布丈×4+衿丈×2+袖口布丈=總尺
 同算式 16.5×4+20×4+26×2+15=21.3總尺

半重ね單衣の一法

上着。 裁ち方、積り方、標付け方は、本重ねに同じ。

下着。 袂と衿とを前の半重ねと同様にし、其他は本重ねに、準じたものである。

標付け方。

(イ) 袖。 本重ねに同じ。

(ロ) 袂。 上着、下着とも、前の半重ねに同じ。

(ハ) 衿。 本重ねに同じ。

縫ひ方。

袖及び衿は、本重ねに同じ、其他前節の半重ねと異るところは、袖付けである、即袖付けの留

めをして、上着の袖を先に付け、下着の袖は、上着の袖付けの縫ひ目のところに、紵け附ける。

各種長着普通仕立て上げ寸法表

各部名稱	種類	一つ身	三つ身	四つ身	本裁女物	本裁男物
袖丈		一〇—一五	一三—一五	一四—一六	一六、内外	一四
袖口		—	三、五—四	四、四—五、五	六—六、五	七、五—八
袖附		三、五—四、五	四、—四、五	四、五—五	六、五	一三(人形二)
袖幅		五内外	六、—七、	七、五—八	八、五	八、八—九
身丈		一八—二五	二七、五内外	三〇、内外	三九内外	三六、五
身八つ口		二、五	二、五	二、五	三—三、五	—
衿肩明		—	一、三—一、四	一、六—一、八	二、三	二、二
衿下		二、五	三—三、五	三、五—四	六	五、五
肩幅		いつばい	いつばい	六、五	八	八、五—八、七

紐 附	施		衿 幅	相 裓 幅	衿 幅	衿 下 幅	抱 幅	前 幅	後 幅
	綿 入	裕							
六、五肩より	三	一、五	七、八	衿幅より 二減す	三内外	四、五—五		いつばい	いつばい
七	三	一、五	一	衿幅より 二減す	六—七			いつばい	いつばい
七、五—八	三	一、二、五	一、二、三	衿幅より 二減す	八—三			いつばい	六、五
	三	一	廣衿 三—五	三、五	四	五、五内外	六	七、五	
	二	一	一、七、五	三、五	四	六内外	六、五—七	八、	

筒袖普通仕立て上げ寸法表

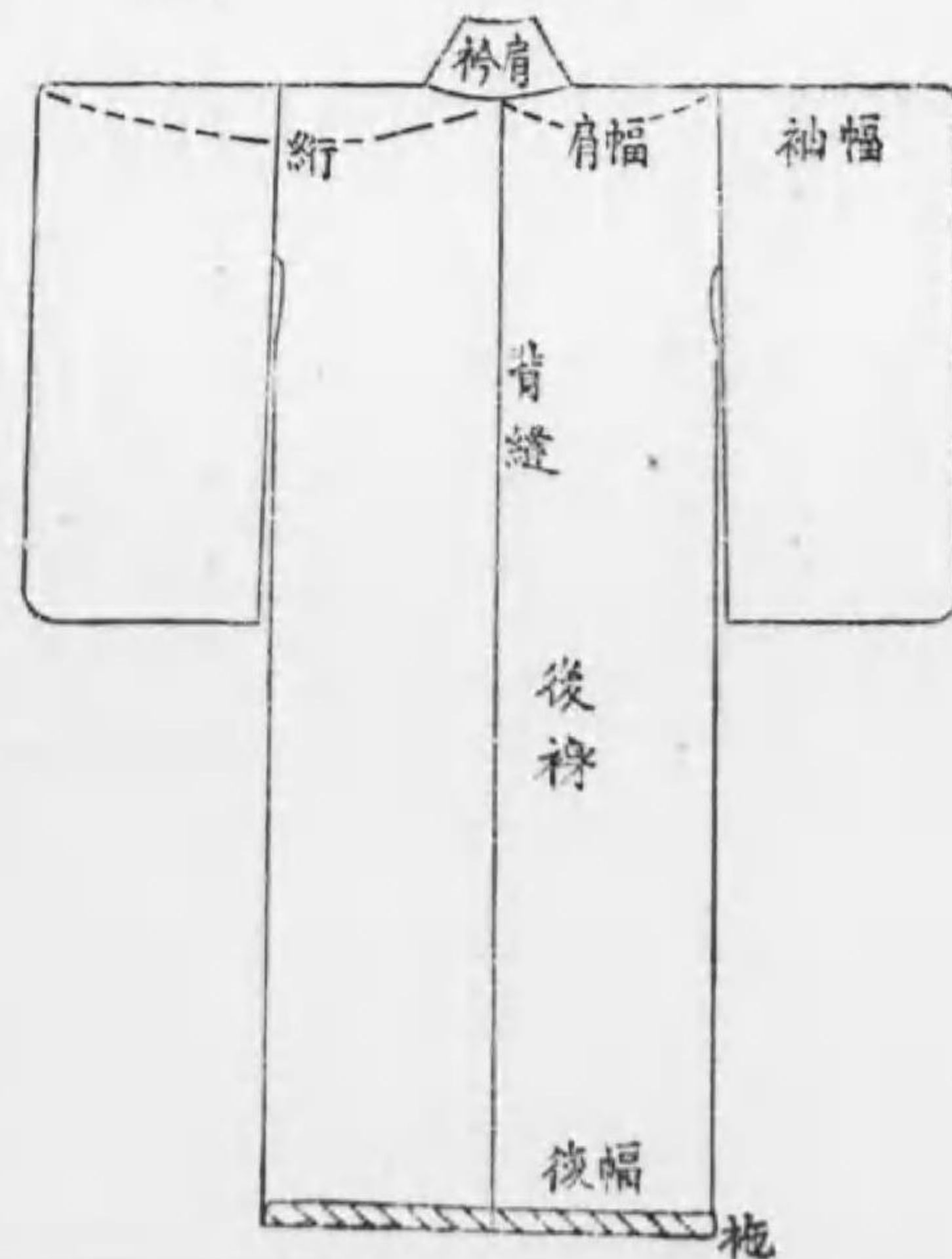
名稱種類	各部	
	丈	身
袖	五、五	一 っ 身
袖	四	三 っ 身
袖	三—三、五	四 っ 身
袖	六、五	六、五—七
袖	四、五	四—四、五
袖	六、五—七	八

元祿袖普通仕立て上げ寸法

名稱種類	各部	
	丈	身
袖	六内外	一 っ 身
袖	三—三、五	三 っ 身
袖	四、三	七—八
袖	四	三、八
袖	四、五—五	四、三
袖	八	六、五—七
袖	九内外	四 っ 身

本裁ち袴

各部の名稱。



地質。

表地

木綿。 瓦斯、木綿等。
 絹布。 銘仙、絲織、紬、縮緬、御召、羽二重等。
 毛布。 メリンス等。
 交織物。

裏地

袴廻し	木綿。	金巾、木綿、新モス等。
胴裏	絹布。	紅絹、白絹、輸出羽二重等。
	木綿。	新モス、木綿、金巾等。
	絹布。	銘仙、絹、紬、縮緬、錦紗、羽二重等。
	毛布。	メリンス等。

普通仕立て上げ寸法單衣の場合と同様。

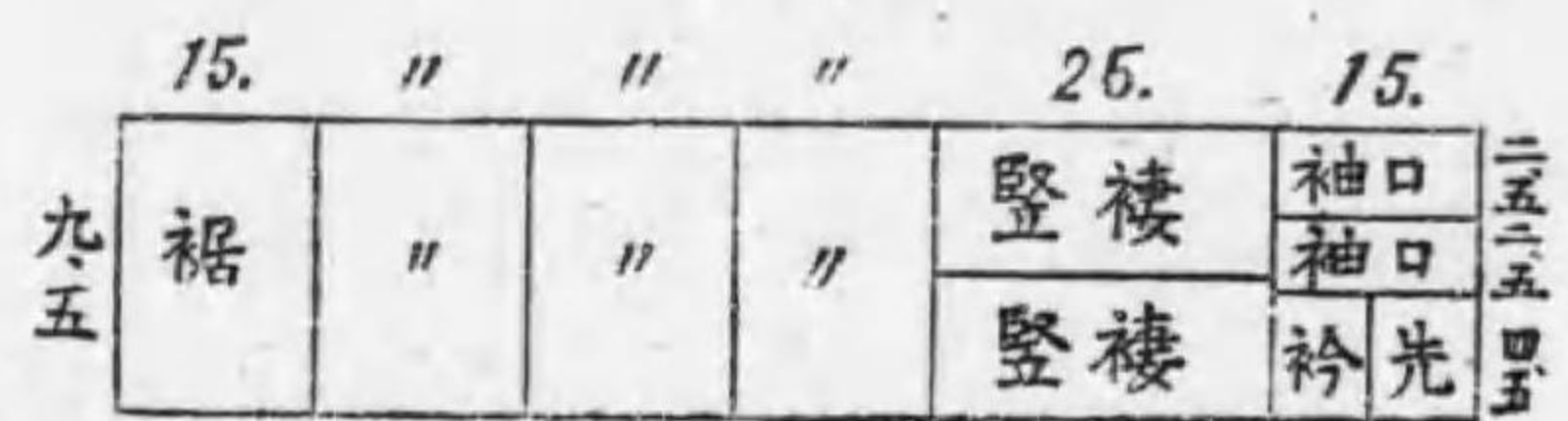
袴。 一分より、一分五厘(別表普通仕立て上げ寸法に、縫ひ代及び縫ひ込みを見積りて、裁ち切り寸法を得る、なほ一反の用布に依

本裁ち女袴

り、縫ひ込みを適宜に取る。
 裁ち方及び積り方、單衣に同じ。
 裾廻し及び胴裏。
 裏は通し裏をも用ひるが、普通は別布を、裾廻しに用ひる。
 裾廻し寸法。

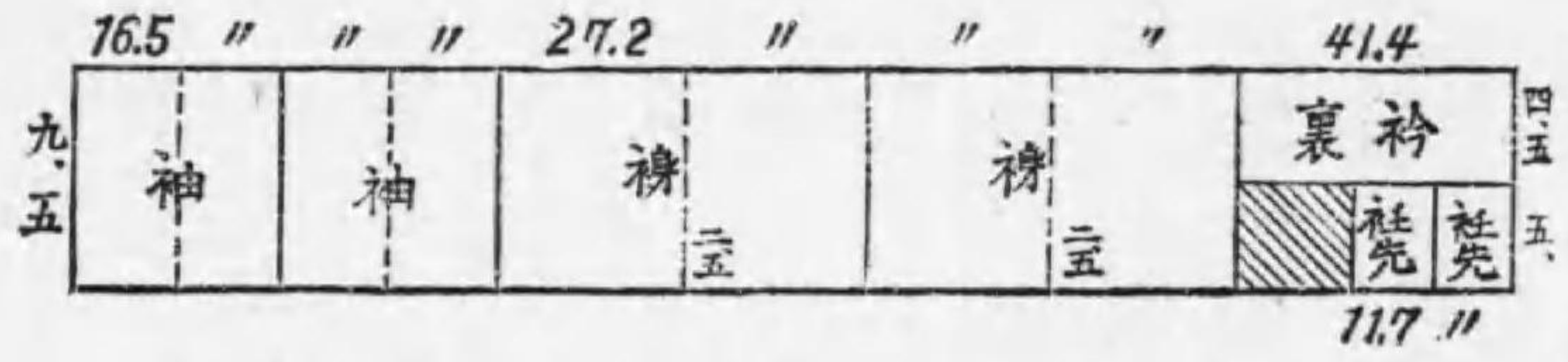
裾廻し丈、一尺三寸より、一尺五寸、凡身丈の三分の一。
 豎袷丈、三尺三寸より、二尺五寸、凡衿丈の四分の三。
 衿先丈、一尺、凡衿丈の五分の一を標準として、其總丈は、常幅で
 八寸から一尺位である。
 常幅を以て、裾廻しの裁ち方。
 裁ち切り寸法。
 裾廻し丈、一尺五寸、豎袷、二尺五寸、袖口布、一尺五寸。
 常幅を以て、胴裏の、裁ち方積り方。

(276)



積り方公式 裾廻×4+豎袷+袖口布=用布
 同算式 15×4+25+15=100

(277)



積り方公式 袖丈×4+ (表身丈-裾廻し丈+出衿×2+胴接代)×4+衿丈=用布
 同算式 表袖丈 袖總丈
 1.5×4=66
 表身丈 裾廻 衿 胴接代 胴裏丈
 40.- 15.+ .1×2+2 = 27.2
 胴裏總丈
 27.2×4=108.8
 表身丈 衿下 豎袷 衿 胴接ぎ 衿先布
 40 - 5.5 - 25 + .1×2 + 2 = 11.7
 表身丈 衿下 衿肩明 ユルミ 衿先縫代 衿丈概算
 (40 - 20 + 2.3 + .3 + 1)×2=47.2
 衿先布 衿先接代 裏衿丈
 47.4 - 5×2 + 2×2 = 41.4
 袖丈 胴裏總丈 裏衿丈 裏總用布
 66 + 108.8 + 41.4 = 216.2

裁ち切り寸法は、表の寸法と、裾廻しの寸法とに依る。

裾廻しの裁ち方の種類。

常幅(用布の短き時の裁ち方(二七八圖)。

同 (袖口を取らぬ裁ち方(二七九圖)。

一尺六寸幅(二八〇圖)。

二尺幅(二八一圖、二八二圖)。

標の附け方(二八三圖)。

注意。 裕は單衣と異り、必下着を着け、又上に羽織を着るから、上下に合せる様に、寸法を正確に、考へなくてはならぬ、なほ裏が附くから、丈、幅の釣合ひが取れがたく、袋入りのものが出来易いから、地質に依り、釣合ひを見定めて、標を附ける事が、大切である。それがため、標を正確にしなければならぬ所から、兎角標を強く大きく、澤山に附ける様になるが、これは餘程考へねばならぬ、和

(278)

總尺八尺

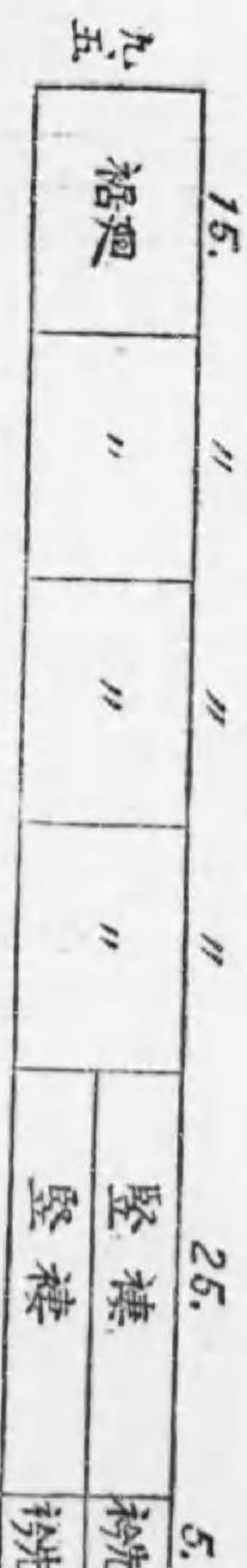


積り方公式 (總尺- 袴襖一衿先布) ÷ 4 = 裾廻丈

(87-23-5) ÷ 4 = 13 裾廻丈

(279)

總尺 九尺にて袖口を取らぬ裁ち方

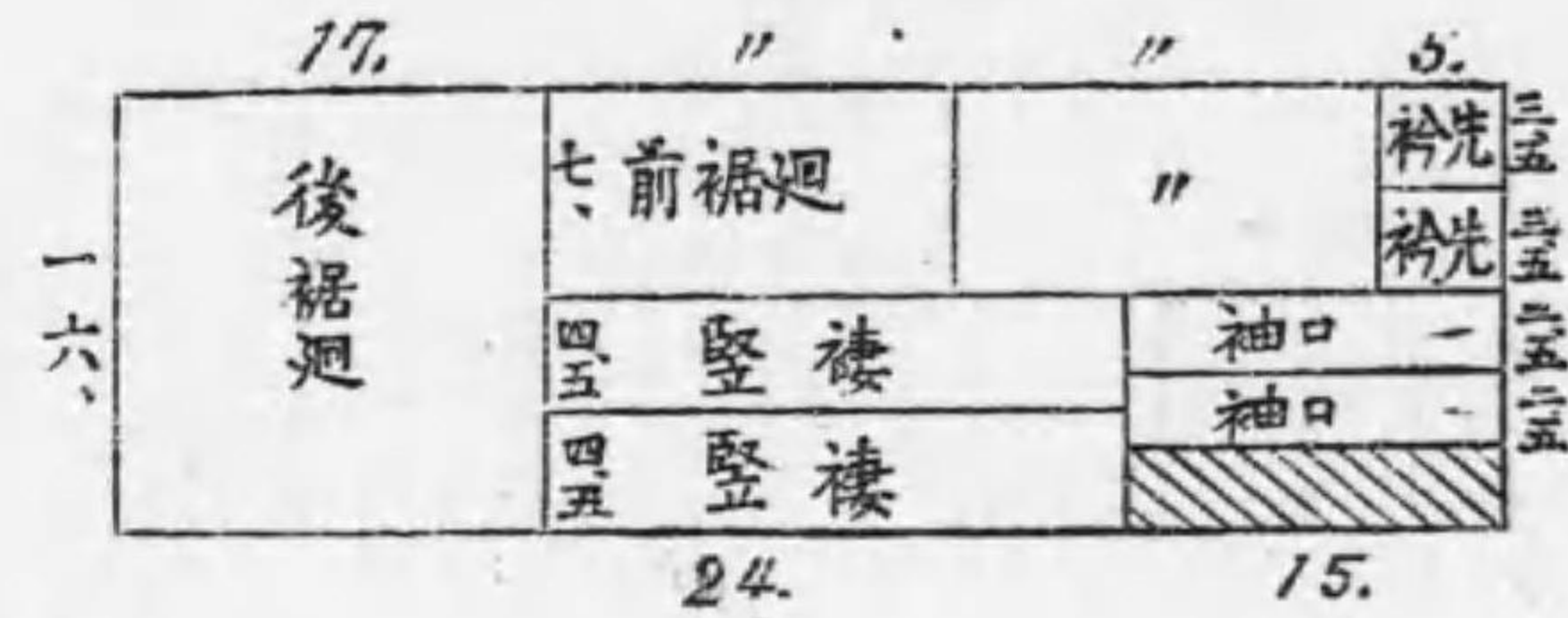


積り方公式 (總尺- 袴襖一衿先) ÷ 4 = 裾廻丈

同算式 (90-25-5) ÷ 4 = 15 裾廻丈

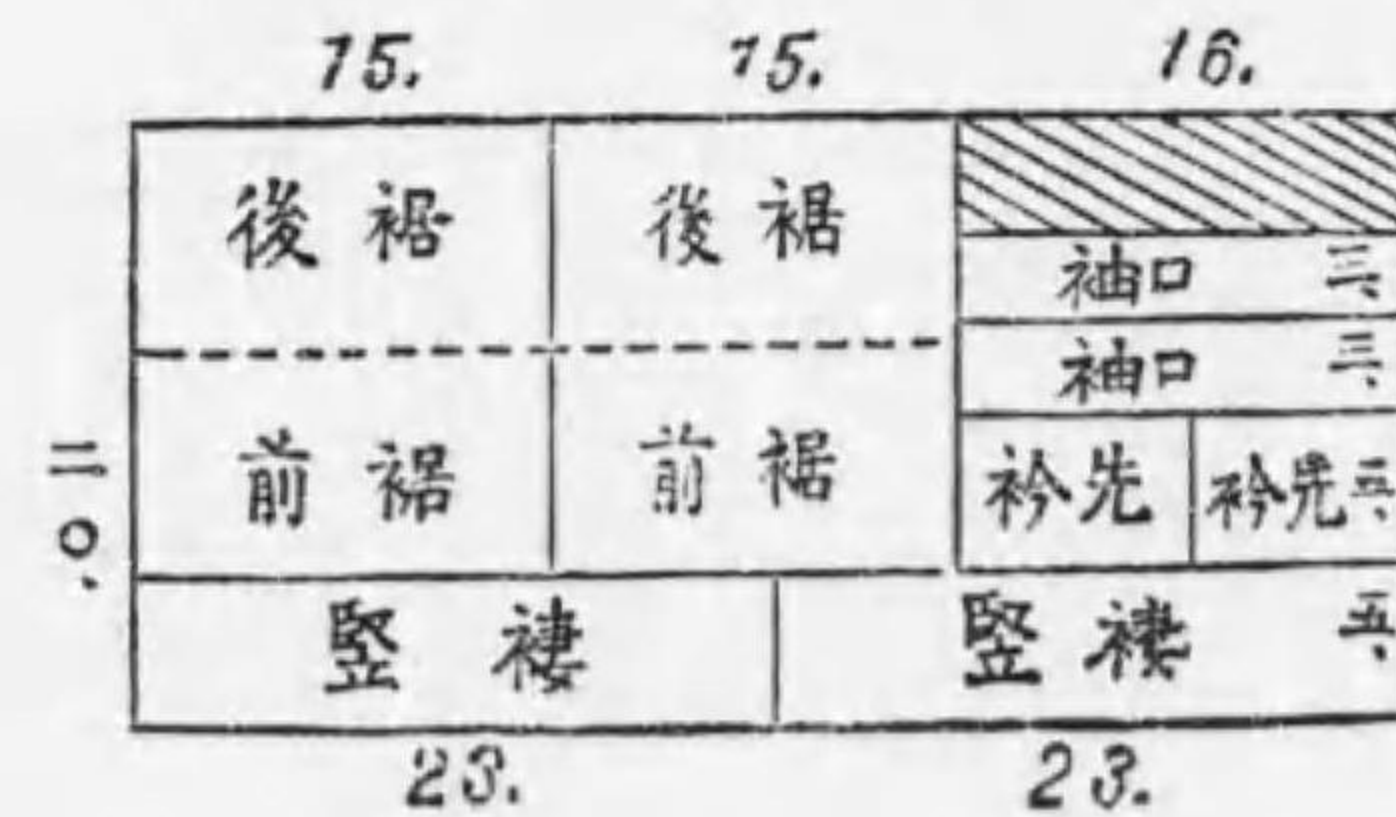
(280)

一尺六寸にて裾廻しの裁ち方



(281)

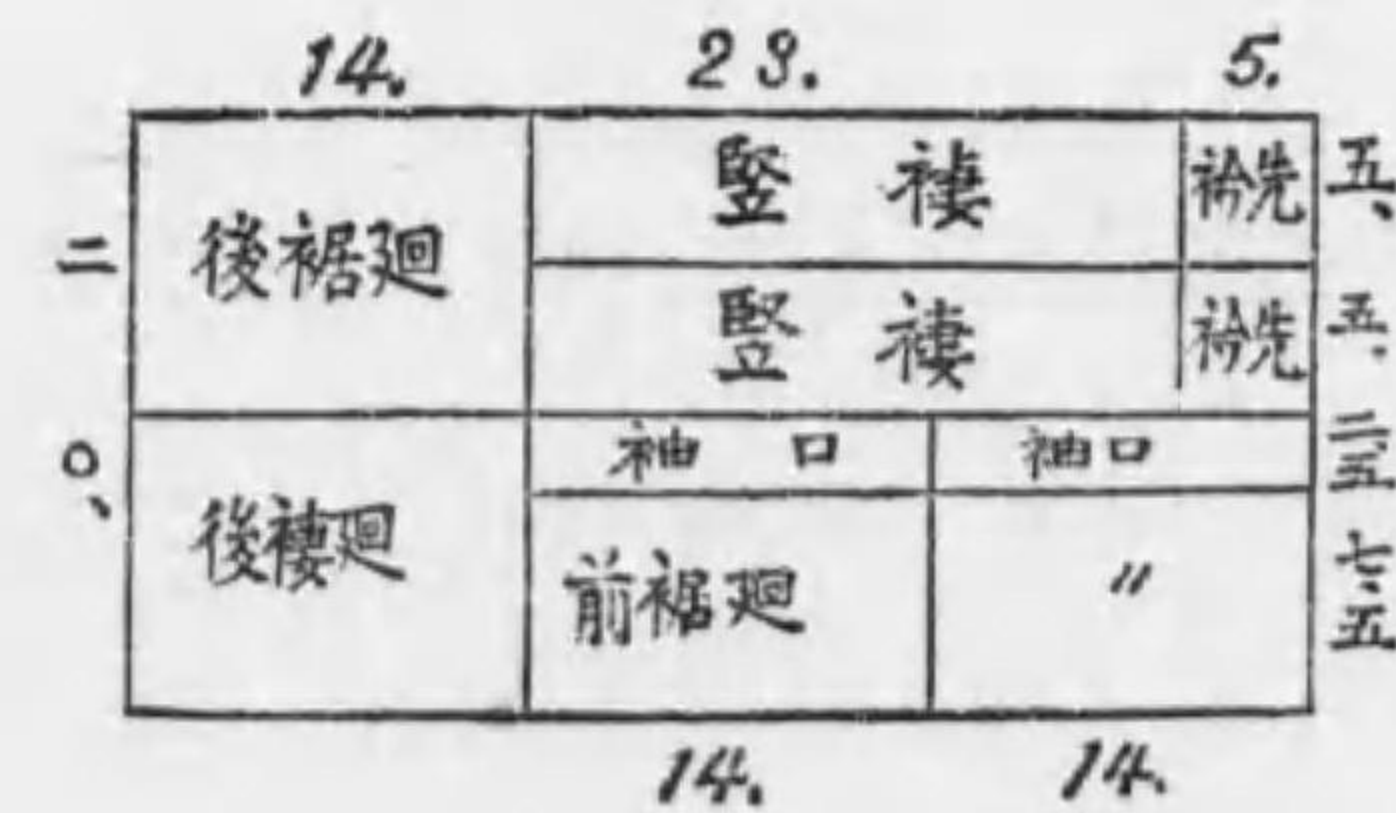
二尺幅にて裾廻しの裁ち方



袖口はざれを出さずに広くしてもよい

(282)

二尺幅に裾廻し裁ち方



服は縫ひ直し易い事が、清潔上、經濟上唯一のよい點であるが、若其縫ひ直しの折りに、元の大きい標が見える様になつては、疵物同様で見苦しいから、注意しなくてはならぬ、故に標は、出来るだけ弱く、小さく、交叉する所は、上又は下の標にして、十にならぬ事、又標は、必縫ひ込みの、内に入る様にして、出来上りの表面に出ぬ様にせねばならぬ、又縫ふ時間長くして、消える恐れのあるものは、縫ひ標をなし置くも、よろしい、又メリンス、セル、ネル等は、チヨーク、又は切り躰けを用ひるがよい。

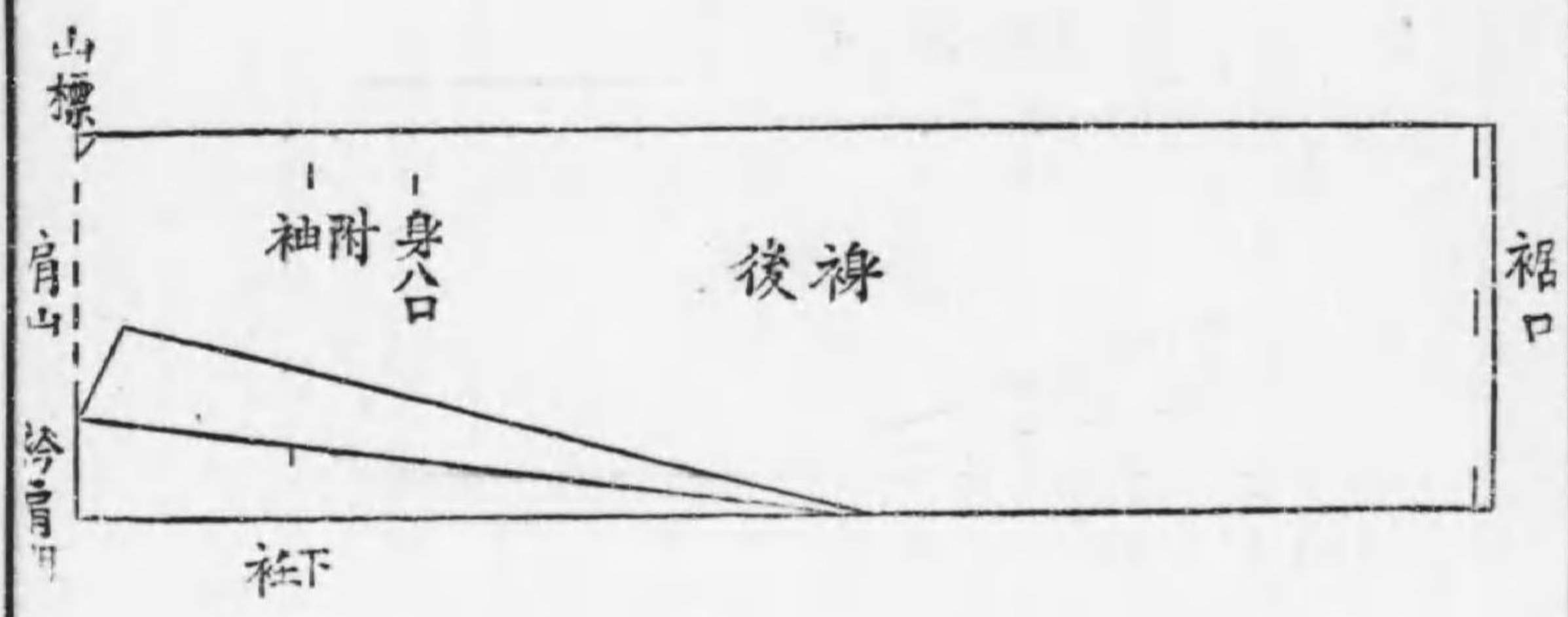
肩に繰り越しをする場合には、後身八つ口の下、五分又は一寸下りて、揚げをする。

縫ひ方。

注意すべき點。

縫ひ糸。色は、用布の地質と同色で、少し濃いもの、太さは、地質に

(285)



1. 表單衣の標附けに同じ
2. 背縫ひは、縞目、緋、模様等に注意して、衿肩明を訂正するがよい
但し衿肩明二三分より大きくなる時は、品物に依つて考へなければならぬ

(286)



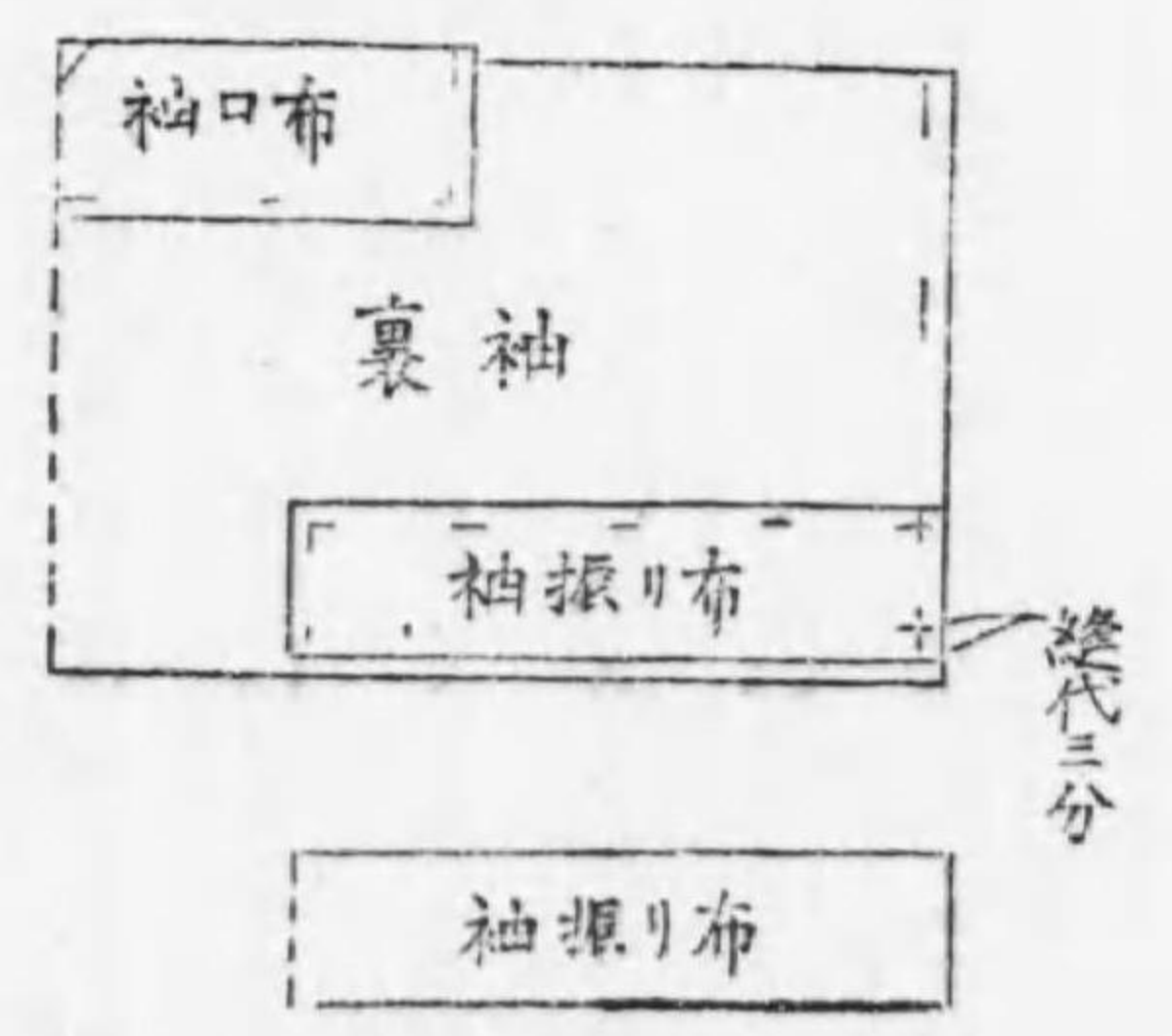
1. 裾の縫ひ代
2. 丈いつばい

(283)

(1) 表袖 (2) 裏袖

女長胴着に同じだから略する
(裏袖に振り布のつくもの)

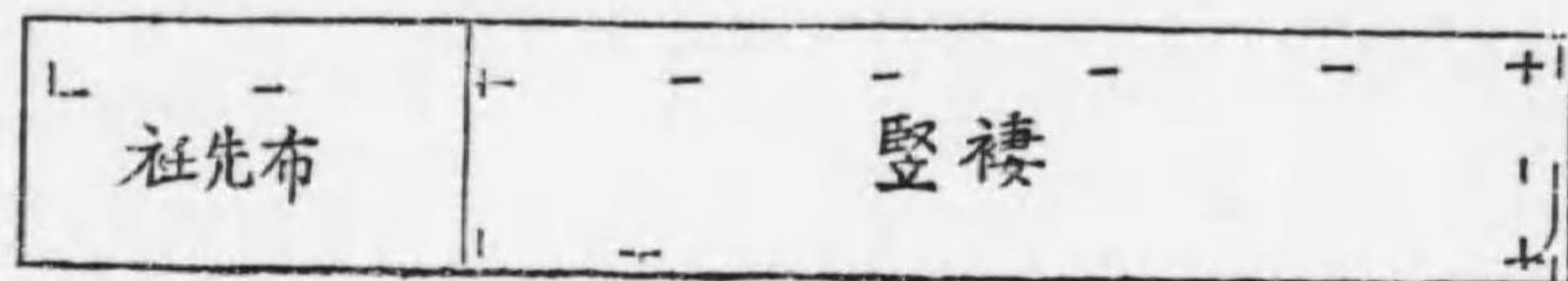
(284)



1. 振り布は、半幅又は四つ割りを用ひる
2. 假に袖幅の標を付け、其標上り、3 の振りの縫代を取つて、裏袖に重ね、圖の如く縫ひ附ける方の標を付ける、其他は前に同じ

(衽の三)

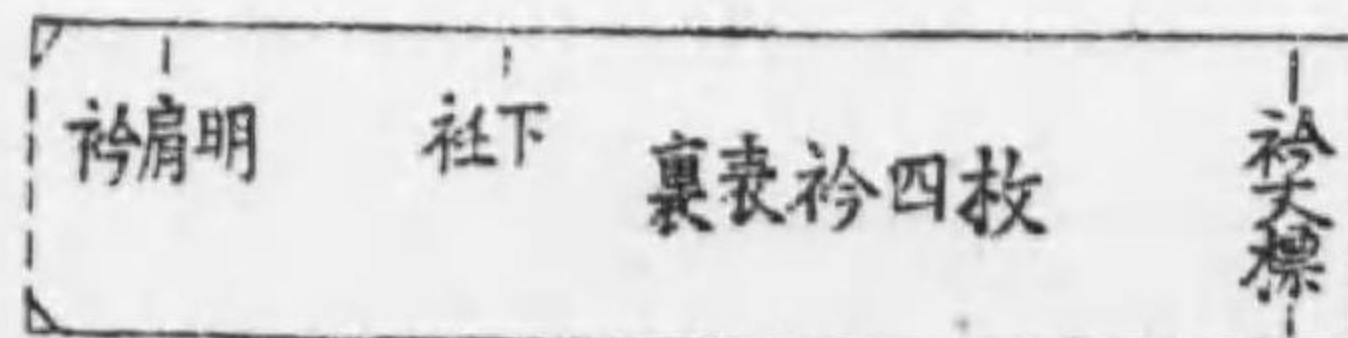
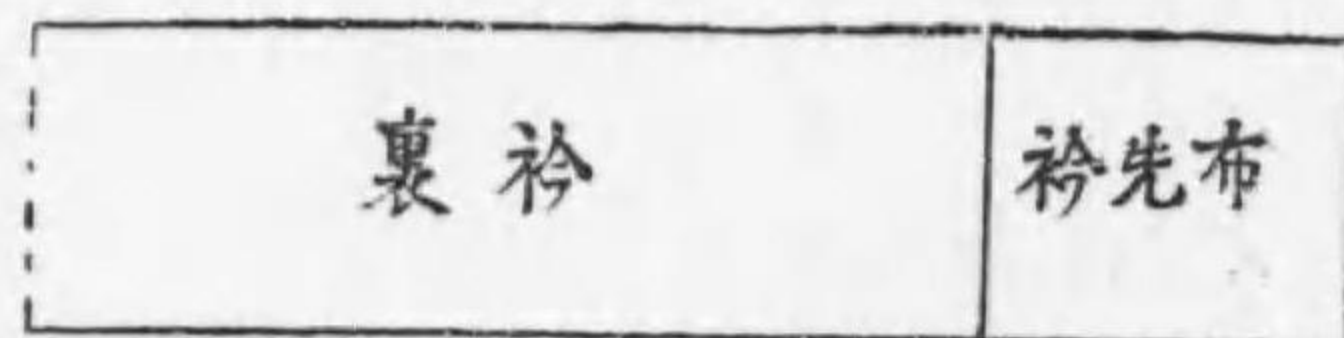
(290)



1. 襷の標を付ける
2. 胴接の標を付ける、衽附の方は+につける

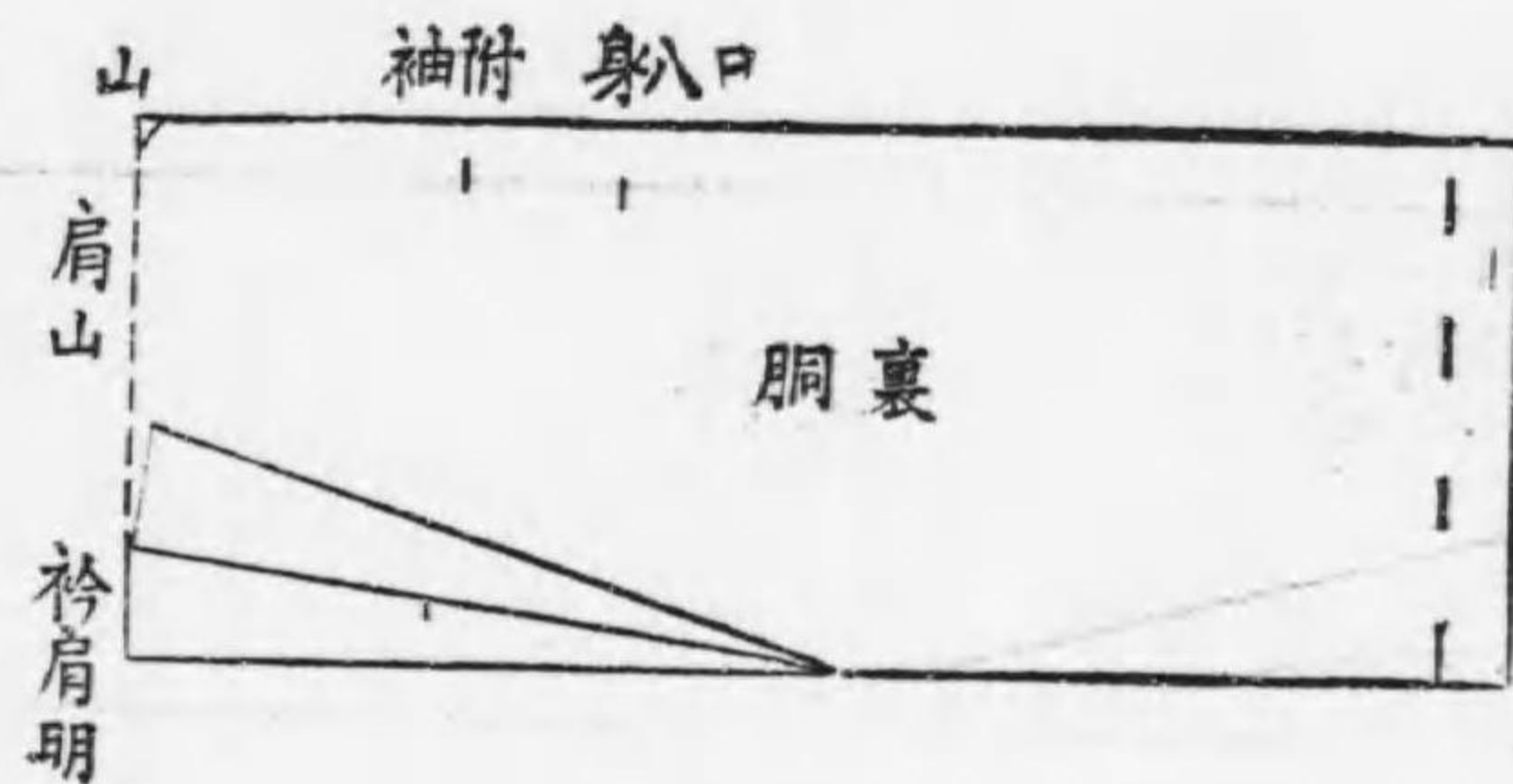
(衽)

(291)



1. 裏衽に衽先布を重ね其上に表衽を置く
2. 丈 (衽肩明ゆるみ+衽下+衽附)
3. 表を取り裏衽に衽先接の標を付ける

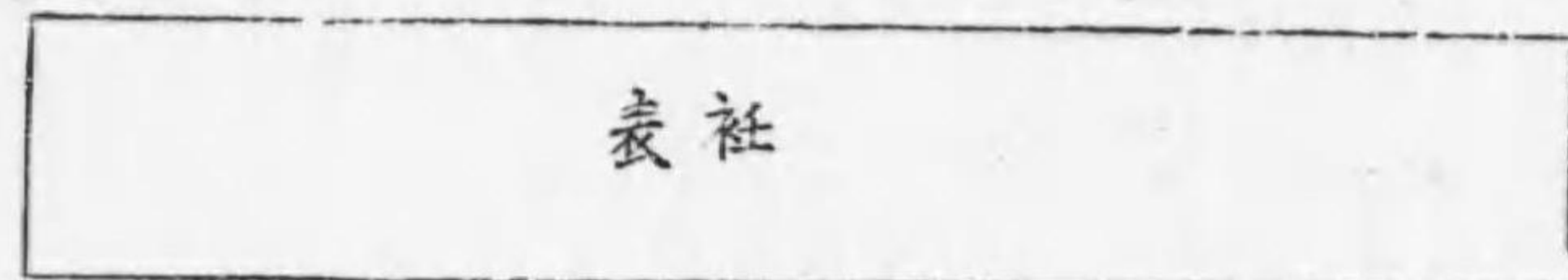
(287)



1. 丈 (表身丈-裾廻+衿×2+1) ^{ゆるみ}
其他表に同じ

(衽の一)

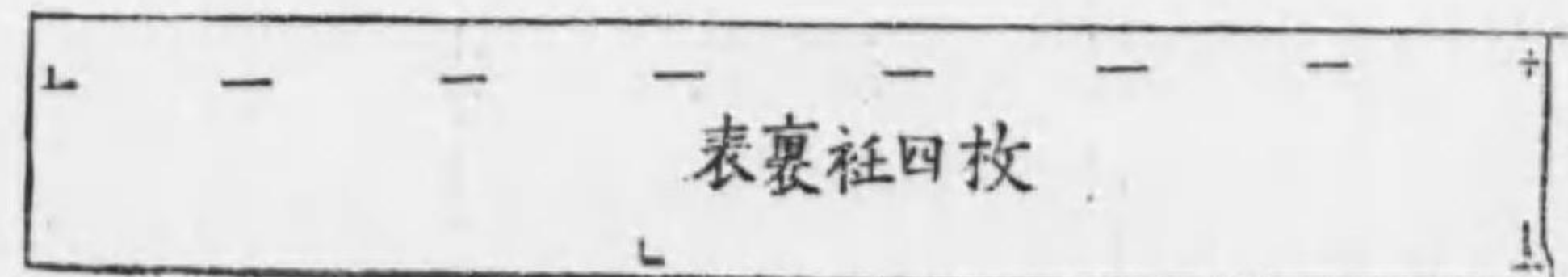
(288)



1. 切下げをつける

(衽の二)

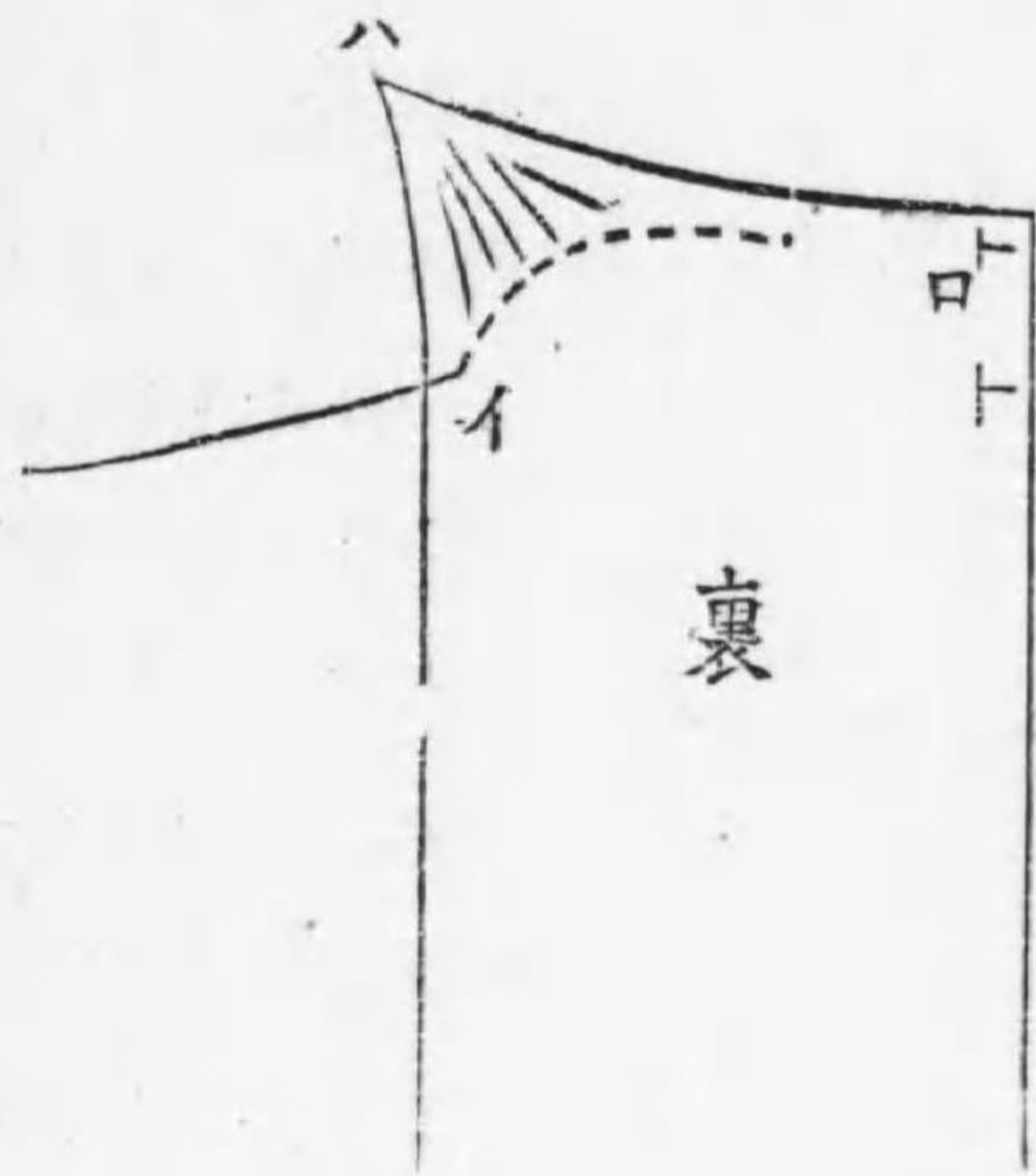
(289)



1. 裏衽先布に縦襷を重ね、表衽を上衿の二倍だけひかへて重ねる
2. 裾の縫代 .2
標附は単衣に同じ

出衿の四分を出二のりつて切り落す

(二) (294)



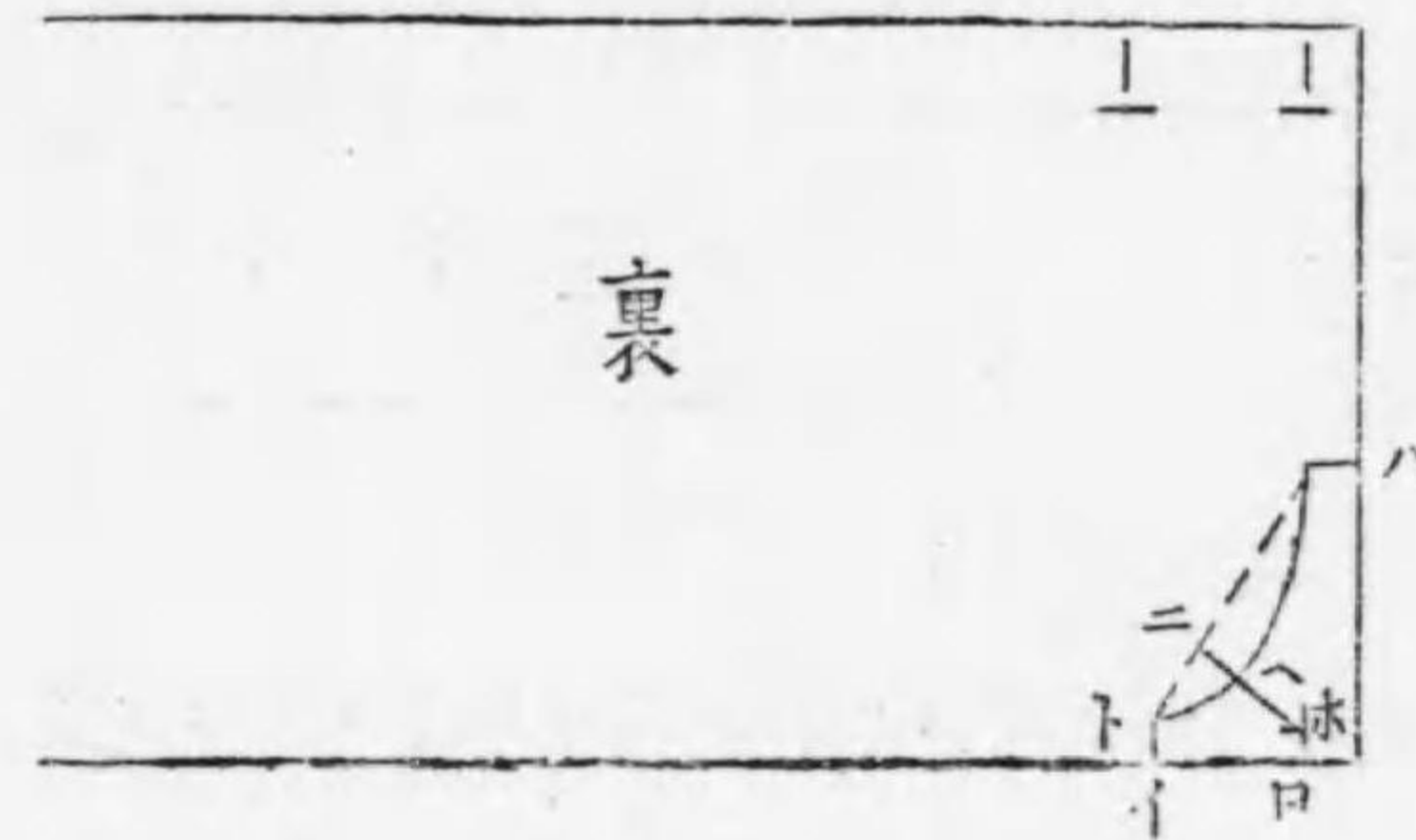
(ハ)をのぼし
 (イ)より(ロ)を表の衿幅に
 合せてちどめる、

(三) (295)



表と裏とを合せて、細かに待ち針をさし
 て、幅の方より縫ひ、衿先にて、抄ひど
 めをして、二針、三針、布一枚を抄ひて
 返す

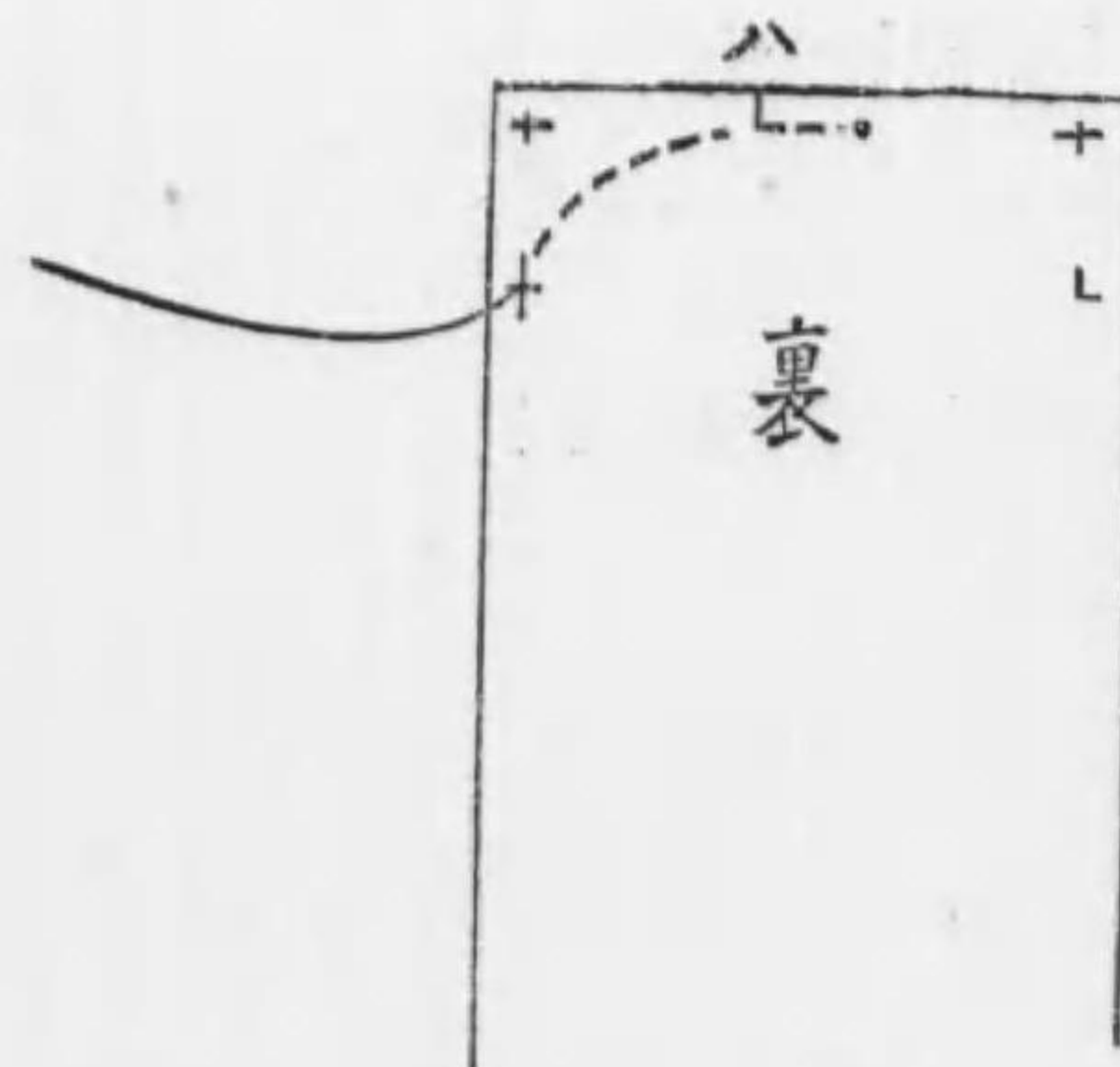
衿の標の付け方
(292)



(イ)より(ロ)までは出衿×2一切下(切下は、3以上の衿につ
 け、他は衿先で布目が、上らなければよい)
 (ホ)は(ロ)より、3(イ)より(ト)までも同じく、3
 (ホ)より(ハ)は出衿の二倍半
 (=)は(ハ)(ト)の三分の一
 (ハ)は(=)(ホ)の五分の三
 以上の標をさだめ、(ハ)より(ト)に形よく標を附ける

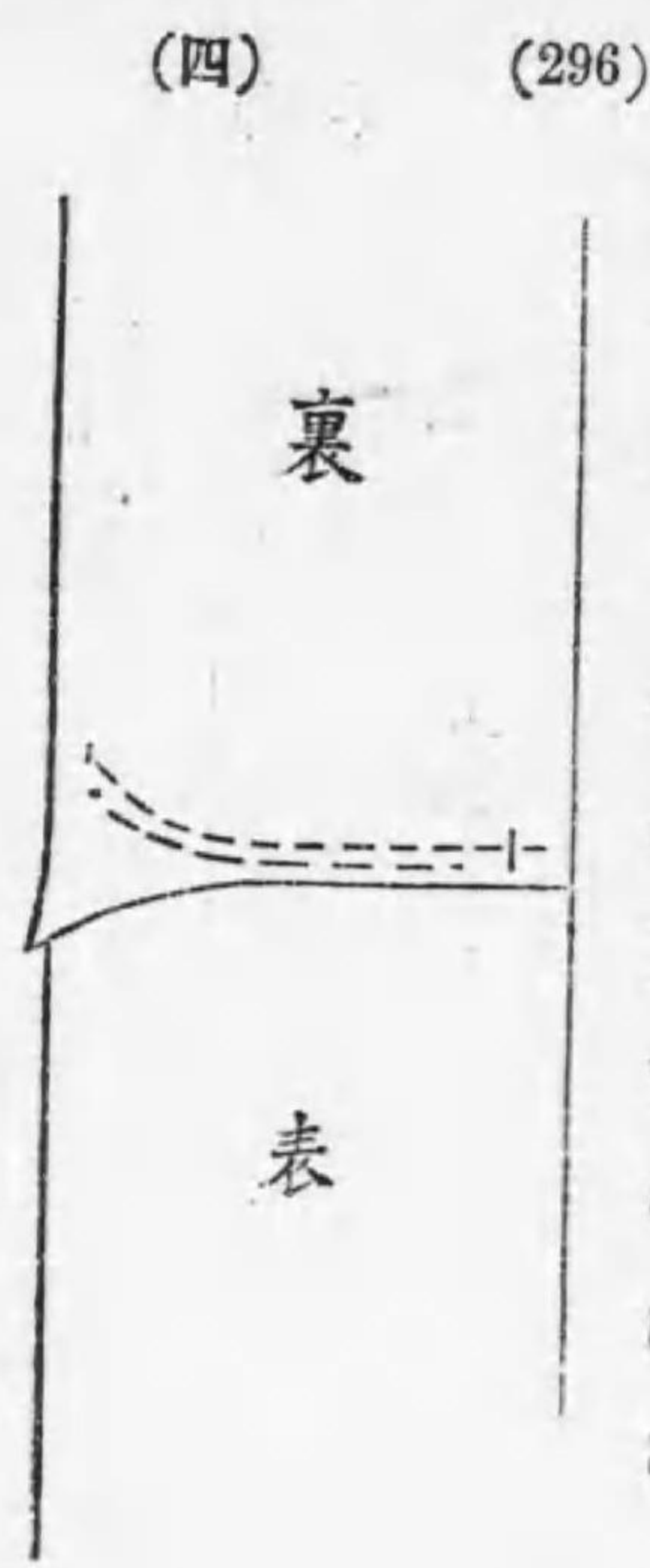
衿の縫ひ方

(一) (293)



木綿の袷け糸か、又は真
 綿を細くして(ハ)より五
 六分幅の方へよりたる所
 より、衿先までこまかく
 縫ふ

袷先は五厘、他は一分のきせにて、表に折り、袷先より一分五厘入り、裾山より一分五厘の所に五六分の針目に、隠し縫けをする、尙枉幅よりの方は、一針袷先によりたる所とめる



依つて、選ばなくてはならぬ例へば、地薄物を太い糸で縫ふ時は縫ひ目が縮み、又厚地を細い糸で縫ふ時は、しつかりしない、なほ縦の縫ひ目は、適當に丈夫な糸をつがずに縫つて、綻びの出来ぬ様にし、紵け目は、少し細糸の方がよい、裏などの異つた色のものを

を縫ひ合せるには、染まぬ糸を使ふがよい(白と赤とを縫ひ合せる時は、白を用ひるやうに)、但し糸の目だつ場合は、適當にする方がよい。

針目。單衣に比べて、裏が附く故に、少しあら目でもよいが、背縫ひ袖付けは、極こまかく縫ふ、なほ裏表の裾口四五寸の間も、極こまかく縫ふ。

被せ。着くづれのせぬ様に、糸の見えぬ程度に、少い方がよい、特に袖付け背縫ひなどは少い方がよい(但し場所によりて、多くする處もあるから、それは其都度説明する)。

- (一) 袖。
- (イ) 袖口掛け。男半胴着に同じ。
- (ロ) 表裏の袖口明きの標を合せ、表袖口明きと、裏の袖口明きとをゆるく、袖口布を張りて、表袖を手前にして、口明きを縫ひ

(兩端を一分程標より縫ひ残す)五厘のきせをかけ、表袖の方へ折る。

(ハ)袖口明きの標の所で四つ留めをなし(四つ留めの仕方は、外袖を極浅く斜めに、裏の方に折り込み(袖口を合せた所の縫ひ込みのつらぬ様に)表裏の内袖で外袖をはさみ、左の袖は袖口を右に持ちて、表を手前にし、袖口標の所で、きせの山より針をいだし、外袖の表裏の山を、浅く抄ひて、内袖の裏のきせ山(表より少しふかめの所、かうすると、表返して、袖口先の所が前後よく揃ふ)に出だし、それより小針に、袖下の方から又外袖二枚を前の様に抄ひて、表袖に戻り、始めの糸と結び合せ、それより下は四つ縫ひにして、二寸位返し縫ひにし(四つごめをして、表裏別々に二寸位縫ひ、裏の縫ひ目を割りて、表と綴ち付け、それより下は、四つ縫ひにする事もある)、それ

より袖形を付け、袖下の幅三分の一位までは四つ縫ひ、それより表裏別々に縫ふ。

袖幅の標を付け、(上り幅に一分増す)袖形を拵へ、裏の方を地薄のものは五厘、地厚のものは、一分位つめ、袖下の處で、裏をより加減にして、表を見て、振りを縫ふ。

平鋏を掛け、表返して、振り、袖下、袖口下、袖口と躰けを掛ける
(女衿長襦袢参照)。

(一) 裄。

(イ) 表。背を縫ひ、後幅、肩幅の標を付け、脇を縫ひ、前幅の標を付け、折りを付け、脇くせを取る事、單衣に同じ。

(ロ) 裏裄。胴裏と裾とを縫ひ合せ、胴裏の方へ折りて躰けを掛け、背を縫ひて、後幅、肩幅の標を付け、表布と反對の方に折り裾口では、後幅を五厘位つめ、脇を縫ひ、折りを付けて、くせを

取る。

(ハ) 裾。表裏の裾口を、表を見て縫ひ合せ、(女長胴着に同じ)一分のきせを掛け、表返し襷を定めて、假躰けをする。

(ニ) 背綴ち。脇綴ち。女長襦袢に同じ。

(ホ) 身八つ口縫ひ方。(へ) 袖付け方女長襦袢に同じ。

(ト) 前襷を、表裏よく合せて、衿付けの所を假綴ちをする。

(チ) 袷縫ひ、及び衿付け。堅袷と、衿先とを接ぎ合せ、衿先の方へ折りにて、躰けを掛け、二九三圖より二九七圖の如く袷を縫ひ、

衿と前襷との襷を揃へ、衿で襷をはさみて裾口を留め、左右とも、裾口より四つ縫ひにし、表の方へ折る。(裾口二寸位別々に縫ひ、それより上は、四つ縫ひにしてもよい) 尙絹布の時は、四つ縫ひにせず、別付けにする。

(リ) 衿下縫ひ。衿を平にして、始め標付けの時、袷先と衿下に附

けたる、縫ひ代の標より、五厘浅く標を付け、衿にて皺にならぬ様に、襷をくるみて、袷先をとめ(表のきせの山から、針を裏に出して一針返す)、衿下を縫ひ合せ、表の方へ折り、袷さきの皺にならぬ様にし、袷先をさきに出し引き返し、躰けを掛ける。

(又) 衿付けを、表裏假綴ちをする。

(ル) 衿付け。裏衿に衿先布を接ぎ合せ、裏衿の方へ折りにて、躰けを掛け、本裁ち女単衣の如く附ける。

(ヲ) 衿紵け。共衿。女単衣に同じ。

(ワ) 裾綴ち。衿に一針表裏と出し、それより外は、針數、出し方等、女長襦袢に同じ。

(カ) 仕上げ。裏を出して、背縫ひ、下前の脇より、衿、衿下より、衿、上前の衿、脇と火熨斗を掛け、表返して、前と反対に、上前より下

前に掛け、次に袖を掛け、衿の三つ衿を二つに折りて掛け、次に疊みながらかける。
木綿は、火熨斗をかけるに及ばぬ。

本裁ち男衿

各部の名稱。男單衣、女衿参照。

普通仕立て上げ寸法。單衣に同じ(裾襖一分)。

裁ち方積り方。

表。女單衣に同じ。

裏の裁ち方積り方。

裾廻し附きの場合は、女衿に同じく、唯裾廻しの丈を、少し長くする(一反にて二枚分取る)。

通し裏の場合は、次の四種の裁ち方を、適當に用ひる。

(イ) 棒衿裁ち。

(ロ) 鈎衿裁ち(用布の短き場合)。

(ハ) 二つ割り衿裁ち(同上)。

(ニ) 三つ割衿裁ち(同上)。

以上女單衣、裁ち方圖参照。

注意。裏丈は、裱及び衿は、表布より襖の二倍だけ、長ければよいわけであるが、縫ひ直しの度に、裾が切れたり、又は汚れたために裁ち切られるのであるから、十分に長く裁ち置き、肩で揚げをして置く方がよい。

標の附け方。

(裏は棒衿裁ちにて、身丈は表丈より襖の二倍丈、長い物を取る)。

表袖。裏袖。男胴着に同じ(袖口下の方は表と同寸、袖附けの方で裏を五厘つめる)。

裏

(298)

袖附

後身

揚

肩山

衿肩明

丈標

衿肩明と同寸

出施の二倍

1. 丈を裁ち揃へる
2. 裾口の縫代
3. 出施の二倍の標
4. 丈標(表身丈と同じ)
5. 袖附標
6. 丈の標の所にて、衿肩明と同寸の標
7. 前裨に衿下の標

表裨、單衣に同じ(裾口の縫ひ代は二分とし、尙丈には裾口のさせの分として、單衣より丈を一分長くする)。

裏裨(二九八圖)。

衿及び衿。女衿に同じ。

但し衿丈の上で、衿下りより多く縫ひ込みのある場合は、前の揚げに合わせて、揚げをする。

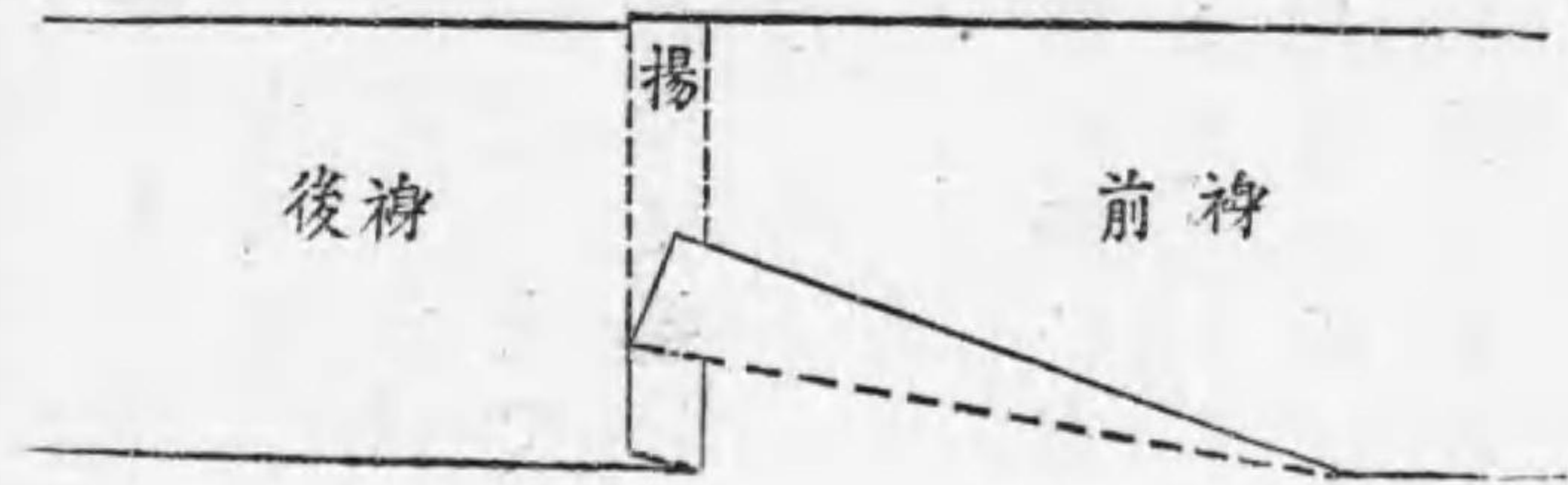
縫ひ方。

(一) 袖。

(イ) 袖の縫ひ方は、女衿と略同様であるが、袖幅から二寸位手前より、人形の留まりまで、表裏別々に縫ひ、袖下は普通に折り、人形の所は表裏とも、縫ひ目を開き、縫ひ代を始末して、角で一針さめ、表返して、懸けを掛ける(男衿半襦袢参照)。

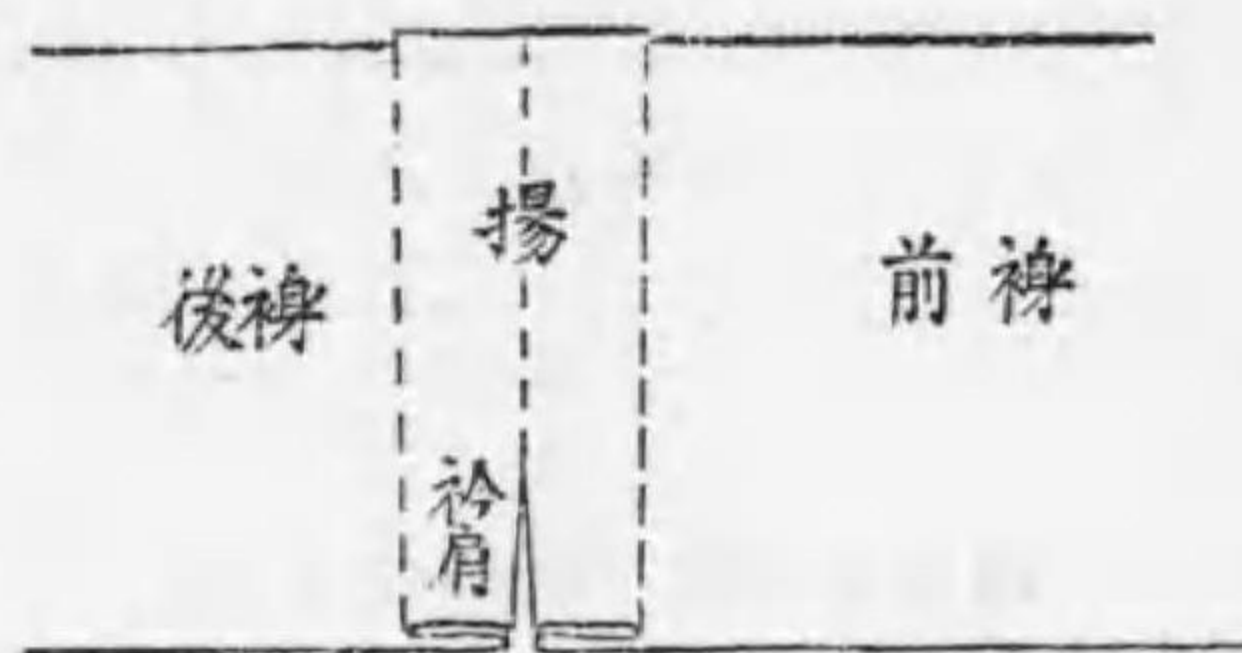
(二) 裨。

(299)



- (イ) 表衿。背を縫ひ、後幅、肩幅の標を附け、前後の揚げをして、脇を縫ひ、前幅の標を附けること、単衣に同じ。
- (ロ) 裏衿。背を縫ひ、後幅の標を附け(寸法のつめ方、女衿に同じ)、背に折りを附け、肩の揚げを、袖附けの山から、衿肩明きの標まで縫ひて、抄ひどめをなし、揚げの少き時は片返し、多き時は縫ひ目を割りて、(圖の如く)伏せ縫ひをする。
- 次に脇を縫ひ、裾口を表裏縫ひ合せ、出衿をさだめて、背、脇の縫ひ目を綴ちること、女衿の如し。
- (ハ) 袖附け。男衿襦袢に同じ。

(300)



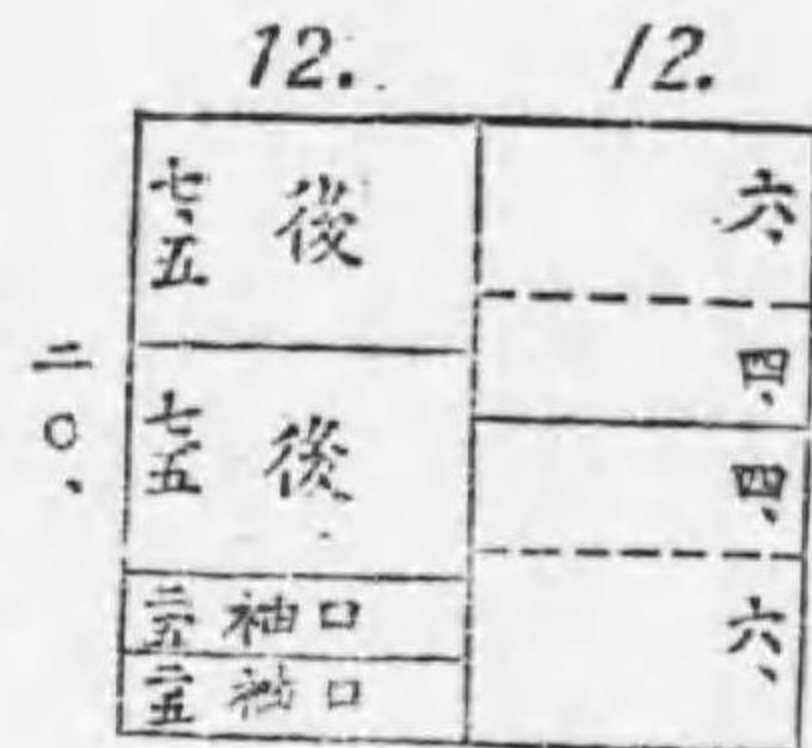
- (ニ) 褙及び衿附け。女衿と同様。
- (ホ) 衿附け及び共衿。本裁ち男単衣と同様である。
- (ヘ) 裾綴ち。女衿に同じ、但し前後とも、針目を一針多くする。
- (ト) 仕上げ。女衿に同じ。

四つ身衿

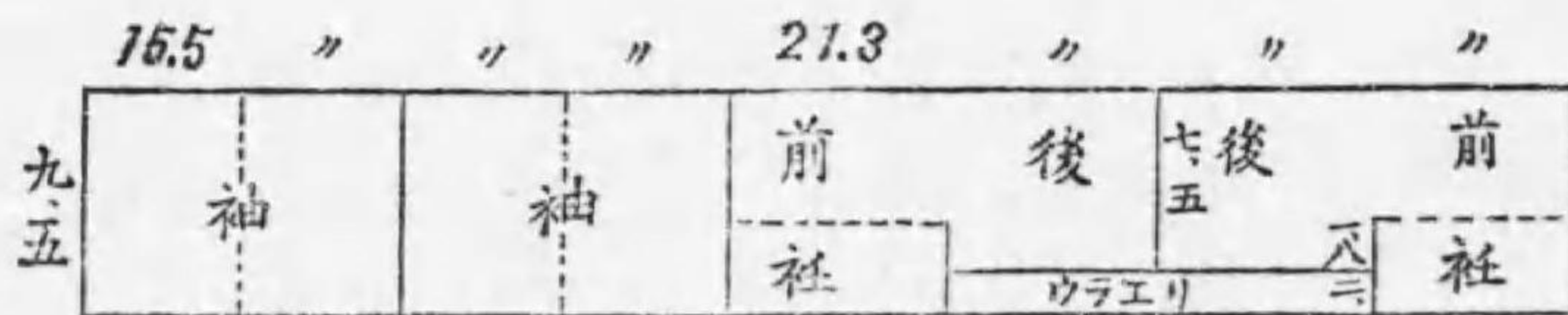
各部の名稱。四つ身単衣、女衿参照。

- (イ) 袖の種類 (ロ) 表用布 (ハ) 附け紐用布、及び地質 (ニ) 普通仕立て上げ寸法、裁ち方積り方、裁ち切り寸法等、四つ身単衣に同じ。
- 裏の裁ち方、積り方。
- 通し裏 表の身丈より、衿の二倍だけ長くする外、表に同じ(但し

(303)



(304)



積り方公式 表袖丈×4+(表身丈15衄×2+胴接縫代-裾丈)×4=裏用布

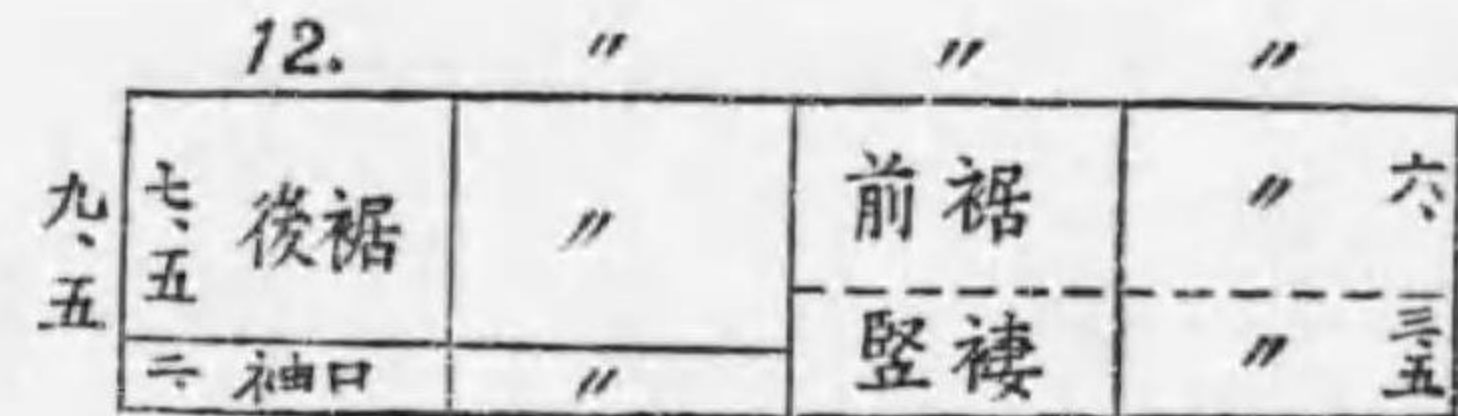
同算式 表袖丈 袖用布
15.5×4=62

表身丈 出衄 胴接 裾丈 裏用布
(31+.15×2+2-12)×4=85.2

袖用布 胴裏用布 裏用布
62 + 85.2 =147.2

別に袖口布を常幅四つ割り
で、長さ一尺二寸位を要する。
裾廻し付き。
(イ) 常幅四尺八寸の布を以て、
裾廻しの裁ち方(三〇一圖)
裁ち切り寸法、
裾廻し一尺二寸。
(ロ) 常幅三尺四

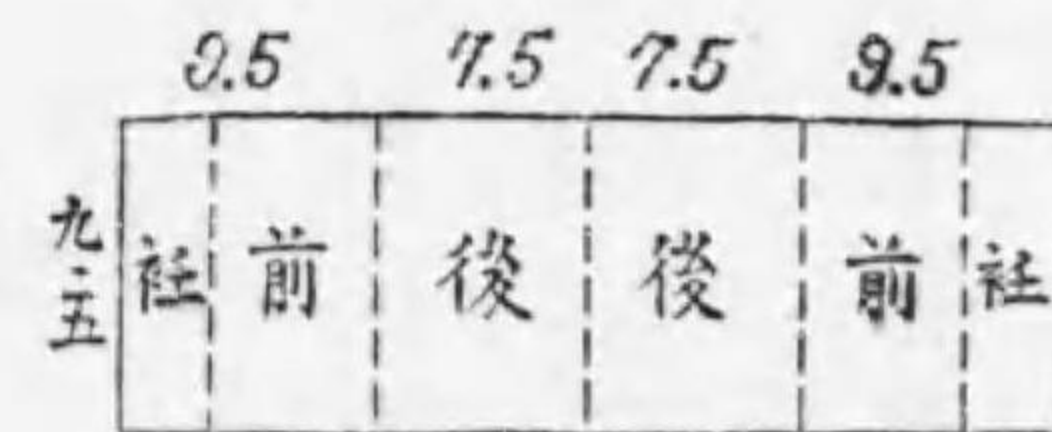
(301)



積り方公式 裾廻の丈×4

同算式 12×4=48

(302)



積り方公式 (表の裁切幅より求める)

(常幅+後幅)×2=用布

前幅及び衿幅 後幅 用布
同算式 (9.5 + 7.5)×2=34

積り方公式 (出来上りより求める)

(前幅+衿幅+後幅)×2+縫代=用布

前幅 衿幅 後幅 用布
同算式 (5.2 + 3.3 + 6)×2+3=32

縫代の説明 背脇の前後 衿と前 衿下 總縫代
(.3 + .6 + .3 + .3)×2=3

寸の布を以て、裾廻し横布の裁ち方(三〇二圖)。
 寸法。(表幅に依る)別に袖口布を要する。
 (ハ)二尺幅二尺四寸の布を以つて、裾廻しの裁ち方(三〇三圖)。
 胴裏。

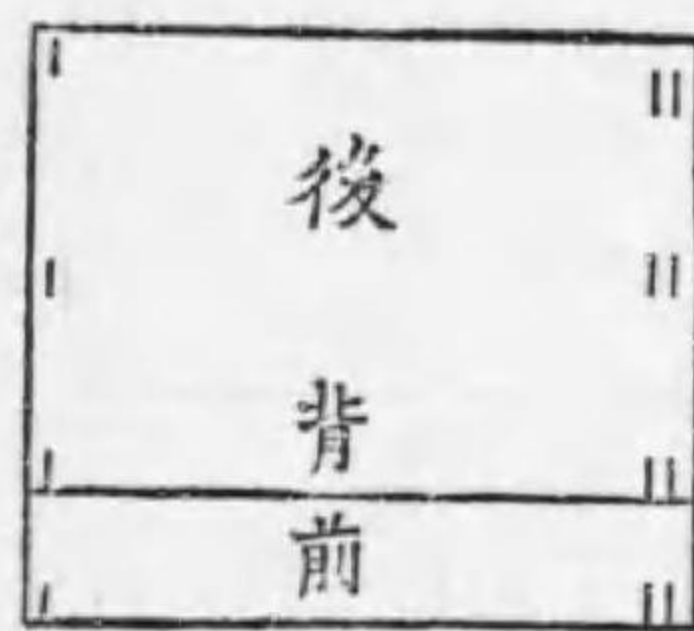
常幅八尺五寸二分の布を以つて、胴裏の裁ち方。
 但し(イ)の裾廻しにつける(三〇四圖)。
 標附け方。

袂袖。表袖裏地とも、本裁ち、女衿に同じ。

元祿袖。表は單衣に同じ。裏は、袖口布を女衿の如く重ね、丈を
 振りの方にて五厘つめる、其他は表に同じ(袖口布の標附けは、女
 衿に同じ)。

表衿。裾口の縫ひ代を淺くする外、單衣に同じ。
 胴裏。

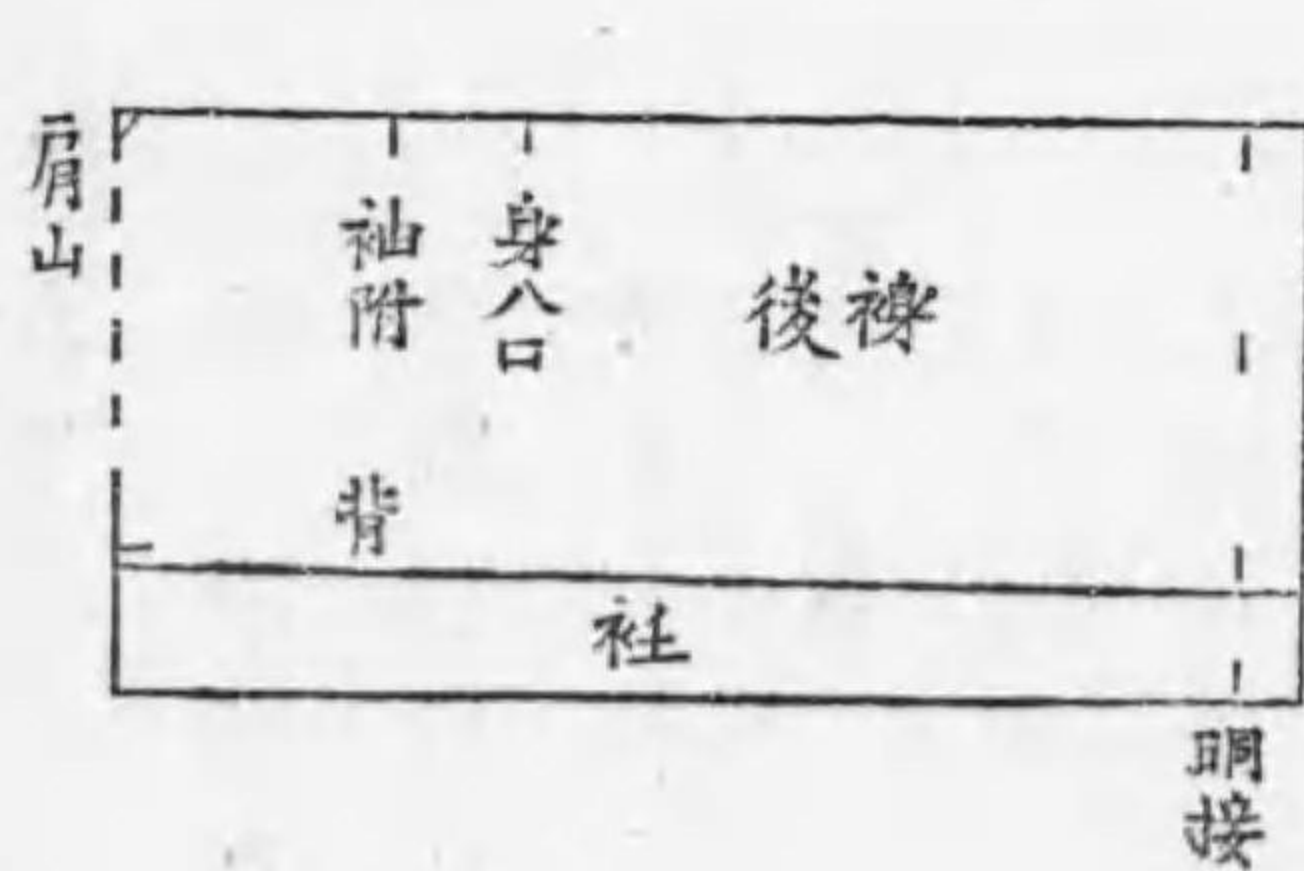
裾廻し (305)



1. 丈を裁ち揃へて、丈標
2. 出衿の二倍
3. 丈標

裾口

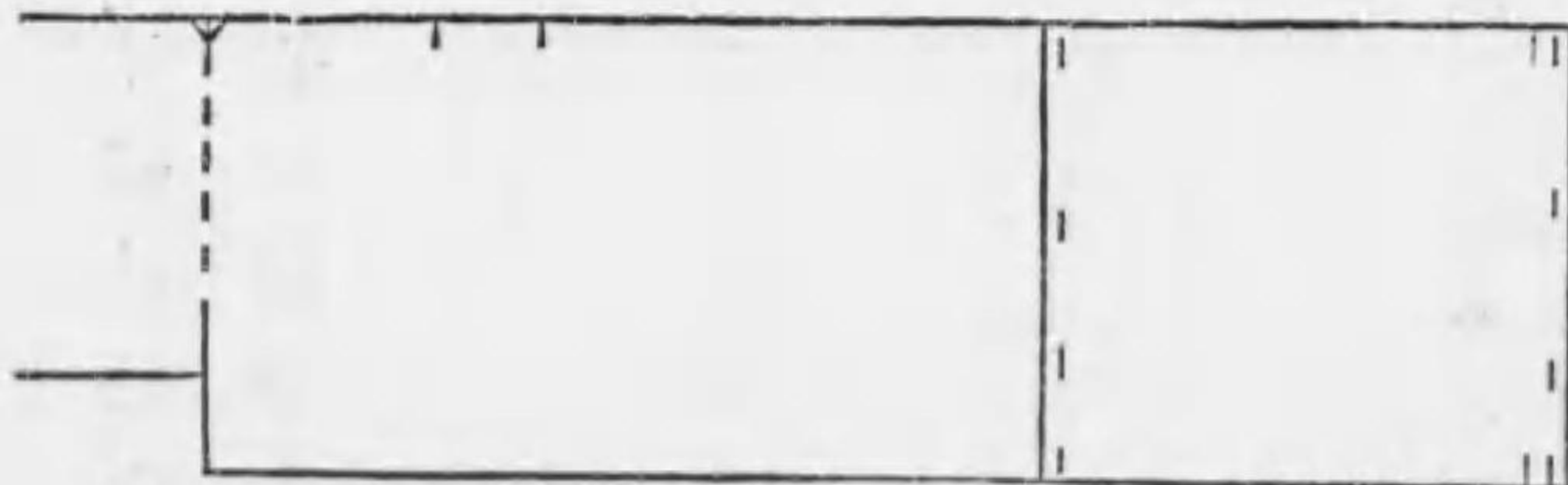
胴裏 (306)



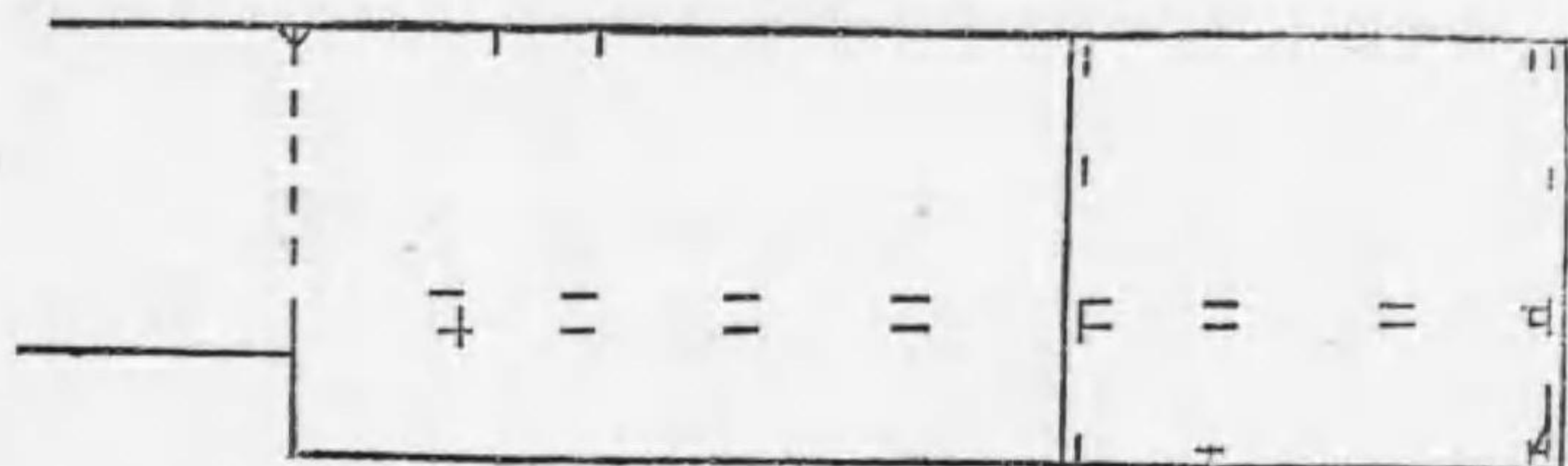
- 表身丈 裾丈 出衿
1. 丈 $(31 - 11.7 + .15 \times 2)$
 2. 袖附
 3. 八つ口

前胴裏に裾廻しを重ねる

(307)



(308)



胴裏に裾廻しを重ねて、表と同じ仕方にて、衿の標を附ける。但し衿幅、相袂幅は、表を度りて附ける、故に縫代は幅によりて、表と同じにならぬ事がある。
衿先の縫代は相袂より三分多くする、事、表と同じ。

縫ひ方。

(一)袖。袂袖女衿に同じ、元祿袖は、丸みを單衣の如くよせ、其他の縫ひ方は、女衿に同じ。

(二)衿。表。

(イ)背縫ひ。背を縫ひて、後幅、肩幅の標を附ける。

(ロ)衿縫ひ、脇縫ひ。單衣に同じ。

(三)裏衿。

(イ)胴接ぎ。女衿に同じ。

(ロ)背縫ひ、衿縫ひ、脇縫ひ。表に同じ

(背の折りは、表と反對の方に返す)。

(ハ)裾口を合せ、背脇を綴ち、身入つ口を縫ひて、袖を附ける事、女衿に同じ、裾合せは、始めに、下前の衿附けの縫ひ目から二寸位、袂先の方へよつた所から、上前の袂先まで縫ひ、次に下前の袂を裏から縫ふ。

(ニ)衿綴ち。裾口から衿先まで背、脇と同じ様に綴ちる。

(ホ)衿下縫ひ方。女衿に同じ。

(ヘ)表衿に、裏衿の縫ひ附け方。單衣に同じ。

(ト)衿附け、紵け方、共衿掛け方。單衣に同じ。

(チ)裾綴ち。前は裏に三針、表に六針、後は裏に四針、表に八針となし、綴ち方は女衿に同じ。

附け紐、肩揚げ、腰揚げ等 單衣に同じ。

三つ身衿

各部の名稱。三つ身單衣、女衿参照。

(イ) 表用布 (ロ) 附け紐用布 (ハ) 普通仕立て上げ寸法 (ニ) 裁ち方

積り方裁ち切り寸法等單衣に同じ。

裁ち方積り方。

常幅一丈一尺八寸の兩面物を以て、元祿袖三つ身衿、表の裁ち方。

裁ち切り寸法。

袖丈七寸五分衿肩明き一寸七分(三〇九圖)。

裏の裁ち方積り方。

(1) 通し裏。表の身丈より袴の二倍だけ長くする外、表に同じ、別

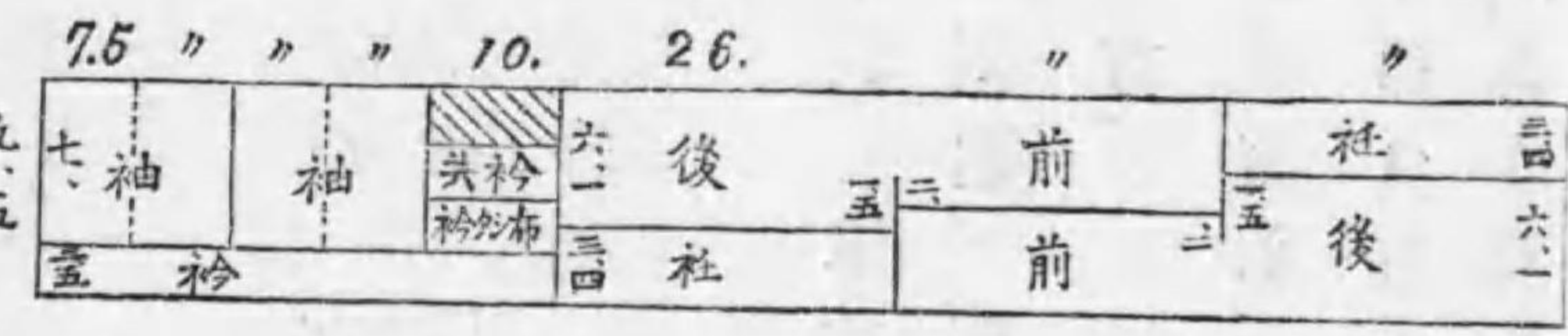
に袖口布を、常幅四つ割にて、長さ一尺位を要する。

(2) 裾廻し付き。常幅三尺の布を以つて、裾廻しの裁ち方(他に袖

口布を要する(三一〇圖)。

胴裏。常幅の布を以つて、胴裏の裁ち方(前の寸法通り)(積り方の式は次頁)

(309)

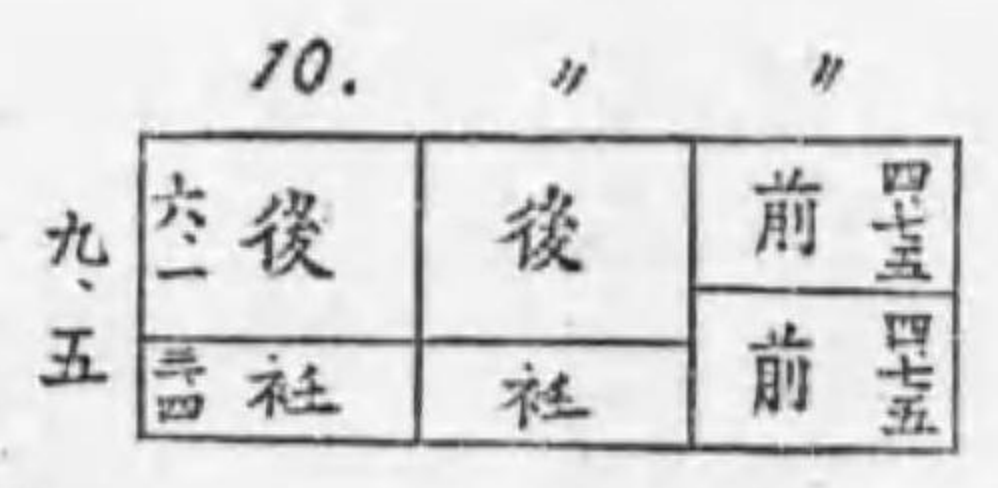


積り方公式 (用布-袖丈×4-衿のたし布)÷3=身丈

同算式 袖丈 袖用布 用布 袖用布
7.5×4=30 118-30=88

衿のたし布 袴の用布 身丈
88 - 10 = 78 78÷3=26

(310)



積り方公式 用布÷3=裾廻丈

同算式 30.÷3=10

裏胴の積り方公式

袖丈×4+(表身丈-裾廻丈+出袴×2+胴接代)×3=裏用布

袖丈 袖用布 身丈 裾廻丈 袴 胴接ぎ 胴裏
7.5×4=30 26 - 10 +.1 × 2+2=182

胴裏用布 裏總用布
18.2×3=54.6 30+53.6=83.6

三つ身衿

二五五

標付け方。

(一) 袖。

(イ) 袂袖。女衿に同じ。

(ロ) 筒袖。四つ身単衣に同じ(裏には、袖口布を重ねて付ける)。

(ハ) 元祿袖。四つ身に同じ。

(二) 裨。

(イ) 表。単衣に同じ(裾口の縫ひ代二分)。

(ロ) 裾廻し、胴裏、衿、衿等の標付け方は、女衿及び四つ身に同じ。

縫ひ方。

(一) 袖。筒袖。

(イ) 袖口布を、裏袖に縫ひ付ける。

(ロ) 袖口明きを、表裏合せて縫ひ、袖下を、袖口明きの所にて、裏表

ごも五分程、別々に縫ひ、それより四枚揃へて、袖幅の標より、二寸位手前まで縫ひ、其所にて一針返して留め、それより、袖幅標まで、裏表別々に縫ふ。

(ハ) 振りを縫ひ、縫ひ代を始末して、表返して、袂けを掛ける、袖幅の縫ひ込み多き場合は、振りを縫はずに、中に折り込みて、袂けを掛け置き、袖を付けてから、紵けてもよい。

(二) 裨。

(イ) 表の背を縫ひ、後幅、肩幅の標を付けて、脇を縫ふ。

(ロ) 裏も表と同様に縫ふ(背の折りは反対の方に返す)。

(ハ) 裾合せ、背脇の豎綴ち、身八つ口の縫ひ方、袖付け方等、本裁ちに同じ。

(ニ) 裨上げ、衿付け、衿下の縫ひ方等、本裁ちに同じ。

(ホ) 表衿に裏衿の付け方、衿付け方、紵け方、共衿掛け方、裾

綴ちの仕方等、四つ身に同じ。

(へ) 仕上げをする。

(ト) 附け紐、腰揚、肩揚げ等、四つ身に同じ。

一つ身 袷

各部の名稱。一つ身單衣、女袷参照。

表用布。單衣に同じ。

袖口布。常幅四つ割りにて、袖丈と同じ長さの物、二枚を要する。

裏袷。幅一寸五分、丈は表に同じ。

附け紐用。布單衣に同じ。

仕立て上げ寸法。裁ち切り寸法、表の裁ち方積り方等は、單衣に

同じ。

裏の裁ち方。

(イ) 通し裏。表身丈より、出袴の二倍だけ長くする外、表の裁ち

方積り方に同じ、但し別布、常幅四つ割りで、袖丈と同寸の袖

口布を要する。

(ロ) 裾廻し付き。

常幅三尺の布を以つて、裾廻しの裁ち方積り方(但し別に袖口布

を要する(三一圖)。

常幅の布を以つて、胴裏用布の、裁ち方積り方。

表袷の裁ち切り寸法。

袖丈、一尺三寸 身丈二尺一寸五分(三一圖)。

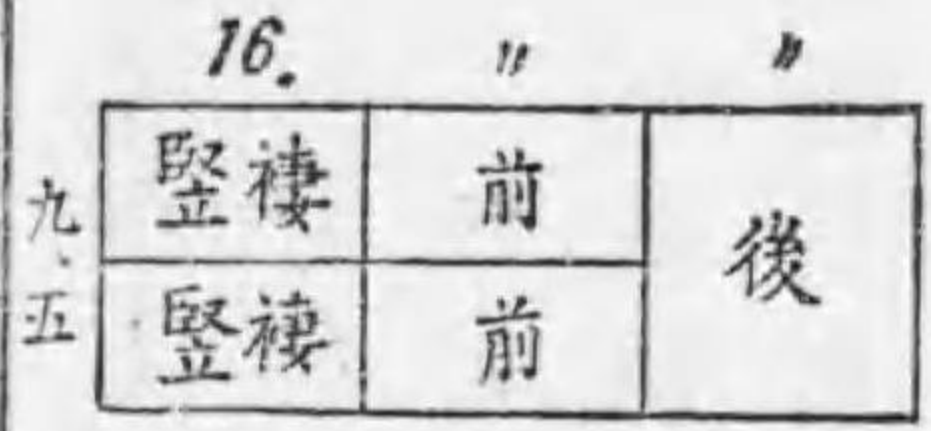
標附け方。

(一) 袖(三一三、三一四圖)。

(二) 表袷。單衣に同じ、(裾口の縫ひ代、二分)

(三) 裏袷。

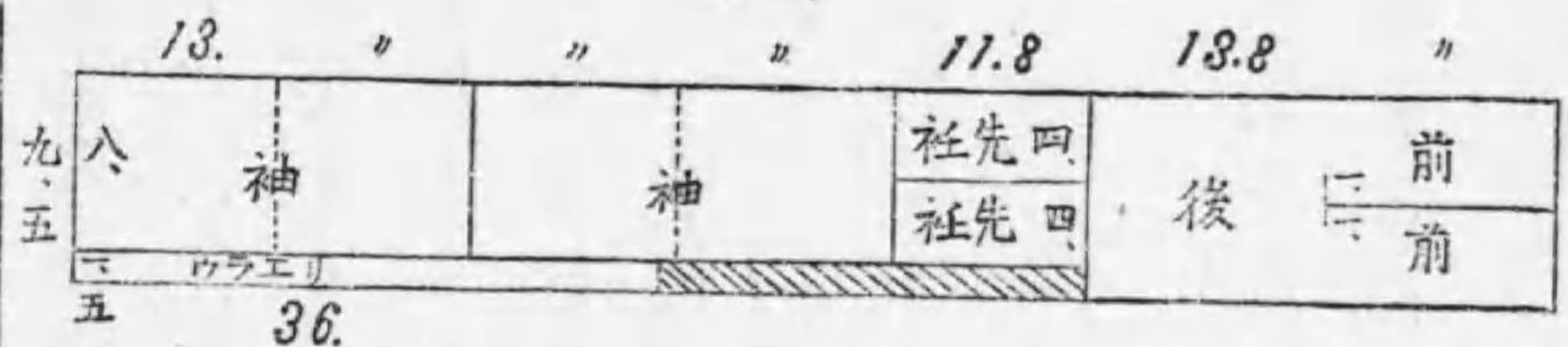
(311)



積り方公式 用布÷3=裾廻丈

同算式 30÷3=10

(312)



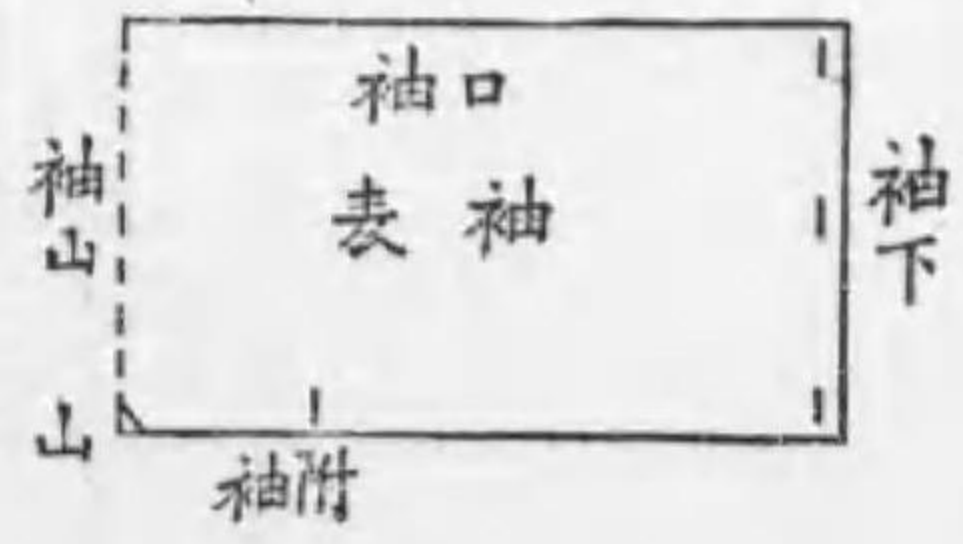
積り方公式 袖丈×4+(表身丈-裾廻の丈+胴接代+出袖×2)×2+(表衿丈-縦襷丈+胴接代+出袖×2)=裏用布

同算式

袖	袖用布				
13×4=52					
表身丈	裾廻	胴接代	出袖	胴裏用布	
(21.5 - 10 + 2 + 0.15×2)×2=27.6					
表衿	裾廻	胴接代	出袖	衿先	
19.5 - 10 + 2 + 0.15×2=11.8					
袖用布	胴裏用布	衿先用布	袖用布		
52 + 27.6 + 11.8 = 91.4					

(313)

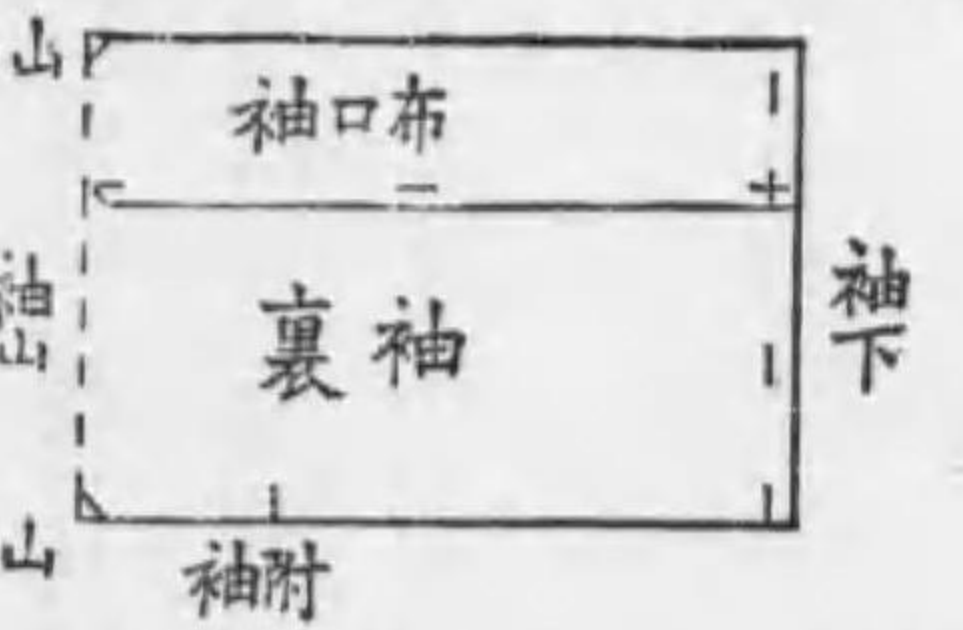
(1) 表袖 中表に二枚重ねて、丈を二つに折る



1. 表袖丈(仕立上寸法+.1)
2. 山標
3. 袖附標

(314)

(2) 裏袖 中表に二枚重ねて丈を二つに折り、其上に袖口布を重ねる



1. 袖丈(表袖丈-0.05)
2. 山標
3. 袖口布の幅標
4. 袖附標

通し裏の場合には、表身丈より、出袖の二倍だけ、長くするだ

けで、他は表袖と同様。

(四) 裾廻し付きの場合。

背に縫ひ目なきのみにて、標付け方は、女衿に同じ。

(五) 衿。本裁ち女衿に同じ。

(六) 衿。単衣に同じ。

縫ひ方。

(一) 袖。

(イ) 裏袖に、袖口布を掛け、表裏の袖口を縫ひ合せ、折りを表に返す。

(ロ) 表裏を合せて、振り八つを縫ひ、裏に折りを返し、袖下を四つ縫ひにし、表に返して、襟けを掛ける。(袖口下の所は、筒袖の様に、五分位別々に縫ふ)。

(二) 裨。

- (イ) 表裏の脇を縫ひ、折りは前に返し、脇にくせを取る。
 - (ロ) 裾口の縫ひ合せ、(ハ) 表裏の脇綴ち、(ニ) 身八つ口縫ひ方、(ホ) 袖附け方、(ヘ) 前裨の假綴ち、(ト) 褻上げ、(チ) 衿附け、(リ) 衿下縫ひ、(ヌ) 裏衿の附け方、(ル) 衿附け方、(ヲ) 衿紵け方、(ワ) 共衿の掛け方等、三つ身衿に同じ。
 - (カ) 裾綴ち。前裨は裏に三針、表に六針、後裨は裏に五針、表に十一針、出して綴ちる、綴ち方、本裁ち女衿に同じ。
 - (ヨ) 仕上げ。
- 附け紐、肩揚げ、及び腰揚の仕方は、単衣に同じ。

本裁ち女綿入

各部の名稱。女衿に同じ。

地質 女衿に同じ。

普通。仕立て上げ寸法、女単衣に同じ、但し袖襖一分、裾襖は、一分

五厘より三分。

裁ち方積り方。

表。女単衣に同じ。

裏。女衿に同じ。

標附け方。

(一) 袖。

女長胴着に同じ(尙振り布のつくものは、女衿標附け圖参照)。

(二) 裨。

女衿に同じ。

縫ひ方。

(一) 袖。

(イ) 表袖。袖下より袖口留めまで、標通りに縫ひ、抄ひどめをなし、出来上りより一分廣く、袖幅の標を附け、丸みを拵へ、表返して、躰掛けを掛ける。

(ロ) 裏袖。男半胴着の如く、袖口布を掛け、袖口下の縫ひ代を、四分にして、表の様に縫ひ、袖付けより下は、表より一分少く、袖付けより上は、表と同じに袖幅の標を附け、丸みを拵へて表返す(絹布の時は、女長胴着の様に振りを縫ふ)。

(二) 袴。

(イ) 表。背を縫ひ、後幅、肩幅の標を附け、脇を縫ひ、前幅の標を附け、袴、衿及び袖を附け、折りを附け、脇縫ひのくせは、躰掛けにておさへ、次に振り、身八つ口に躰掛けを掛ける、なほ折りの附き難いものは、裾口、袖付け等、きせの取れやすい所に、躰掛けを掛ける。

(ロ) 裏袴。胴裏、裾廻しとも、女長胴着の如く背を縫ひ、表より五厘せまく、後幅の標を附け、(肩幅は表と同じ寸法にする)脇を縫ひ、胴接ぎをして、前幅の標を、表より五厘せまく附け、表の如く袴、衿袖を附ける(袖の折りは表と反對に、袴の方に折る)。前幅標は、表を附ける時、一尺目位に、寸法を度り置き、それに合せて、裏に附ける。

(ハ) 裾合せ。表を手前にして、裾口を縫ひ合せ、袴を拵へ、上前は表を手前に下前は裏を手前にして縫ふ、折りを附けて、躰掛けを掛ける、尙袴下にも躰掛けを掛け置く。

(ニ) 含み綿。袖口綿は、男半胴着と、同じ仕方にて綴ち附ける。身八つ口、振りとも、幅一寸位の綿を一枚、袖口と同じ仕方で、一寸二三分位の針目にて、綴ち附ける袖幅の標を五厘裏に折り込み、折り山より五六分の所を綴ちる、但し袖口綿は

綿を入れてから、紵ける時に、綴ち付けてもよい。

(ホ)裏を出して、夜着疊みに、正しく疊み置く(夜着疊みとは、衿を折り返さずに伸ばし、袖を左右とも、前に折るを云ふ)。

綿の入れ方

(イ)綿の分量。十匁綿を三四枚、青梅綿一枚十匁より、十三匁位

一包と一枚、真綿尺位のもの五六枚、絹布物には、真綿を廿匁位。

(ロ)綿の取扱ひ方。男長胴着参照。

(ハ)入れ方。疊みおいた、表衿の後を引き伸べ、背を上、袖を左

右にひろげ、真綿を引き、青梅綿を裾口より二三寸長く、一方の袖幅一ばいに、後衿の幅、及び丈にひろげ、丈及び幅の綿の

不足の所は、接ぎ足し、厚さを加減して、袖口、振り、身八つ口の

邊は、綿を薄く重ね、裾綿を衿の大きさによりて拵へ、衿山より少し丈を長くした處に置き、裾口の二三寸長く出し置きた

る綿を上、に折り返す。

綿の上全體に真綿を引き、其上に裏をのべ、上になつて居る

前衿に、真綿を引き、後衿より出してあつた綿を、前衿にのべ、

衿綿をくるみ、前衿及び袖の綿のたらぬ所に、綿を足し、更に

真綿を引き、襟先、脇、裾、袖口、袂、振り、下等の部分を、表裏はなれ

ぬ様にして、一部分づゝ、引き返し置いて、表の前衿を引き返

し、更に袖も引き返して、脇衿の縫ひ目を正す、他の一方も同

様に綿を入れて、引き返し、裾の綿を、裾口山に十分含め、背、脇、

袖等、表裏の縫ひ目を、正しく引き合せて、疊み置く。

絹布の綿の入れ方は、女長胴着と同じ方法にする。

縫ひ方は、表裏の袖を縫ひたらば、女長胴着と同じに、振りを縫ひて、綿を綴ち附ける。

裾合せをなし、身八つ口を縫ひて、袖を附ける事、女長胴着に同じ

(二) 身綿入参照。
 衿け方。

- (イ) 裾の假綴ち 袴山に、十分綿を含めながら、假綴ちをする。
- (ロ) 袖口。 衿け方、男半胴着に同じ。
- (ハ) 八つ口。 身八つ口留め、袖付け留めをして、(四つ留め)表を手前にして、釣り合ひを見て、衿ける(袖下の縫ひ目は一針返しととめる)。
- (ニ) 豎綴ち、背、脇は、裾口より二尺位、衿は衿下より三寸位上まで、いづれも裾口より綴ちる(糸の引きつらぬ様にして)。
- (ホ) 衿下。 衿を平にして、表の衿下の折り山の所に合せて、裏衿に幅標をなし、袷先の綿を、平に形よくして裏にくるみ、袷先を拵へ、裏衿に綿を含めて綴ち附ける。
- (ヘ) 衿衿け。 表裏の衿を平にして綴ち(衿先、衿先、背縫ひに、外か

- ら針をうち、平に下に置き、ねぢれぬ様に、衿附けにも外から針をうつ、衿先をとめ(衿先にて、衿の縫ひ目の、きせの山から針を出し、衿の表裏二枚を抄ひ、次に裏衿の表と、同じ場所に出し、又前と反對に、表衿に出してかたく結ぶ、其糸にて衿先を縫ひ、裏の方に薄く綿を綴ち附けて、単衣の如く裏に折りて、綴ち附け、三つ衿に芯布を入れ、前衿の縫ひこみをよく伸ばし、縫ひこみなき所には、綿をうすくれれ、縫ひこみ、綿とも、表にくるみて、女単衣の如く衿ける。
- (ト) 共衿。 女単衣の如し。
- (チ) 裾綴ち。 女衿に同じ、(糸のしまらぬ様にする)。
- (リ) 仕上げ。

本裁ち男綿入

各部の名稱。本裁ち男袴に同じ。

普通仕立て上げ寸法。本裁ち男袴に同じ(但し袖襖一分裾襖一分五厘より二分)。

裁ち方積り方。

表は、本裁ち男單衣に同じく、裏は、本裁ち男袴に同じ。

標附け方。

(一)袖。男半胴着に同じ(但し袖幅せまくして、二三分袖に布を掛け出して、不足の時は、別布を袖口の方の、裏に當て、重ね接ぎをする)。

(二)袴。本裁ち男袴に同じ。

縫ひ方。

(一)袖。男半胴着に同じ。

(二)袴。

(イ)表袴。背を縫ひ、幅標をなし、揚げを縫ひ、脇縫ひをして、衽、衿を附ける。

(ロ)袖附け。本裁ち男單衣に同じ。

(ハ)裏袴。裏の縫ひ方は、表にならひて縫ふ(寸法のとめ方女綿入に同じ)、袖附けは、袴にて袖をはさみて、四つ留めをなし、袴を伸ばし、袖を折りて縫ひ、袴の方に折りを返す。

(ニ)裾合せは、女綿入に同じ。

綿の入れ方。

綿の分量は、十匁綿四枚位、真綿は尺位の大きさのもの四五枚、他は女綿入に同じ。

紵け方。女綿入に同じ(但し衿紵け、裾綴ちは、男袴と同様、前後と

も、女綿入より、一針多くする。

四つ身綿入

各部の名稱。地質の種類。普通仕立て上げ寸法。裁ち方積り方等、四つ身袷、四つ身単衣参照。裁ち方積り標附け方。

(一)袖。表袖は単衣に同じ。

裏袖は、丈を袖口下の方にて五厘、振りの方にて、一分詰める。

(二)袷。四つ身袷に同じ(但し後幅、前幅とも、裏は表より五厘かたくつめる)。

縫ひ方。

(一)袖。本裁ち女綿入に同じ。

(二)袷。

(イ)表裏。背、脇、袷の縫ひ方、四つ身袷に同じ。

(ロ)表袷に、裏袷を接ぎ合せて、四つ身単衣の如くつける。

(ハ)袖附け。女綿入に同じ。

(ニ)胴裏の縫ひ方。表袷に同じ。

(ホ)裾廻しの、背、脇、衽を縫ふ。

(ヘ)胴接ぎをして、胴裏の方に、折りを附けて、躰けを掛ける。

(ト)袖附け。女綿入に同じ。

(チ)袷合せ、表の身八つ口、袷下、袖附けの、躰けの掛け方、及び含み綿等は、女綿入に同じ。

綿の入れ方。

綿の分量、十匁綿三枚、真綿四五枚。

綿の入れ方、本裁ち女綿入に同じ。

衽け方。

(イ)裾の假綴ち(ロ)袖口衽け(ハ)八つ口身八つ口衽け(ニ)背、脇、衽の

堅綴ち(ホ)衿下紘け等、女綿入に同じ。

(ヘ)衿を綴ち、四つ身衿と、同じに紘ける。

(ト)共衿、(チ)裾綴ち、四つ身衿に同じ。

(リ)仕上げ。

(ヌ)腰揚げ。肩揚げの仕方は、四つ身衿に同じ。

三つ身綿入

各部の名稱、地質、普通仕立て上げ寸法、裁ち方積り方、附け紐の寸法等、三つ身衿に同じ。

標附け方。

(一)袖。四つ身綿入に同じ(筒袖は袖口も一分裏をつめる)。

(二)裓。三つ身衿に同じ(幅のつめ方四つ身綿入に同じ)。
縫ひ方。

(一)袖。

長袖。女綿入に同じ。

筒袖。表袖は標通りに縫ひ、表返して、袖口及び袖下に、躰けを掛ける。

裏袖は、袖口布を掛け、表と同じに縫ふ(但し袖口は、五分の所で一針返し、口の方へ、一分多く縫ふ)。

(二)裓。

(イ)表裓。背縫ひ、脇縫ひ、衿附け、袖附け等、女綿入に同じ。

(ロ)裏裓。胴裏、背縫ひ、脇縫ひ、裾廻しの背縫ひ、脇縫ひ、胴接ぎ衿附け、袖附け等、女綿入に同じ。

(ハ)裾合せ、身八つ口、振り(表の)衿下の、躰け掛け方、身八つ口、振りの、含み綿等、本裁ち女綿入に同じ

綿の入れ方。

綿の分量は、十匁綿二枚半、眞綿四枚位にして、入れ方は、本裁ち女綿入に同じ。

紵け方。

(一)袖口。身八つ口。八つ口。

(イ)長袖。女綿入に同じ、

(ロ)筒袖。袖山も、袖下も、同じ太さに、襖を出して、袖下の縫ひ目より、綴ち始め、袖山と袖下とを、等分に割りて、針数をさだめ、女綿入の如く綴ちる。

紵け方は、釣り合ひを見て、袖下の縫ひ目を合せて、一針返して紵け始め、終りは紵け戻して置く。

(二)裱。紵け方は、四つ身綿入に同じ。

裾綴ち、肩揚げ、腰揚げ、付け紐等、三つ身袷に同じ。

一つ身綿入

各部の名稱、普通仕立て上げ寸法、裁ち方積り方等は、一つ身袷に同じ。

標付け方。

(一)袖。

(イ)表袖の標付けは、袷と同様。

(ロ)裏袖標の付け方は、袷と同様にして、寸法を次の如くつめる。
袖丈を袖口の方にて一分五厘、振り八つにて一分、(但し綿の厚薄、及び地質によつて斟酌する)。

(二)裱。

表裱、裏裱とも、袷に同じ。

衿。標付け方、袷と同様(但し出袴三分以上の時は、切り下げを付ける)。

縫ひ方。

(一) 袖。

- (イ) 表袖。 中表にして、袖下を縫ひ、折りを付けて表返し、袖口先を二分五厘程、裏に折りて、袷けを掛け、袖幅の標を附ける。
- (ロ) 裏袖。 裏袖に、袖口布を掛け、袖口布の、つり加減になる様にして、先に袷を掛け、袖下を縫ひ、折りを付けて、袖幅の標を、表袖幅より、出袖の二倍に一分五厘か、二分加へた、寸法だけ廣く附ける。
- (ハ) 振り八つを、表裏合せて、女長胴着の如く縫ひ、平鰻を當て、(折り鰻はかけぬ)、裏に、巾一寸位に、切つた綿を當て、縫ひ目のきわに、糸をゆるめ加減にして、綴ち附け、表返して、袷けを掛ける。

(二) 身。

- (イ) 表裏の脇の縫ひ方、袷に同じ、裾廻し附きの時は、本裁ち女綿入の如く、脇を縫ひて、胴接ぎをする。
 - (ロ) 衽附け。 標通りに、表裏の衽を附ける。
 - (ハ) 表衿附け。 一つ身単衣に同じ。
 - (ニ) 裾合せ。 本裁ち女綿入に同じ。
 - (ホ) 身八つ口。 袷の如く縫ひ、裏に綿を綴ち附け、表に返して、袷けを掛ける。
 - (ヘ) 袖附け。 袷に同じ。
- 綿の入れ方。
 綿の分量は、二枚半か、三枚、真綿四枚位。
 綿の入れ方は、裾に、裾綿を拵へて入れるのみにて、其他は、男半胴着に同じ。
- 拵け方。

- (イ) 裾に假り綴ちをする。
- (ロ) 袖口紵け。袖口綿を拵へゆるみ加減に、裏袖布の上へのせ、出襖をさだめて、袖口布のはしを裏に折り返し、針目八分位にして、襖綿を綴ち附け、つり合ひをさだめて、袖口を紵ける。
- (ハ) 脇衿の堅綴ち、衿下紵け。本裁ち綿入に同じ。
- (ニ) 衿紵け。四つ身綿入に同じ。
- (ホ) 裾綴ち。一つ身衿に同じ。

仕上げ。附け紐及び揚げの仕方は、衿に同じ。

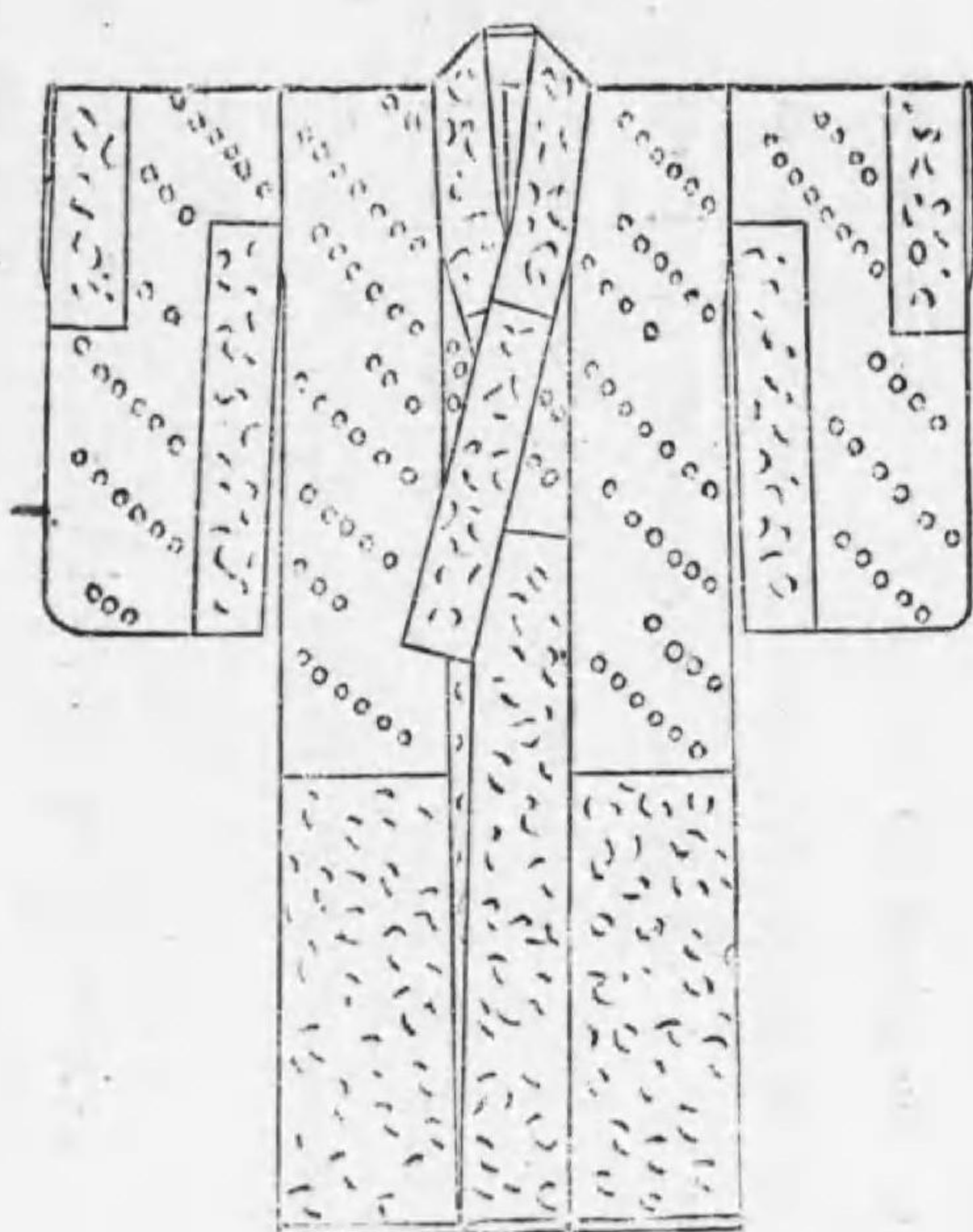
重ね女小袖

重ね女小袖には、二枚重ね、三枚重ねの、別がある、縞物類には、裾廻しに、別布を用ひる、これを變り裾と云ふ。

紋附類には、多く共裾を用ひる、これを無垢と云ふ、これは現時和

服の、禮服になつてゐる。

下着の種類、普通の長着、胴抜き(胴に別布を用ひる)、又比翼仕立て(本比翼附け比翼とある)等にして用ひる、尙下着の廻りに、上着と



同じ布を用ひたものを、對下着と云ふ。

普通仕立て上げ寸法。

普通仕立上げ寸法に、大差はないが、その異るところは、次の様である。

袖丈。一尺五寸より、二尺八寸(振り袖にする場合)位まで。

身丈。四尺一寸より、四尺

(115) 胴抜き

二寸位まで。

衿下。二尺より、二尺二寸位まで。

下着寸法の詰め方。

袖丈二分か三分、袖口、上着と同寸 袖付け、一分

前幅、一分 身丈一分 衿肩明き、一分 後幅、一分

前幅、二分 衿下上着と同寸 衿丈、二分か三分 衿、上着と同寸

(肩幅を一分廣くして、袖幅を一分詰める)。

三枚重ねのときは、中着を普通寸法として、前の割り合ひに依つ

て、上着と、下着との寸法を増減する。

本裁ち無垢物の裁ち方(次の圖を見よ)。

標付け方。

(イ)上着一枚は、小袖の標付けと、同様にする、下着は上着と同時に

つけて置く。

胴抜き無垢、二枚重ねの裁ち方

(316)

16.5	"	"	15	41	"	15	41	"	15
袖	袖	裾廻	裄	裾廻	裾廻	裄	裾廻	裾廻	裾廻

(317)

36	"	15	14	15	14	25	"
五、四、五	衿	共衿	袖口布	表裾	裏裾	裏	襷
50	22						

(318)

24	"	15	5	16.5	"	
五、四、五	下着表	縦襷	ソデ	エ	フリ	布
	下着衿	下着共衿	サキ	サキ	フリ	布
50						

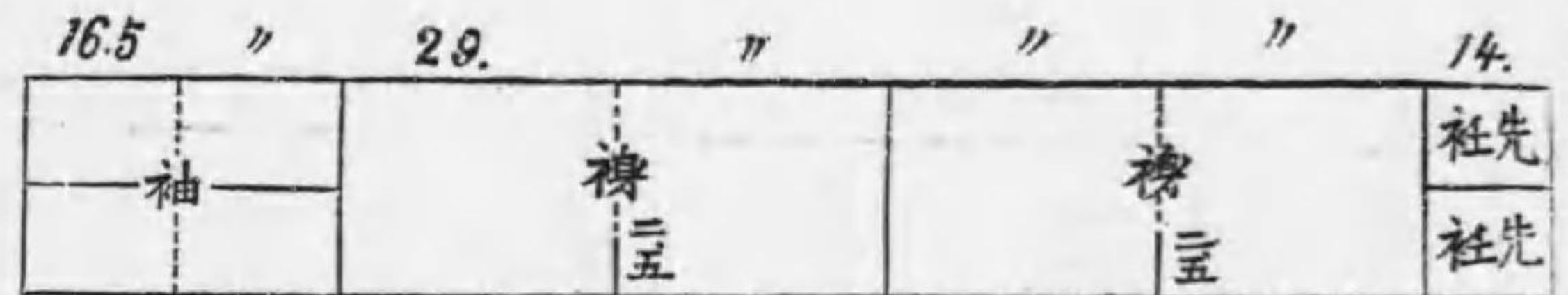
(316)(317)(318) 三圖連続

積り方公式 袖丈×4+身丈×4+衿丈×2+表裾×4+
 裾廻×8+裏縦襷×2+表縦襷×2+袖口布+衿先布×3+
 ふり布×2=用布

積り方算式 $16.5 \times 4 + 41 \times 4 + 36 \times 2 + 14 \times 4 + 15 \times 8 + 25 \times 2$
 $66 \quad 164 \quad 72 \quad 56 \quad 120 \quad 50$
 $+ 24 \times 2 + 15 + 5 \times 3 + 16.5 \times 2 = 639$ 用布
 $48 \quad 15 \quad 15 \quad 33$

下着表胴の裁ち方

(319)

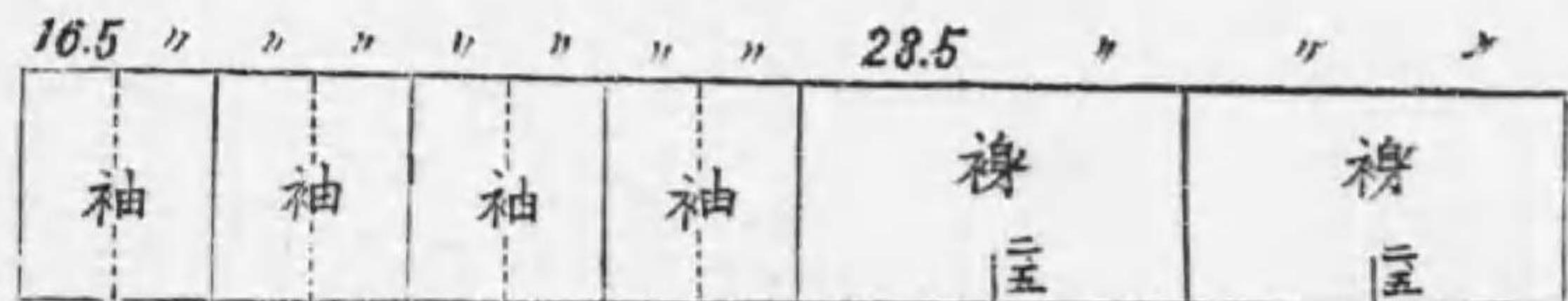


積り方公式 袖丈×2+(上着身丈-表裾丈+縫ひ代)×4+(上着衽丈-裏裾丈+縫ひ代)=用布

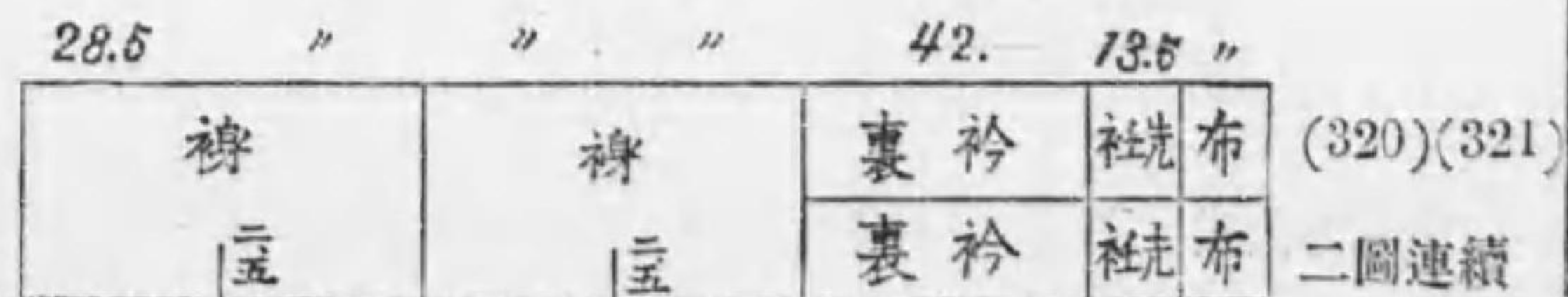
積り方算式 $\frac{16.5 \times 2}{33} + \frac{(41 - 14 + 2) \times 4}{116} + \frac{(36 - 24 + 2)}{14} = 163$ 用布

裏の裁ち方

(320)



(321)



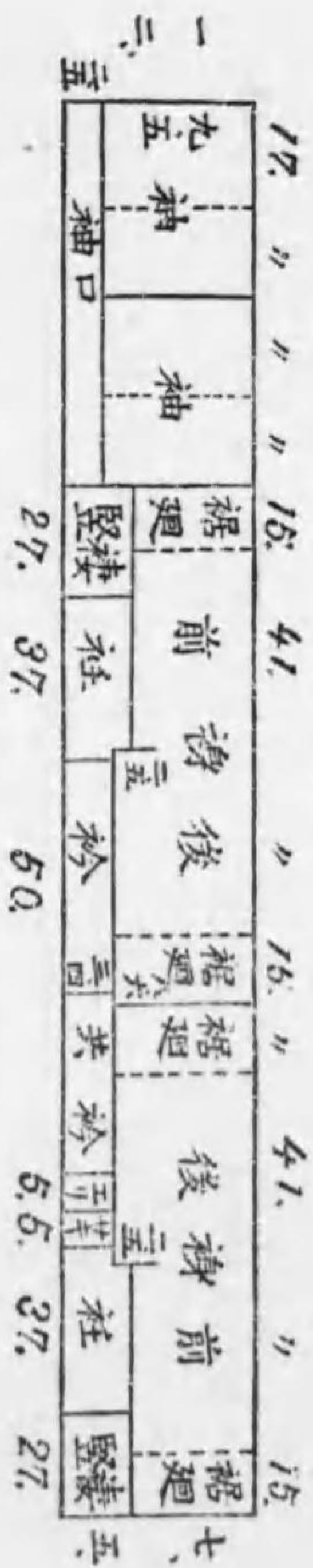
積り方公式 袖丈×8+(上着身丈-裾廻丈+縫ひ代+出施×2)×8+(上着表衽丈-衽先布×2+縫代)+(衽丈-裏裏裾+縫ひ代+出施×2)×2=用布

積り方算式 $\frac{16.5 \times 8}{132} + \frac{(41 - 15 + 2 + .25 \times 2) \times 8}{228} + ..$

$\frac{(5) - 5 \times 2 + 2}{42} + \frac{(36 - 25 + 2 + .25 \times 2) \times 2}{27} = 429$ 用布

一尺二寸幅の布で、小袖無垢一枚の裁ち方

(322)

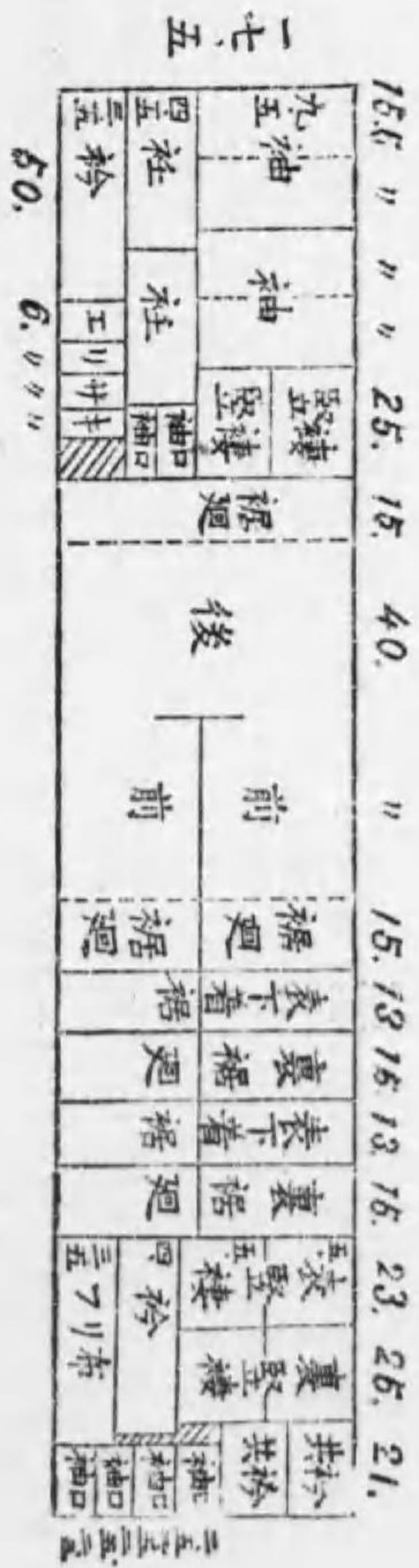


積り方公式 袖丈×4+裾廻×1+身丈×4=用布

同算式 $17 \times 4 + 15 \times 4 + 41 \times 4 = 292$ 用布

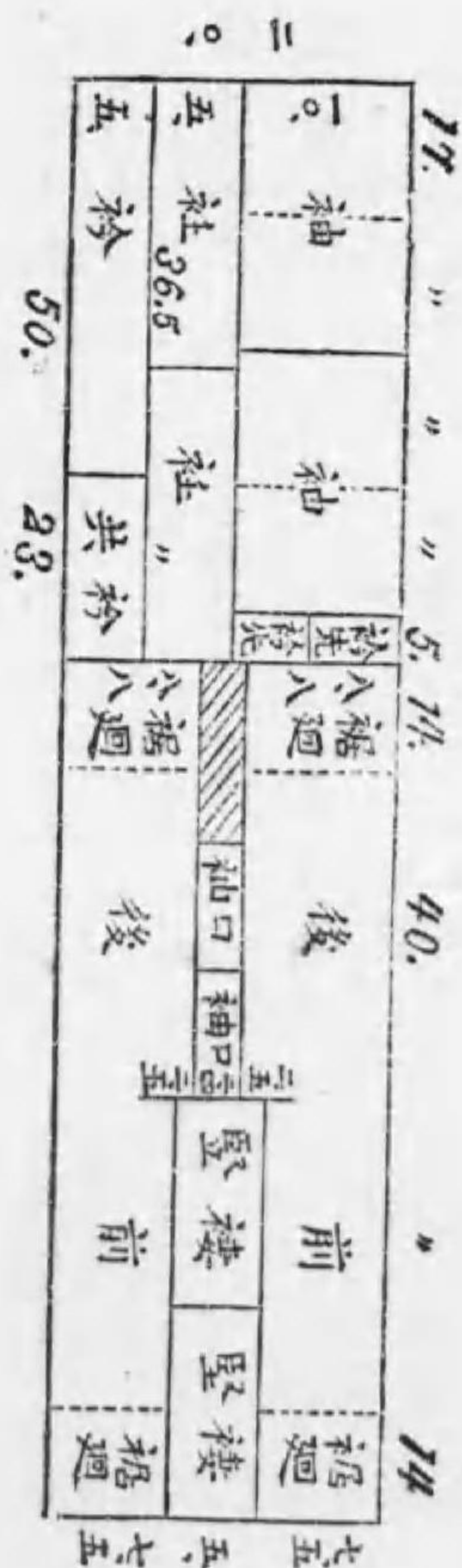
一尺七寸五分幅で、小袖無垢一枚と、下着無垢廻り一枚分の裁ち方

(323)



積り方公式 袖丈×4+裏堅褙×2+表堅褙+裏裾廻×4+表裾×2+身丈×2+共衿=用布
 同算式 $15.5 \times 4 + 2.5 \times 2 + 2.3 + 1.5 \times 4 + 1.3 \times 2 + 4.0 \times 2 + 2.1 = 32.2$
 62 50 60 26 80

二尺幅で、無垢一枚の裁ち方
 (324)



積り方公式 袖丈×4+衿先+裾廻×2+身丈×2=用布
 同算式 $17 \times 4 + 5 + 14 \times 2 + 40 \times 2 = 181$
 68 28 8)

- (ロ) 下着の衿は、相褙幅までは、普通に付け、それより上の、斜めの標は、衿附けの方にて、衿下より衿丈までの間を、上着の衿附けの寸法より、一分つめて(衿丈を二分つめる時は)きめ、それより相褙までの、衿附けの標をする。
- (ハ) 衿は下着の方を二分つめて、標をつける(衿丈を三分つめる時は、衿の衿附けにて二分つめる)。
- (ニ) 裾廻しの、表褙に續いたものは、裾口を、つまみ縫ひにするものとして、標を附ける(男長襦袢参照)。
- (ホ) 下着寸法の詰め方は、前に掲げたけれども、實際は、其地質に依つて、斟酌しなければならぬ、故に先下の用布に、標をつけて重ね、是を垂して、その寸法の差を見定め、それに依つて、各部の寸法を増減する。
- (ヘ) 模様物は、初その模様の部分をよく合せ、縫ひ標をして、おいて、

標附けの時、多少寸法を加減し、模様を損ぜぬ様に、注意しなければならぬ。

(ト) 胴抜きの場合ひは、裾の方を一ばいにし、次に胴の方の丈を上着の丈より一分詰めた寸法より、裾の方の丈を引き、それに、三つ衿の縫ひ代三分、裾のきせの一分、胴接ぎのきせ一分を加へたものに附ける。

(チ) 衿は表の豎襷と、衿先布とを接ぎ合せて、衿の如く附ける。縫ひ方。

絹布綿入れの縫ひ方と、同様であるが、模様物は、衿附けを先にし、脇縫ひを後にする場合ひがある。

注意。上着又は、下着の一枚を、口綿入れにする場合ひには、綿の含まれる部分、即袖口、裾口、八つ口、衿先、衿下等に、適當に綿を入れ、上着との釣り合ひを見計ふ可きである。

重ね男小袖

裁ち方、標附け方、縫ひ方等は、上着、下着とも、衿又は綿入の長着に同じ(但し八つ口開かざるを以て、下着胴抜きなる場合も、振り布を要せず)。

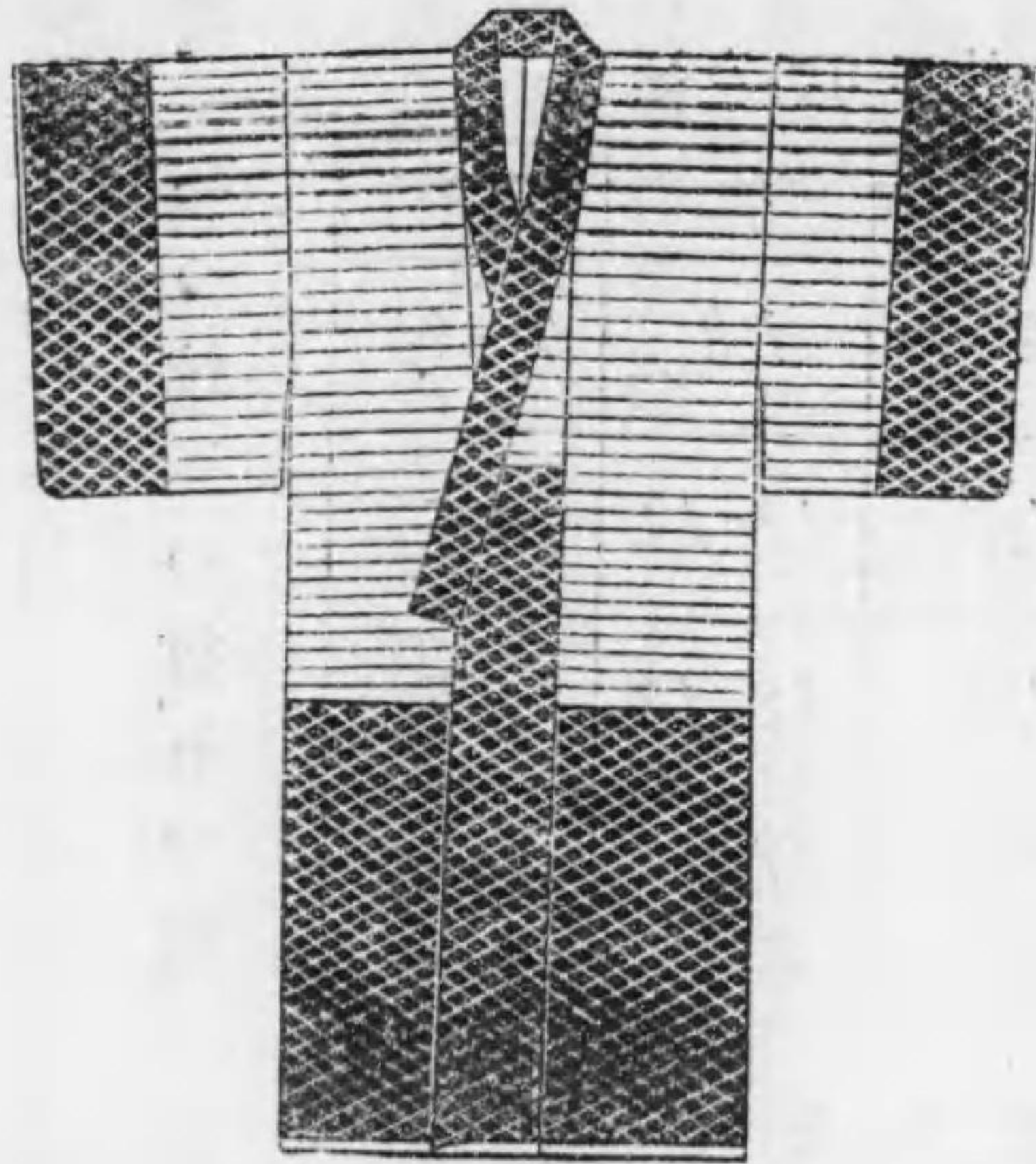
寸法につめ方

袖附、二分。其他は女物に同じ。

備考。特に下着だけ、女物の如く、廣衿仕立てにする場合がある、此の時には、裏衿に黒八丈を用ひ、仕立てる際、女物と反對に、裏衿を表に一分五厘程ふかせて

男胴抜き重ねの圖

(325)



作り、裏衿を表の方に折り返して、重ねて着用する。
紋に就て。

紋の數。一つ紋、三つ紋、五つ紋。

紋下りの寸法
(326)

紋下りの寸法

種類	名稱	袖	背	前
本裁		2	1.8	4-4.5
四つ身		1.7	1.2-1.3	3.5
三つ身		1.6	1.2-1.3	3.5
一つ身		1.5	1.1	2.5-3

紋の種類。染抜き紋、切り付け紋（一名貼り付け）、昌平紋、縫ひ紋（菅縫ひ、鹿の子縫ひ、けし縫ひ、蛇腹縫ひ）描き紋等。
紋付き仕立て方の注意。左右の袖紋の位置は、不揃ひならぬ様にする。
背紋は、中心をよく合せる、紋の所は、折りきせのかゝらぬやうに、且色糸を變へて、針目細かく、

流れぬ様に縫ふ。

模様 に 就て。

模様は、主として、豎襷より裾にかけて、三角形をして居るのが、本體である。

模様の種類。

江戸襷模様。總べて三角形をなし、其高き所は、五寸より二尺五寸位、幅は、衽幅だけのもの、前幅にかゝるもの、後幅にかゝるもの等がある。

夜會模様。一名千代田模様とも云ひ、裾及び胸、肩、袖等に、模様のあるもの。

腰模様。腰より下に、模様のあるものを云ふ。

高裾模様。江戸襷にて、裾全體に模様のあるもの。

總模様。紋なしで、全體に模様のあるもの。

曙模様。裾を匂はしたものの。

片褙模様。主に、下前の裏に、模様を置いたもの。

襷模様。裾襷にのみ、模様のあるもの。

飛び模様。紋なしで、模様を散らしたものの。

以上の外變化したものが數多くある。

男兒用として、熨斗目模様がある、これは腰より袖にかけて、縞格子等の模様を置いたものである。

模様物仕立て方の注意。

模様を主として合せる様に注意する、布の合せ目にて、よく合はぬ時は、多少地直しをして合せ、特に大なる模様の、色の境目を合ふ様にする事が、肝要である。

(1) 袖の模様は、袖口下の縫ひ目で、よく合ふ様にする。

(2) 裾の模様は、衽付けの縫ひ目で、衽と、前裄との模様をよく合せ、

糸標をして、其標より前幅標、及び衽幅標をする。

(3) 脇の縫ひ目に模様のかゝる時は、前後の模様を合せて、幅標をする。

(4) 胸に模様のある時は、共衿で、衽下り、及び衽の縫ひ目の模様をよく合ふ様にする。

(5) 裏豎褙の模様が、表衽と同様の時は、衿下で模様を合せる。

(6) 裾の合せ目に模様のある時は、表と、裏出襷との模様が續く様に注意する。

(7) 曙模様の時には、各幅の縫ひ目にて、曙の位置の揃ふ様にする。

(8) 大きな模様、又は曙の所は、それと同色の縫ひ糸を用ひる。

(9) 縫ひ模様、及び金銀箔の所は、一針ぬきに縫ひ、縫ひ終りならば、すれざる様に、紙のやはらかいの、又は絹の薄いもの等にて覆ひおく。

比翼

比翼には、本比翼と、付け比翼との別がある。
 本比翼とは、一枚の小袖に、其廻りを二枚重ね、又は三枚重ねの如く、仕立てたものを云ふ。
 付け比翼とは、小袖一枚を作り置き、それに廻りだけを、拵へたものを拵け付けて、二枚重ねにしたもので、取りはづしの出来る、點が便利である。

本比翼無垢の裁ち方。

表地は、胴抜き二枚重ねの、裁ち方と同様、但し振り布は、四つ割り幅にして用ひる、他に表の燧布として、胴抜き地に似たものを、半幅四方一枚を要する。
 裏地の裁ち方(三二七圖)。
 標付け方。

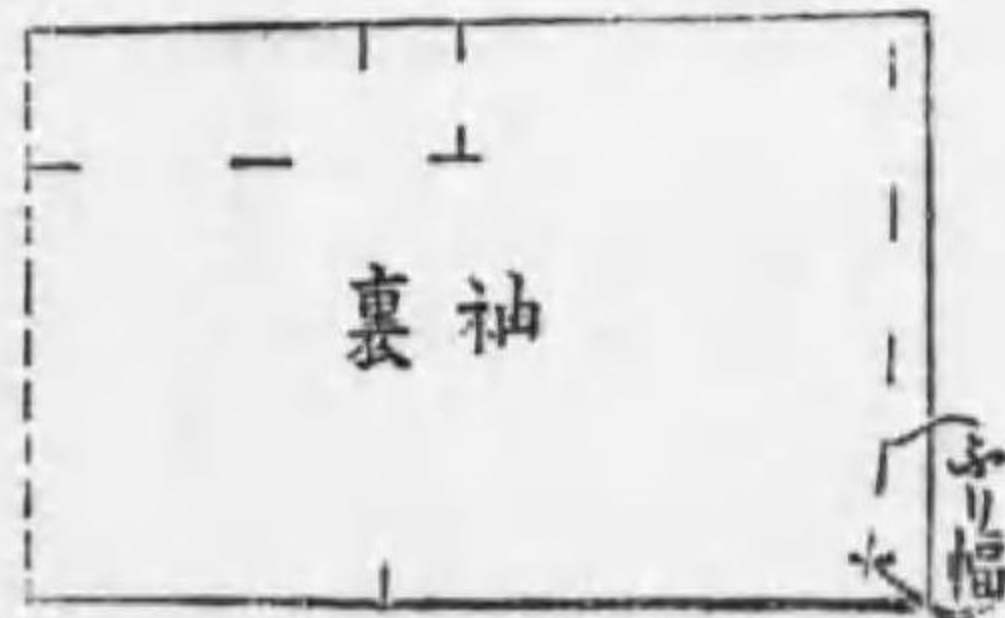
(327)

16.5	"	"	"	28.5	"	"	"	42.	13.5	13.5	5.
袖	袖	袴	袴	裏衿	衿先	フリ	ヒク	裏衿	布	布	チ

積り方公式 袖丈×4+(上着表身丈-裾廻+縫ひ代+出襷×2)
 ×4+(表衿丈-衿先×2+縫代)+(上着表衿-整襷+縫代+出襷×2)+ふり布+燧布=用布

- (1) 表袖 女綿入に同じ
- (2) 裏袖

(328)



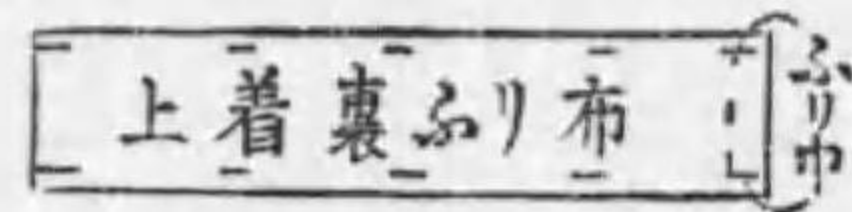
ふり丈(表丈より三分)つめてふり下をまげる
 袖口下の方よりふり幅までは、綿入と同寸法

(329)



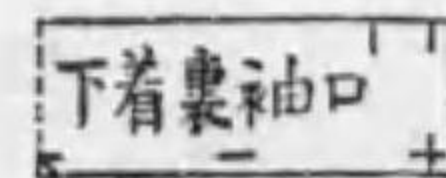
ふり丈(表丈より二分)つめる

(330)

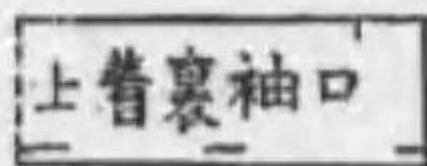


ふり丈(表丈より一分)つめる

(331)

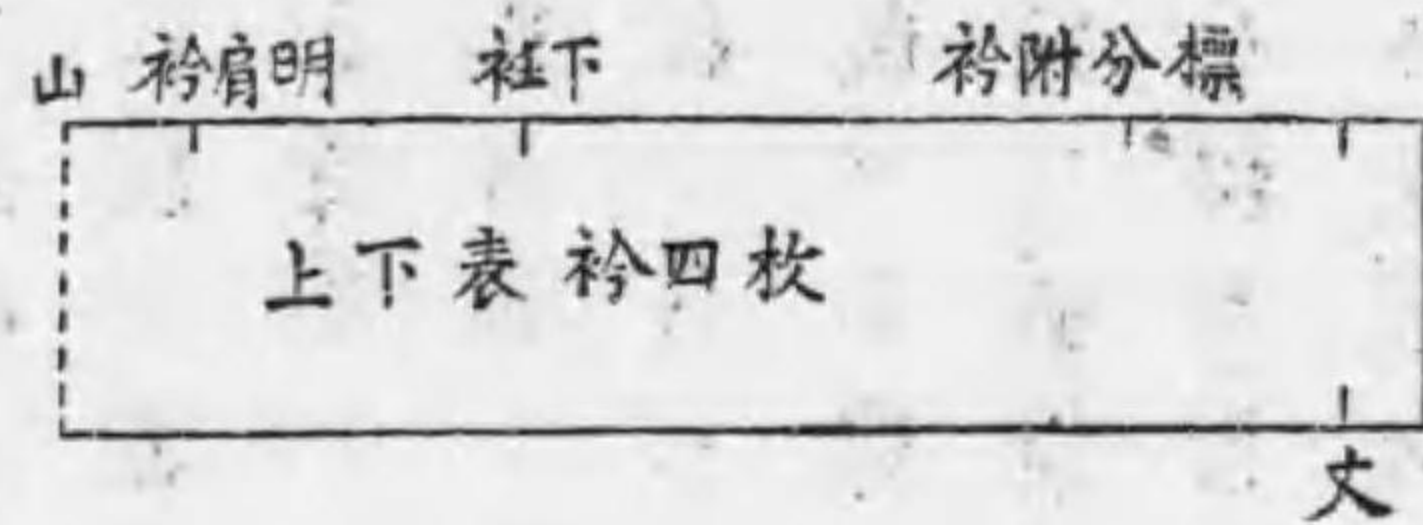


(332)

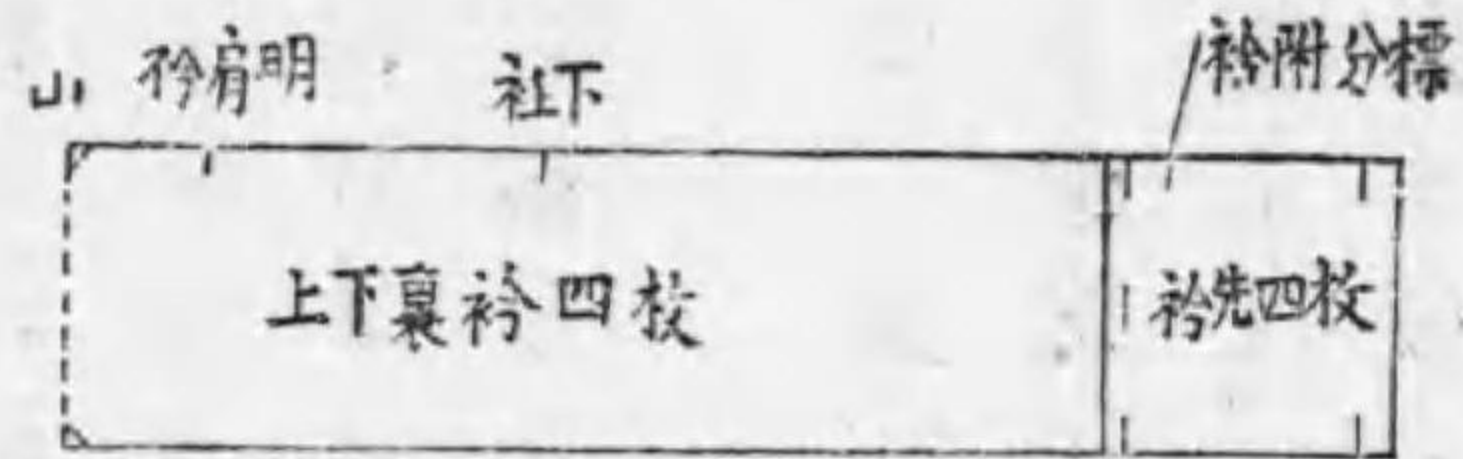


比
裏

(337)



(338)



縫ひ方

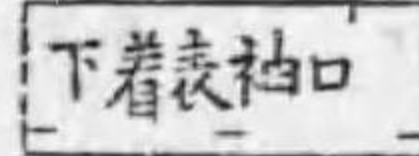
(イ) 表袖。表袖を標通りに縫ひ、幅標をして袖形を拵へ、表返して、躰けを掛ける。

(ロ) 裏袖。裏袖に袖口布を掛け、折りを附ける。

(ハ) 袖口布。下着の表袖口布の口先を、折りて躰けをかけ、其布と上着の袖口布との奥を合せ(表袖口布を四分先に出す)上着の袖口布の山で、一分程ひだを取つて、縫ひ合せる。

裏袖の裏で、袖口布の上に、前に縫

(333)



(3) 表襟、及裾廻、胴裏は、女綿入に同じ

(4) 燧布

上着袖口は、下着より、一分つめる
裏袖口は、袴の二倍だけ、幅を廣くなしおく

(334)

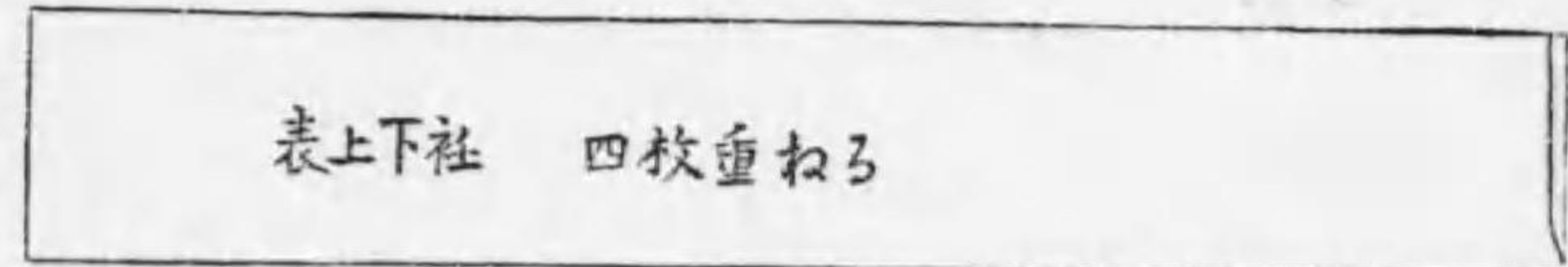
衿附の方



胴接の方

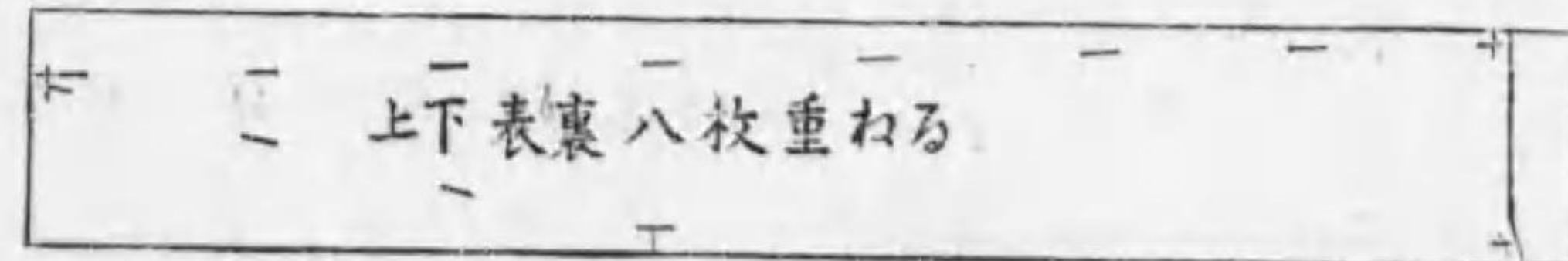
(5) 衿

(335)の一



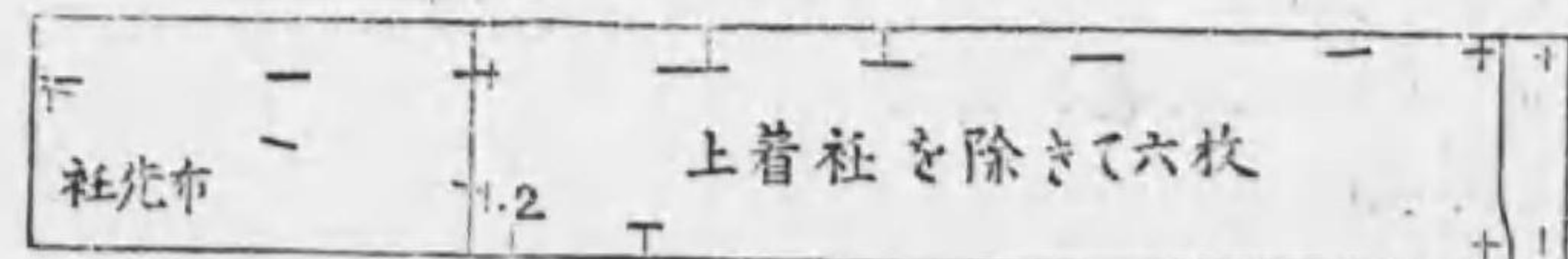
切下をつける

(335)の二



(336)

襷の高さ 裾の高さ



表を除いて
襷形をつける

衿先布接標より、二分下つた處に、衿附け分けの、標をする
裾の高さ、燧布の寸法を、附けおく

ひたる袖口布を重ね(表の袖口布と裏の袖口布との先を合せて、表袖口布が上になる様にする)裏袖の表に針の出ぬ様にして(裏袖と袖口布との間に出入す)綴ち付け、次に裏袖を寸法通りに縫ひ、表袖より一分せまく、袖幅の標を付け、折りを付けて、袖形を拵へる(袖付けより上は表袖幅と同寸)。

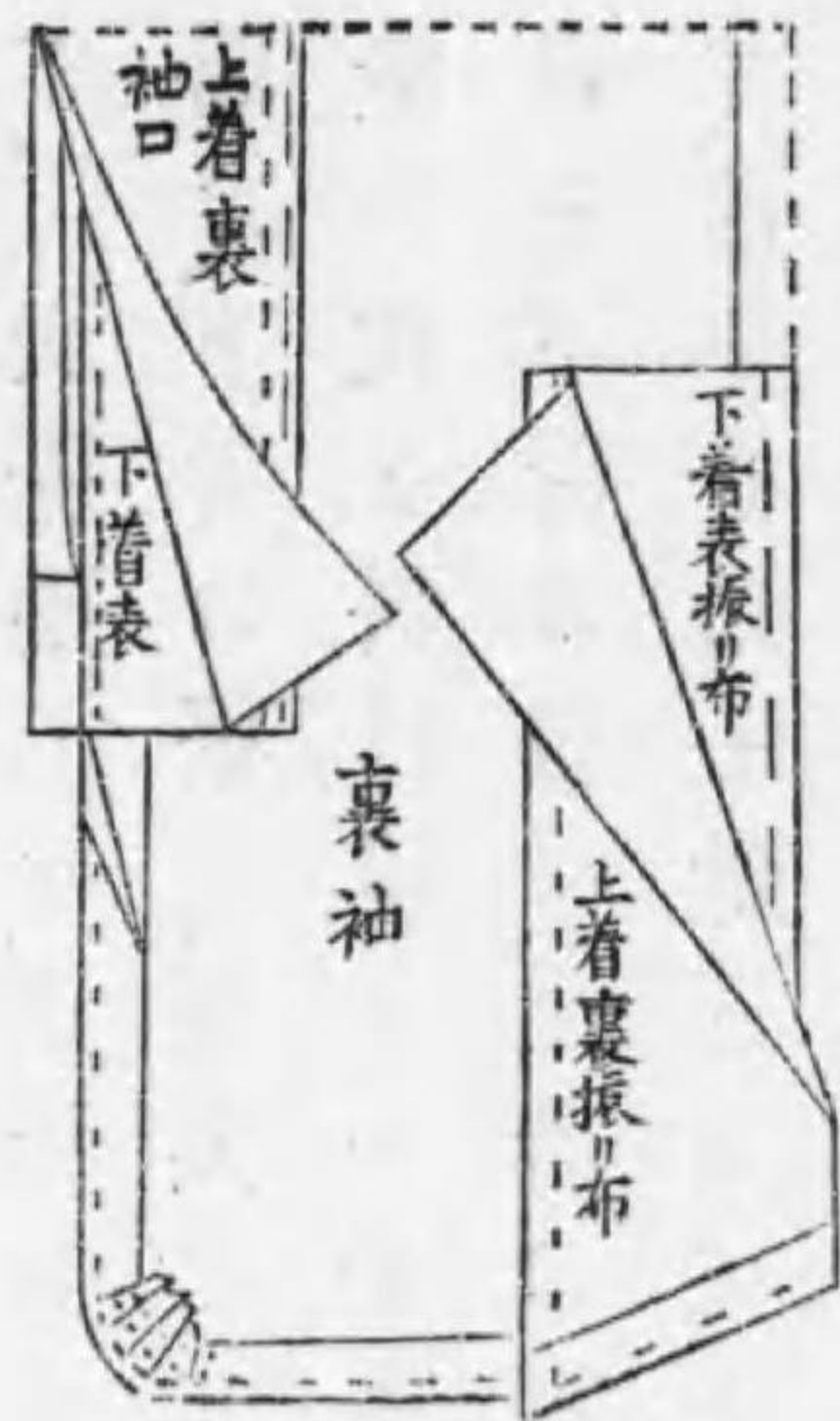
(二) 振り布。表裏の振り下を、標通り斜に縫ひ、次に振り奥を表裏縫ひ合せる。

(ホ) 振りの縫ひ合せ。裏袖と、下着表の振り布と合せ、釣り合ひを見て、袖付けから袖付けまで、表を見て縫ひ、平鋸を掛け、裏に綿を綴ち付け、表返して、一束に躰けを掛ける、次に上着表袖の振りと、上着裏の振り布とを合せて、前の様に縫ひ、綿を綴ち付け、表返して躰けを掛ける(三三九圖)。

(へ) 上着の表。背、脇、衿、衿を普通の如く縫ふ。

(339)

裏袖に袖口布、振り布を、附けた圖



(ト) 胴裏。胴裏の背、脇を縫ひ、袖付けのつれぬ様に、脇を開いてとち置く。

(チ) 裾廻し。上着下着の裾廻し、及び下着の表裾とも、各背を縫ひ、後幅の標をなし、脇を縫ひ、前幅の標を付ける(前幅の上の方は、裾布の丈の處にて、表の幅を度りて附ける)但し下着の幅は、上部を上着と同寸とし、裾口では、後幅一分、前幅二分詰めて、標を付ける事は、下着の詰め方と、同様である、尙裏幅は、五厘詰めて、普通に釣り前ひを取る。

(リ) 下着の裾口。下着の、表裏の釣り合ひを取つて、裾口を縫ひ合せ、一分のきせをかけ、表返して躰けを掛け、裾口に綿を含めて

(又) 燧布。表裏の燧布を、中表に二枚合せ、斜めの方を伸びぬ様に、標から標まで縫ひ、上着の裾廻しと、下着の表裾との上部に、衽付けの標から、脇縫ひの方に、燧布付けの標をなし、上着の裾廻しと、下着の表裾との上部に、燧布を縫ひ付け、斜の縫ひ代は縫ひ付けずに、上着の裾廻しを、燧布の方へ、下着は、表裾の方へ折つて、躰付けを掛ける。

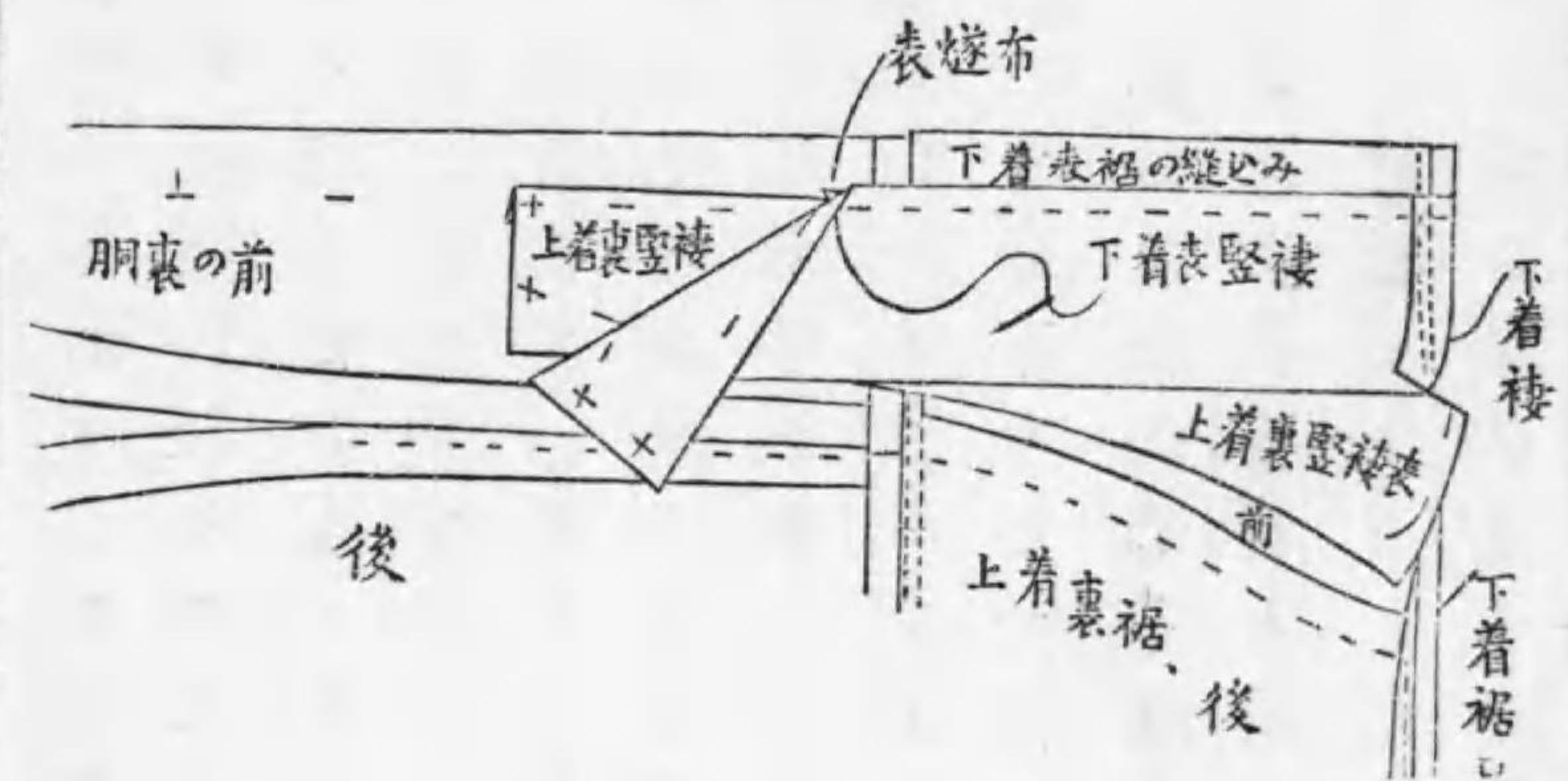
(ル) 胴接ぎ。表裾廻しと、下着の表裏の裾と、胴裏とを合せ、燧布のある間は、下着の裾と、胴裏と二枚縫ひ、燧布のとまりで、下着表裾の縫ひ代を斜に折り、一針返してよくこめ、次には、胴裏と、下着の裾と、下着の表と、上着の裾廻しと、四枚一緒に縫ひ、燧布の處にて、前の様に一針とめて、それより胴裏と裾廻しと、二枚縫ひ、胴裏の方へ折つて、躰付けを掛ける。

(ヲ) 衽付け。上着裏に衽を燧布の上の留りまで、標通りに附ける。下着の表裏の衽を出だし、下着の豎襷に、衽先布を縫ひ付け、襷を拵へ、衽の縫ひ目の山と、下着の裾口の縫ひ目の山とを合せ、上前は燧布の留りから、下前は合標から縫ひ始め、裾口の縫ひ目の山で、一針返して、上の方へ縫ひ下げ、燧布の留りまで、一針返して留め、上着の豎襷を、燧布の留めから丈まで、細く斜に折り、下着の表衽と、下着の裏着とで、はさんで四つ縫ひにし、豎襷の留りまで、一針返して留め、それより上は、胴裏と裏衽と二枚にて、衽下りまで縫ふ。

(ワ) 衽。裏衽に衽先布を接ぎ、裏衽の方へ折りて躰付けを掛ける、三枚の衽即裏衽、下着の表衽、上着の裏衽を、豎襷の衽下標から、附け分け標まで、別々に縫ひ付け、折りを附け、附け分け留まりの所で、三枚の衽留まりを、重なるの順、即下着の裏衽は、胴裏の表

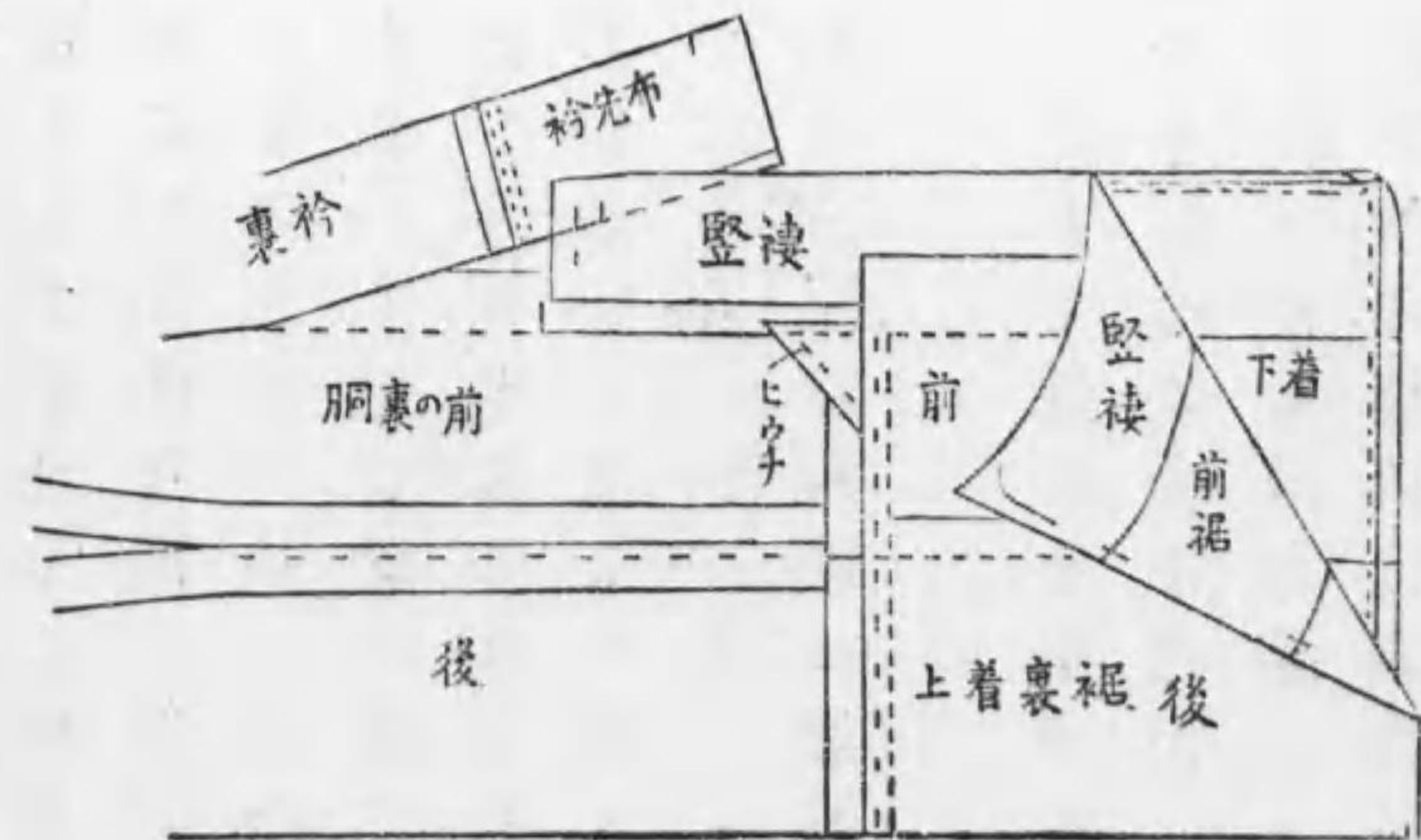
燧上部の布の重ね方

(840)



右裏の前襟

(341)



に當て、上着裏衿、下着表衿を、胴裏の裏に、重ねて留め、其上を四つ縫ひにして附ける。

(カ) 燧。上の端を縫ひ置く。

(ヨ) 裾合せ。表裾と、裾裏とを縫ひ合せ、折りを附けて後に、躰けを掛ける。

(タ) 衿下。

上着、下着とも、衿下に躰けを掛ける。

(レ) 袖付け。身八つ口を縫ひて、袖を附ける、袖付けの留め方は、表袖、表衽、上着の裏袖、下着の表袖、下着の裏袖、胴裏の順にとめ、表袖付けは、普通に付け、裏袖付けは衽の方に折る様に、振り布の上を斜めに折つて、一緒に縫ひ付け、衽の方に折る。

(ソ) 綿は普通女小袖の様にを入れる。

下着を、口綿入れにする場合ひは、裾口、袖口の外、衿下、衿先にも含める。

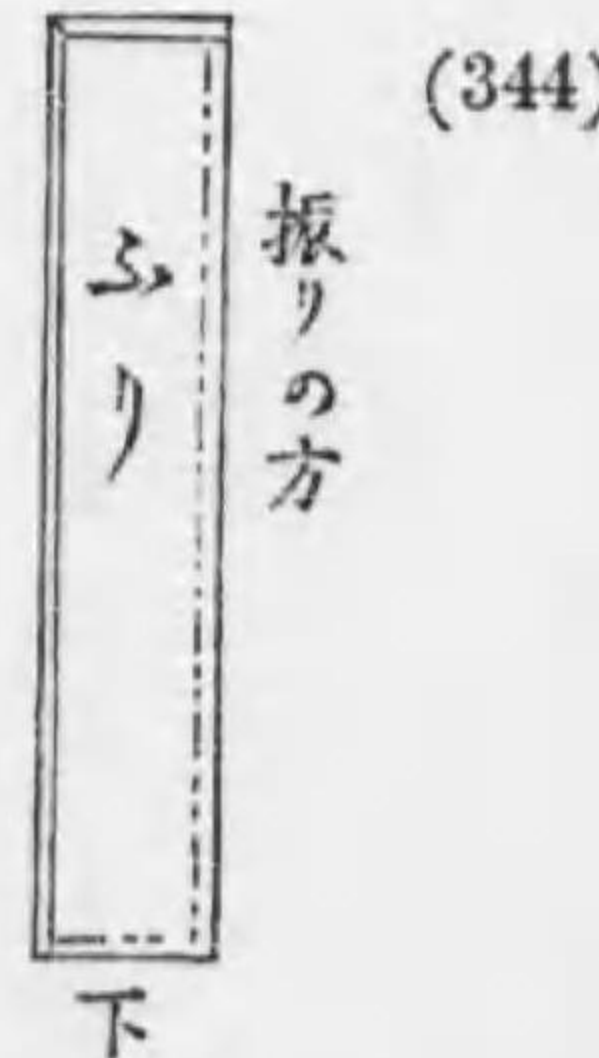
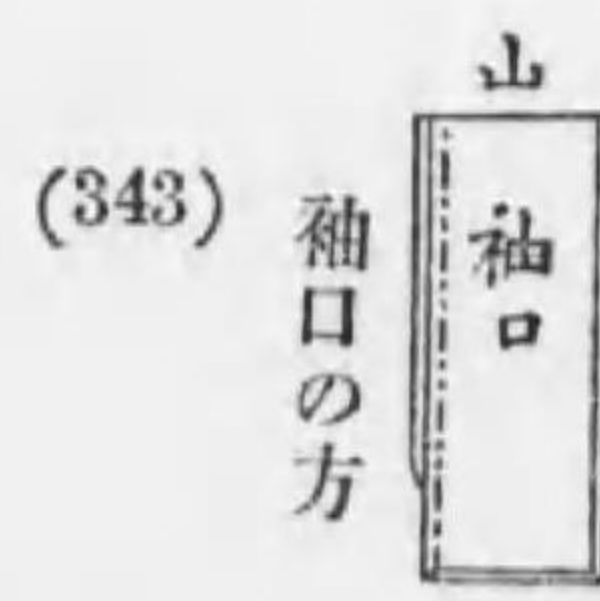
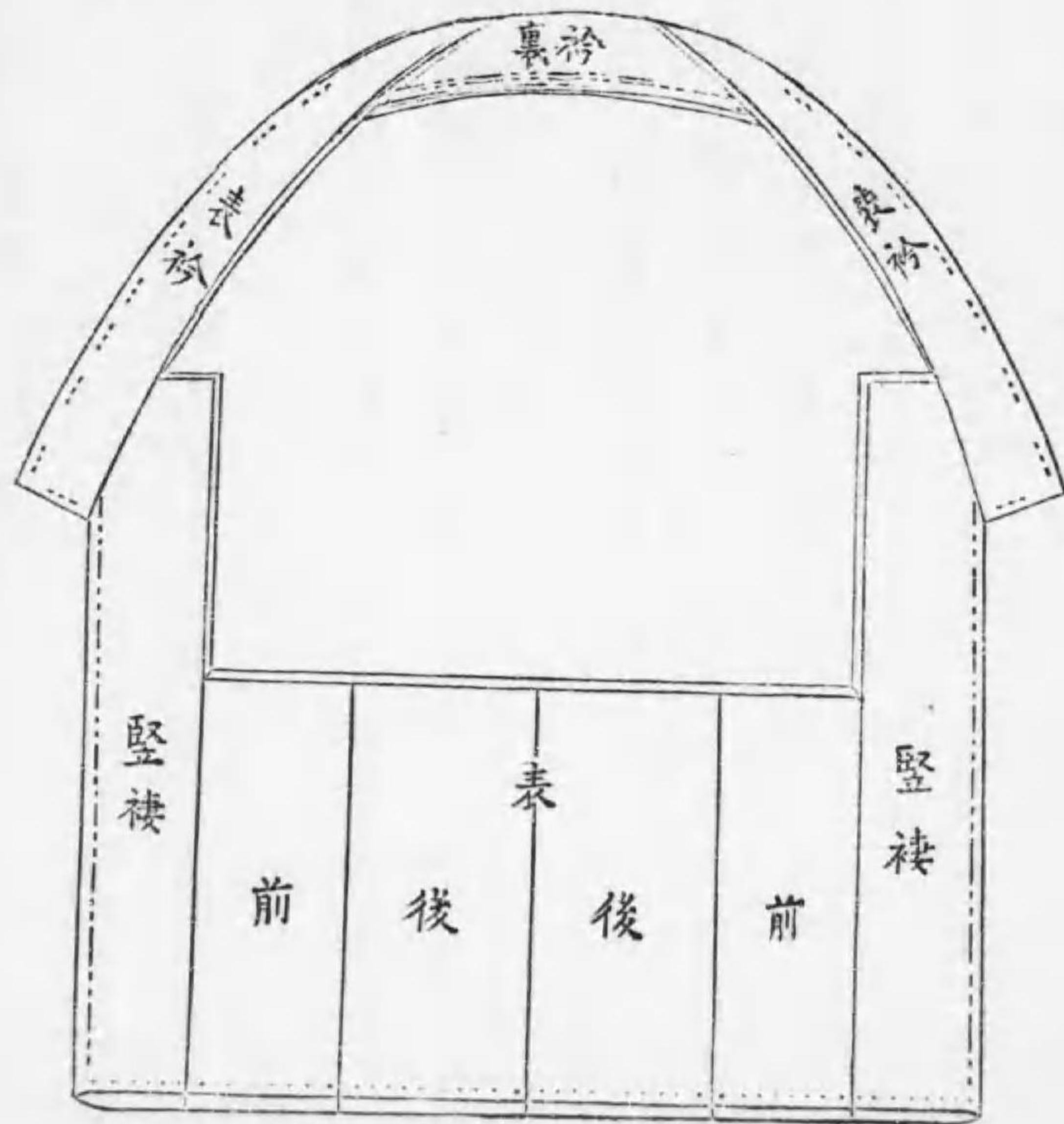
比
異

衿付け方も、女小袖と、略同様であるが、下着の袖口は、袖口明きを
 衿付けてから、袖口下を衿付けて、次に裏に綴ち附ける。
 上着袖口は、袖口布に綿を含ませてから、袖口下を衿付け、次に袖
 口をとめて衿付け、口明き下は、袖口の留まりで、一針返して留め、
 それより、袖形の邊りまで綴ちる。
 豎袂、及び衿綴ちは、表に糸の見えぬ様に、注意して綴ちる、其他
 は、女小袖の衿付け方と、同様である。

附け比翼

圖の如く、裾廻しに、相當する部分に、衿を附けたものを作り、小袖
 の胴接ぎの山に重ね、衿は上着の裏衿山に合せて衿付ける。
 袖口、及び振りも、圖の如く拵へ、上着に重ねて表袖に衿付け附ける。
 注意 附け比翼の裄に、衿付け附けられる部分で、表を五厘引き、裏
 をふかせ、その山を上着の各部に衿付け附ける。

附け比翼下着出来上り圖 (342)



襦袍(一名丹前)

各部の名稱。

男綿入に同じ(但し袖口は廣袖にして、半衿を掛ける。地質。

木綿、銘仙、糸織、八端、八丈、大島紬、御召等。

半衿、袖口は、黒八丈。

裁ち方の種類。

男綿入に同じ。

半衿用布、幅四寸位、丈三尺五寸内外、袖口は、常幅四つ割り、丈は袖丈と同寸の物二枚。

仕立て上げ寸法。

袖丈、一尺四寸 袖口、廣袖 袖幅、九寸 身丈、着用者に依つて定

める) 衿肩明き、二寸五分 後幅、八寸 前幅、六寸五分 抱き幅、

六寸 衿下り、五寸五分 衿幅、四寸、相褻幅、三寸五分 衿下、一尺

八寸内外 衿幅、一寸五分 出褻、三分内外 衿、一尺七寸五分。

裁ち方積り方。

施及表裏の裁ちび積り方、男綿入に同じ。

標の附け方。

男綿入に同じ(但し袖口は廣袖)。

縫ひ方。

男綿入に同じ。

衿け方。

男綿入に同じ、袖口は、六分の衿け代にして、針目八分位にして、綿を綴ち附け、出褻を定めて、袖口を衿ける。

上巻終

襦袍

大正十五年十一月一日印刷
大正十五年十一月六日出版

定價各册金壹圓五拾錢

不許複製

編輯者兼

東京市本郷區湯島六丁目十番地
財團法人渡邊女學校出版部

滋

印刷者

東京市小石川區西古川町二十五番地
渡邊一郎

郎

印刷所

東京市小石川區西古川町二十五番地
中外印刷株式會社

發行所

東京市本郷區湯島六丁目十番地
渡邊女學校出版部

振替貯金口座東京一九八二〇番
電話小石川三七五八・七三六八番

發行圖書目錄

書名	冊數	定價	內容說明
裁縫全書部	一	貳圓	單衣に關する語原沿革より全般の裁ち方縫ひ方等の一切を擧げて専門教育の資料とするに絶好の書である家庭の主婦の手引としても亦無上の好伴侶
同 裕綿入の部	一	貳圓	單衣に次いで裕綿入に關する全部の知識を網羅し詳細無比の書、教科書としても、参考書としても、共に適切なものである
同 肌着帯の部	一	貳圓拾錢	肌着と云ふ肌着、帯と名のつく帯は悉く擧げてある一讀手に取るやうに分る教科書としても、學生の参考書としても、最良の書なるのみならず又教師の必携すべき良書である
同 羽織袴の部	一	貳圓拾錢	上の三書にこの羽織袴を加へて和服一通りの裁縫書が完備します、これを修了すれば専門教師としても恥かしい所なく主婦としての知識も十二分である
同 兒童部	一	四圓	小兒を洋裝にすることの可否は最早問題ではなく實行の域に入つて居る本書は最新型の内容を以て満たされたもので幾多洋服書中最第一のものとの定評
同 高等裁縫及雜の部	一	參圓拾錢	前に掲げた四つの和服書に盡せない和服類と普通和服以外に世に用ひられる數多の特種品の裁縫に就いて詳説したもの、高等和服研究家の種本である
同 束帯の部	一	貳圓	束帯五衣は昔の衣服では無い今日でも宮中には用ひられる本邦特有の文化の表現物である日本人の眞の大禮服である畫家も風俗研究家も常に參考して居る唯一のものである
裁縫全書部 男洋服の部	一	貳圓	内地の仕入れ洋服書とは全く撰を異にし著者が多年米國にありて根本から研究したもので解剖學上からの割出しに依つて學問的に説明したものであるから他に類のないことは勿論である
中等教育 新裁縫教科書	三	各冊貳圓 五拾錢	中等教育用として繁簡中を得且最新研究の結晶であつて勿論メートルを本位とした絶好の教科書今後の裁縫は本書に依らなくては何一つ出来ないと思つてもよい位である
裁縫科法 新教授	一	貳圓	裁縫科教授の面倒なものは無い又此位良教授法書の少い科もない著者吉村氏は多年その研究に従事せられ世に名を聞えたる人であるから本書の内容に就ては論ずるまでもないことである
裁縫科 教授改善資料	一	貳圓	著者渡邊滋氏獨得の裁縫論あり詳細緻密の研究あり教員諸子に對する親切なる指導あり故に教授者たる者一度は必ず讀むべき書である

310
242

文部省教員檢 定試験家事裁 縫科問題解答集	一	五 圓	家事裁縫の文檢を受けるのに本書を讀まないのは航海に羅針盤を持たないと一般である合格を望む方は是非本書を一讀せられよ
同上増補 (十三年度) (十三年度) (十四年度)	一 一 一	各冊 壹 圓	上の増補で爾後年々續刊します、十五年度の分も最近に出來ます
渡邊裁縫新書	二	各冊壹圓 五拾錢	本校の移轉新築落成記念の爲社會奉仕的安價を以て發行せる書にして普通和服全般に就て平易懇切に圖解せる新書で總て鯨尺を用ひ家庭獨習用としては勿論教科書參考書としても最新の良書である
綜合的 新教育大意	一	二 圓	土屋清一氏著文檢教育大意受験用として著述した最平易で最新しい書物最近までの試験問題が分類して載せてある
月刊裁縫と家事	一月 .50郵稅0.02 六月3.00郵稅不要		裁縫家事に關する論說研究等を滿載してある教師の參考してもよい又文檢受験者の必讀雜誌である

以上の各書は郵送料一冊ならば金拾貳錢(東京市内は金八錢)二冊以上及滿、鮮、台、樺、は目方に依つて違ひます

東京市本郷區湯島六丁目
渡邊女學校出版部
電話小石川三七五八番・七三六八番・七三六九番
振替口座東京一九八二〇番

終